NIIGATA NIIGATA NIIGATA NIIGATA NIIGATA NIIGATA NIIGATA NIIGATA NIIGATA NIIGATA

niigata
新型イニシアティブ～知識と意識で3Rを推進～

第14回 in 新潟 3R推進全国大会

開催報告書

●開催日　令和元年10月29日（火）
●会　場　朱鷺メッセ
　　新潟コンベンションセンター

令和2年3月

第14回３Ｒ推進全国大会実行委員会

環境省　環境省関東地方環境事務所　新潟市　３Ｒ活動推進フォーラム

目　次

１．大会概要 1

２．式典

（１）主催者挨拶 4

石原宏高環境副大臣　中原八一新潟市長　崎田裕子３Ｒ活動推進フォーラム副会長

（２）来賓挨拶　佐藤豊美新潟市議会議長 6

（３）表彰式　循環型社会形成推進功労者環境大臣表彰 7

３Ｒ促進ポスターコンクール最優秀賞表彰 8

３．記念シンポジウム

（１）基調講演　「SDGs と３Ｒ促進、地域循環共生圏構想の推進」 9

環境省中央環境審議会循環型社会部会委員・３Ｒ活動推進フォーラム副会長 崎田裕子氏

（２）事例発表　新潟発「ライスバレーにいがたプロジェクト」 21

株式会社バイオマスレジン南魚沼 専務取締役 経営企画室 室長 中谷内美昭氏

（３）パネルディスカッション　～食品ロス削減へ！これからのイニシアティブ～ 27

＜コーディネーター＞

NPO法人持続可能な社会をつくる元気ネット理事長　崎田裕子氏

＜パネリスト＞

新潟薬科大学応用生命科学部特任講師　石丸亜矢子氏

イオンリテール株式会社　北陸信越カンパニー

広報・環境社会貢献グループ　マネージャー　山城篤司氏

新潟お笑い集団ＮＡＭＡＲＡ　代表　江口歩氏

新潟気軽に省エネくらぶ　代表　波多野千代氏

環境省環境再生・資源循環局総務課循環型社会推進室長　冨安健一郎氏

（４）次回開催地挨拶　和歌山県環境生活部環境政策局長 古川勉氏 41

４．３Ｒ推進展示コーナー 41

５．名刺交換会 42

６．関連イベント

（１）施設見学会 43

（２）にいがた市民環境フェア 43

７．資料

（１）第 14 回３Ｒ推進全国大会開催案内（参加申込書） 44

（２）参加者用パンフレット 45

（３）来場者アンケート 46

（４）報道掲載記事 51

１．大会概要

●**開催日時**　令和元年10月29日（火）　13：00～16：30

●**会　　場**　朱鷺メッセ　新潟コンベンションセンター　国際会議室（マリンホール）
（〒950-0078　新潟市中央区万代島6番1号）

●**主　　催**　環境省、環境省関東地方環境事務所、新潟市、３Ｒ活動推進フォーラム

●**後　　援**　新潟県

●**開催内容**

（１）式典（13：00～13：55）

・主催者挨拶　石原宏高環境副大臣
中原八一新潟市長
崎田裕子３Ｒ活動推進フォーラム副会長

・来賓挨拶　佐藤豊美新潟市議会議長

・表彰式　循環型社会形成推進功労者環境大臣表彰
３Ｒ促進ポスターコンクール最優秀賞表彰

（２）記念シンポジウム　新型(niigata)イニシアティブ～知識と意識で３Ｒを推進～（14：20～16：25）

・基調講演「SDGsと３Ｒ促進、地域循環共生圏構想の推進」
環境省中央環境審議会循環型社会部会委員・３Ｒ活動推進フォーラム副会長　崎田裕子氏

・事例発表　新潟発「ライスバレーにいがたプロジェクト」
株式会社バイオマスレジン南魚沼 専務取締役 経営企画室 室長 中谷内美昭氏

・パネルディスカッション　～食品ロス削減へ！これからのイニシアティブ～

＜コーディネーター＞

NPO法人持続可能な社会をつくる元気ネット理事長	崎田裕子氏

＜パネリスト＞

新潟薬科大学応用生命科学部特任講師	石丸亜矢子氏
イオンリテール株式会社　北陸信越カンパニー 広報・環境社会貢献グループ　マネージャー	山城篤司氏
新潟お笑い集団ＮＡＭＡＲＡ　代表	江口歩氏
新潟気軽に省エネくらぶ　代表	波多野千代氏
環境省環境再生・資源循環局総務課循環型社会推進室長	冨安健一郎氏

（３）次回開催地挨拶（16：25～16：30）
和歌山県環境生活部環境政策局長　古川勉氏

（４）３Ｒ推進展示コーナー

（５）名刺交換会

（６）関連イベント
施設見学会
にいがた市民環境フェア

●**参加者数**　400名

●会場風景

会場となった朱鷺メッセ 新潟コンベンションセンター

1F エントランスホール

大会の受付

会場全景

大会式典の模様

受賞者記念撮影

２．式典

（１）主催者挨拶

●石原宏高氏（環境副大臣）

まず初めに、今回の台風15号及び19号そして21号の影響による豪雨によって被害に遭われた全ての被災者の皆様に心よりお見舞いを申し上げます。

本日は３Ｒ推進全国大会に御参加を頂き誠にありがとうございます。また本大会の開催に御尽力頂いた中原市長をはじめ、新潟市の皆様、そして関係自治体、関係団体の皆様に心より感謝を致します。大会の開催にあたり環境省を代表して、一言御挨拶をさせていただきます。

人類の生存の基盤である恵み豊かな環境を将来の世代に引き継いでいく為には、３Ｒ、すなわち廃棄物のリデュース・リユース・リサイクルを徹底した循環型社会を国民の皆様はじめ、幅広い関係者が一体となって構築することが必要です。今回で14回目となる本大会は、循環型社会の構築に向けて幅広い関係者が一同に会し、それぞれの取組についての理解を深め、更なる取組の契機とするとともに、３Ｒの具体的な取組を全国に発信する重要な機会であります。その為、本大会では、地域において様々な形で循環型社会の形成に貢献されてきた方々の表彰を行います。本日表彰を受けられる皆様に心からお祝いを申し上げるとともに、今後ともより一層の御活躍を期待申し上げます。

また、ポスターコンクールにおいて約5,500点の応募作品の中から見事最優秀賞を受賞された小学生、中学生の皆さん、本当におめでとうございます。コンクールのテーマである３Ｒを忘れずに、毎日の生活の中で３Ｒの取組を続けて頂きたいと思います。

環境省では、昨年６月に閣議決定をされました第四次循環型社会形成推進基本計画の下、３Ｒの促進に向けた取組を進めております。毎年10月は３Ｒ推進月間として、国民の皆様に限りある資源の大切さを考え、３Ｒの意義を理解していただくことに加え、一人でも多くの方にそれを行動し実践する機会として頂けるようなイベント等を展開しております。例えば、10月から12月の中旬まで「選ぼう！３Ｒキャンペーン2019」という取組を実施しております。このキャンペーンは、皆さん一人一人がリデュース等につながる対象商品を購入することで３Ｒや資源の大切さを知って頂く新しい試みです。スーパーやドラッグストアなど、全国約6,700店舗で実施をしておりますので是非御参加を頂きたいと思います。

改めまして本大会が、３Ｒに関する一層の取組促進の契機となるとともに、全国に対する効果的な情報発信の機会となることを心から祈念しまして、私の御挨拶とさせて頂きます。

●中原八一氏（新潟市長）

只今御紹介頂きました、新潟市長の中原でございます。御挨拶の前に先の台風 19 号によりましてお亡くなりになりました方々の御冥福をお祈り申し上げますと共に、被害に遭われた皆様に心からお見舞い申し上げます。また、一日も早い復旧復興をお祈りする次第です。

本日は、第 14 回３Ｒ全国推進大会がこのように多くの御来賓を始め、３Ｒの推進や環境問題に関心の高い皆様、また全国で実践活動をされている皆様から御参加を頂き、このように盛大に開催できますことを大変喜ばしく思っております。また、ここ新潟市においで頂いた皆様を心から歓迎申し上げます。

昨今、世界各地で発生しております自然災害の状況を見ますと本大会の趣旨である３Ｒを推進し、持続可能な循環型社会を実現することが喫緊かつ重要な課題となっています。環境に対する関心の高まりの中で、プラスチックによる海洋汚染、また食品ロスも国内外で解決が迫られていることは皆様御承知のとおりです。そうした中、今年５月に本日の会場でもあるここ朱鷺メッセにおいてG20 新潟農業大臣会合が開催され、閣僚宣言では食品ロスに関する内容も盛り込まれました。同じ年にこの３Ｒ推進全国大会を新潟市で開催できることは大変意義深く、我々としまして誇りと喜びを感じております。本日は、こうした課題に関する基調講演、事例発表そしてパネルディスカッションが予定されております。今月 10 月に食品ロスの削減の推進に関する法律が施行されたこともあり、本日の大会が皆様にとって今後の取組のきっかけやヒントになり、本大会のサブテーマの通り、新潟から３Ｒの知識と意識が広がっていくことを心から願っております。本市としましても、今日を新たなスタートとして３Ｒを推進し、循環型社会の形成を加速して参ります。

さて、新潟市は今年開港 150 周年を迎えました。「みなとまち新潟」ブランドの創造と魅力向上を図ろうとこれまで各種記念事業を展開しており、10 月からは JR 東日本の新潟県庄内エリアデスティネーションキャンペーンが始まっております。テーマのガストロノミー（美食）に合わせた独自企画、古町花街美食巡りは、特典付きの飲食チケットを購入すると色々なお店をはしごしながら、新潟ならではの料理や地酒を堪能することができます。ぜひこの機会に新潟をお楽しみ頂ければと思っております。

結びに、この３Ｒ全国推進大会の開催にあたり御尽力をいただきました、石原環境副大臣をはじめ環境省の皆様、また３Ｒ活動推進フォーラムの皆様、そして会場にお集まりの皆様の今後ますますの御健勝と御発展をお祈りし、また御協力頂きました関係者の皆様に感謝を申し上げ、一言開会の御挨拶と致します。

●崎田裕子氏（３Ｒ活動推進フォーラム副会長）

只今御紹介に預かりました３Ｒ活動推進フォーラムの副会長を務めております、崎田裕子です。先程副大臣、そして市長からもお話がありましたように、昨今の大きな台風や大雨の被害で、まだ御苦労をされている方も大勢いらっしゃることと思います。心からお見舞い申し上げます。

本日は、第 14 回３Ｒ推進全国大会にこのように多くの方にお集まりいただきありがとうございます。そして、循環型社会形成推進功労者環境大臣表彰を受賞される皆様おめでとうございます。また、３Ｒ促進ポスターコンクールで最優秀賞を受賞される皆様もおめでとうございます。このポスターコンクールは、全国から 6,000 人近い方に御応募いただく全国最大規模の３Ｒポスターコンクールと言われております。功労者表彰の皆様と共に、この受賞を機会に、一層活動を進めていただければ大変ありがたいと思っております。

この３Ｒ推進全国大会は、環境省及び自治体の御協力を得て、10 月の３Ｒ推進月間に開催しております。今回の第 14 回３Ｒ推進全国大会は、新潟市様の御協力をいただきまして、朱鷺メッセで開催することができました。新潟市様、そして御関係の皆様に心から御礼を申し上げます。

３Ｒ活動推進フォーラムは、平成 18 年に設立されました。そのきっかけは、平成 16 年の６月にアメリカのシーアイランドで開催されたＧ８サミットにおいて、当時の小泉首相が、ごみの発生抑制リデュース、再使用リユース、そして再生利用リサイクル、この３Ｒ推進を目指す循環型社会の形成に向けて３Ｒイニシアティブを提唱し、合意されました。翌平成 17 年に、我が国は３Ｒを通じた循環型社会の構築を国際的に推進することを目指し、日本の行動計画として、ごみゼロ国際化行動計画を発表しました。こうした動きを踏まえて、我が国の３Ｒに関する社会的な取組を循環型社会への変革へ向けて進めるために、それまであったごみ

ゼロパートナーシップ会議を拡充させて、３Ｒ活動推進フォーラムが平成18年１月にスタートしました。このフォーラムは現在、全国自治体が72会員、民間団体が68会員、あわせて140団体で構成されております。具体的な活動としては、本日のような３Ｒ推進全国大会や小中学生を対象にした３Ｒ促進ポスターコンクール、その他自治体や民間団体の皆様と連携した３Ｒの様々なセミナーなど、広報活動を積極的に展開しております。今年の６月にG20 が大阪で開催され、海洋ごみ問題を含めてプラスチックの問題が取り上げられ、各自治体においてもプラスチック対策、海洋ごみ対策にしっかり取り組んでいく大きな流れができました。そして３Ｒ活動推進フォーラムも環境省、自治体、企業、NPO、このような皆様と連携して３Ｒを一層広めていくことが大きな役割だと感じております。プラスチックの他、昨今食品ロスの削減も大きな世界的な課題になっております。これらをテーマに、この後シンポジウムで広げていきたいと考えております。この３Ｒ活動推進フォーラムは日本国内で活動しております。引き続き環境省、地方自治体、民間団体、企業など多くの皆様と連携をしながら循環型社会の形成に向けて一層活動を広げてまいります。

今日これからの時間、皆様に有意義に過ごしていただき、本日の３Ｒ推進全国大会が、様々な大きな一歩に繋がることを心から祈念しております。どうぞよろしくお願い致します。

（２）来賓挨拶

●佐藤豊美氏（新潟市議会議長）

新潟市議会議長の佐藤豊美でございます。第14回３Ｒ推進全国大会にあたり新潟市議会を代表致しまして一言御挨拶を申し上げます。本日３Ｒ推進全国大会が盛大に開催されますことを心からお慶び申し上げますとともに、全国から多くの皆様方をお迎えできたことは誠に光栄であり、心より感謝申し上げます。また後ほど栄えある表彰をお受けになられます方々におかれましては、循環型社会の形成のために多大な御貢献をいただいており、その御功績に対して深く敬意を表しますとともに、心よりお祝いを申し上げます。

さて、今日私達は豊かな生活を送る一方で、地球温暖化や将来的なエネルギー資源の枯渇など地球規模での様々な環境問題に直面しております。この美しい地球を守り、限りある資源を次の世代にしっかりと引き継いでいく為にも、これまでの大量生産、大量消費、大量廃棄のシステムを見直し、循環型社会の構築に向けた取組を社会全体で推進していくことが必要であると考えます。このような中、本日行われる記念シンポジウムや多彩な催しを通じて、３Ｒの趣旨について理解を深めていただくとともに社会全体の循環型社会への関心が高まり、持続可能な循環型社会の実現に向けた取組が今後さらに加速されることを期待しております。

結びに、この３Ｒ推進全国大会の開催にあたり御尽力いただきました関係者の皆様方に深く敬意を表しますとともに、本大会の成功と本日御参加いただきました皆様方の益々の御健勝と御活躍を祈念致しまして、お祝いの言葉と致します。本日は誠におめでとうございます。

（3）表彰式

●令和元年度循環型社会形成推進功労者環境大臣表彰

循環型社会形成推進功労者環境大臣表彰は、先駆的又は独創的な取組により、循環型社会の形成について顕著な成果を上げている企業、団体又は個人に対して、環境省が毎年表彰しているもので、令和元年度は、企業６件、団体６件が表彰されました。受賞者と功績内容は以下の通りです。

区分	都道府県	企業名・団体名	取組内容
団体	青森県	青森県生活協同組合連合会 生活協同組合コープあおもり 青森県民生活協同組合	1990年から県内でいち早く牛乳パックの回収を開始。その後もアルミ缶、食用廃油、古紙の回収を県内12店舗及び周辺地域にて開始するとともに、マイバッグの推進、クリーンBOX設置費用補助による分別収集の促進、植樹活動等による環境保全に関する啓発活動にも取り組んでいる。
	新潟県	新潟気軽に省エネくらぶ	平成13年から、自治会や地域コミュニティ協議会との連携や自主製作パンフレットで、地球温暖化防止に向け3Rの必要性と普及に貢献。家庭の生ごみの堆肥化活動等、家庭で気軽に取り組める3Rの取組みを紹介し啓発活動を持続している。
	富山県	富山県立砺波工業高等学校生徒会	20年に渡り、地域の行事等で壊れたおもちゃの修理・リユース活動「おもちゃの病院」を実施。機械工学部、電気工学部及び電子工学部の生徒が中心となり、授業で身につけた知識と長年の活動のノウハウで、地域の子供たちの環境教育やごみの発生抑制に大きく貢献している。
	鳥取県	社会福祉法人養和会　エポック翼	鳥取県で唯一福祉サービス事業所でリユース食器レンタルを行っている。リユース食器を利用した各種イベント会場にも積極的に出向き、情報発信をし利用促進に貢献している。「環境と福祉のコラボレーション」を活動方針としており誰一人取り残さない社会の実現と環境負荷の低減に貢献している。
	岡山県	和気町環境衛生指導員協議会	地域の環境美化に努めるとともに、循環型社会の形成に向けての普及啓発を行ってきた。「和気町レジ袋有料化」の取組みによるレジ袋の削減や資源化物の分別収集を実施。分別収集された生ごみはたい肥化処理をし、住民に配布するなど、和気町の主要産業である農業にも貢献している。
	徳島県	緑のリサイクル・ソーシャル・エコ・プロジェクト・チーム	公園等で発生する「刈草」を焼却処分すると多量にCO_2を排出することに着目。「刈草」を100%リサイクルした資源循環型肥料を開発し、県内外での出前授業等を通じて配布し、普及啓発活動に取り組んでいる。
企業	北海道	金滴酒造株式会社	平成25年より、酒粕を利用した新商品開発による産業廃棄物の完全削減を実施。今まで処分していた酒粕を、肉牛農家における試験利用を経て、家畜の飼料化を実現。また、地元の食品加工会社にも協力を仰ぎ、各社に無償で酒粕を提供し、商品化に向けた試験製造を依頼し、酒粕の新規利用先の開発に成功した。
	福井県	坂井森林組合	長年に渡り、間伐材から木質チップを製造し、防草材に有効活用するリサイクルを行うとともに、近年は化学メーカーと協働し、間伐材を原料とした製品を製造する先駆的な取組み等を行い、リサイクルの推進に貢献している。
	岡山県	平林金属株式会社	独自技術を用いたリサイクルプラントを整備し、ベースメタルや希少金属類、プラスチック等の高度な回収・リサイクルを実施。また、家庭で不用となった小型家電や金属類等を回収する有人型資源集積システム「えこ便」を全国で初めて構築し、県民にリサイクル活動を普及させ、廃棄物の適正処理及び循環型社会の形成に大きく貢献している。
	岡山県	水島エコワークス株式会社	倉敷市や水島コンビナートの廃棄物を県内唯一のサーモセレクト方式のガス化溶融処理システムにより100%再資源化し、資源循環型社会の実現に貢献。平成30年7月豪雨で岡山県において発生した災害廃棄物の処理にも貢献。また、環境教育の一環として、長年にわたり施設見学を実施している。
	福岡県	株式会社ジェヌインアールアンドディー	醤油粕から天然ヒト型セラミドを高純度で安定的に生成する技術開発に成功し、機能性化粧品やサプリメントなどの原料として実用化した。また、その残渣も、飼料としてリサイクル可能で、循環型社会の形成に優れた事業モデルを実施している。
	福岡県	株式会社博水	かまぼこの原料である「えそ」の頭や内臓など、これまで未利用で廃棄されていた部位に着目。「えそ」の魚犀を利用した天然調味料「魚醤」を開発製造し、食品廃棄物リサイクルに貢献している。

循環型社会形成推進功労者環境大臣表彰の表彰式（写真左は企業の部、右は団体の部）

●令和元年度３Ｒ促進ポスターコンクール最優秀賞表彰

３Ｒ促進ポスターコンクールは、環境省と３Ｒ活動推進フォーラムが全国の小学生と中学生を対象に、３Ｒを促進するための普及・啓発用ポスターを公募し、優秀な作品を選考・表彰することにより、国民一人一人が循環型社会のあり方について考えるきっかけにすることを目的としています。募集は令和元年６月４日～９月12日の期間に行われ、小学生低学年の部548点、同中学年の部1,531点、同高学年の部1,648点、中学生の部1,813点、合計5,540点の応募があり、各部門で、最優秀賞１点、優秀賞３点、佳作10点を選定し、大会で最優秀賞の表彰を行いました。なお、大会会場では入賞作品のパネル展示も行いました。最優秀賞受賞作品は以下のとおりです。

◆小学生低学年の部
石川県金沢市
小坂小学校　1　年生

◆小学生中学年の部
新潟県新潟市立
上所小学校　4　年生

◆小学生高学年の部
愛知県安城市立
新田小学校　6　年生

◆中学生の部
愛知県知立市立
知立南中学校　2　年生

3R促進ポスターコンクール表彰式

３．記念シンポジウム「新型(niigata)イニシアティブ～知識と意識で３Ｒを推進～」

（１）基調講演「SDGsと３Ｒ促進、地域循環共生圏構想の推進」

環境省中央環境審議会循環型社会部会委員・３Ｒ活動推進フォーラム副会長
崎田裕子氏

（略歴）
ジャーナリスト・環境省登録環境カウンセラー
立教大学社会学部卒業。出版社勤務を経て、ジャーナリストに。環境省中央環境審議会委員、総合政策部会や循環型社会部会委員、３Ｒ活動推進フォーラム副会長の他、NPO法人持続可能な社会をつくる元気ネット理事長、全国おいしい食べきり運動ネットワーク協議会会長などを務める。生活者の視点で社会を見つめ、環境問題、特に「持続可能な社会・循環型社会づくり」を中心テーマに講演・執筆活動に取り組んでいる。

このような場でお話をさせていただく機会をいただきありがとうございます。私は、今御紹介頂きましたように３Ｒ活動推進フォーラムの副会長を務めさせていただいておりますが、普段の仕事は環境エネルギー分野のジャーナリストとして、そしてNPO活動として３Ｒを広げ、循環型地域づくりに熱心に取り組んでおります。市民や地域の目線から環境基本計画、循環基本計画、食品リサイクル法、容器包装リサイクル法、そしてプラスチック資源循環戦略など、色々な検討の場に参加している中で、私は今、循環型社会を皆で一緒に作り、変えていく大事な変革期だと感じております。本日は循環型社会に向けたSDGsと３Ｒ促進、そして地域循環共生圏構想について、政策の検討の場に参加をさせていただく一市民として、私が考えていることなどを話したいと思います。

＜SDGsと第五次環境基本計画、第四次循環型社会形成推進基本計画＞

・SDGｓとは

日本は少子高齢化の人口減少社会ですが、世界全体では2100年くらいまでは人口増加時代と言われており、現在の77億人から2050年には97億人に達するだろう、と言われております（図１）。このままでは世界の資源採掘量は現在の約２倍、そして全ての人が健康に暮らすために必要な食料は1.7倍必要ではないかと国連機関の試算などで言われております。こういう中で、私達全てが幸せな形で暮らしていくには、どのような社会を作るといいのか、国連が明確な方向性を示しております。

2015年、国連が「持続可能な開発のための2030年目標」（SDGs）を採択しました

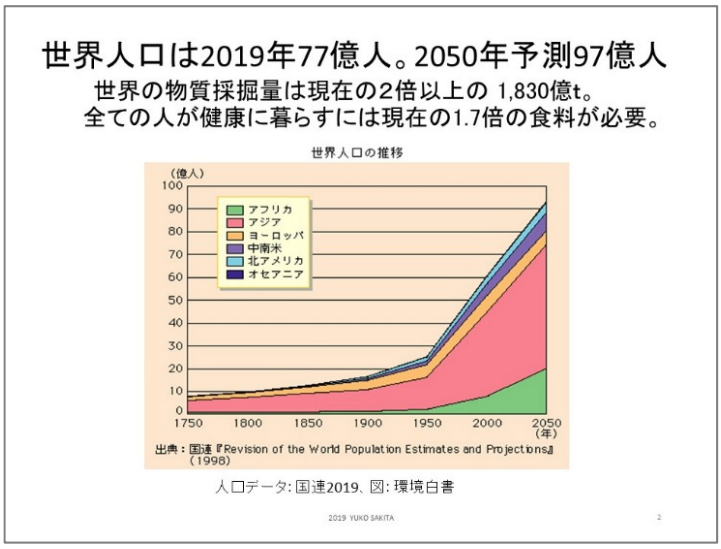


図１

図２

（図２）。今までの国連の目標は途上国支援に関わる内容がほとんどでしたが、今回の大きな特徴は、途上国も先進国も、全ての人たちが誰一人取り残すことなく全員で取り組んでいく、そして世界を変えていくという17の目標と具体的な169のターゲットを明示していることです。SDGsの１～６番は途上国の皆さんにとって大事な教育、水、食料の話が多いですが、解決には多くの国との関りが重要です。７番以降はすべての国に関わる地域づくりや技術開発をしていくというもの。12番からは環境分野で、まず循環型社会を作っていく「作る責任・使う責任」。13番は「気候変動」、14番が海洋プラスチック問題などから「海の自然を守る」、15番は森を守っていく。そして17番は、これらを世界全体、すべての主体が「パートナーシップで取り組む」ことを謳っています。多様な目標が相互に関わりながら持続可能な社会をめざす、こういう流れを作っているところが大事なところです。

図３

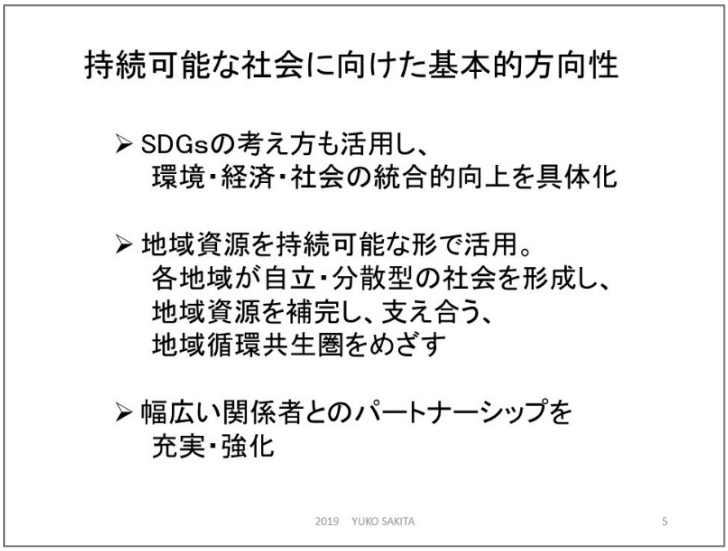


図４

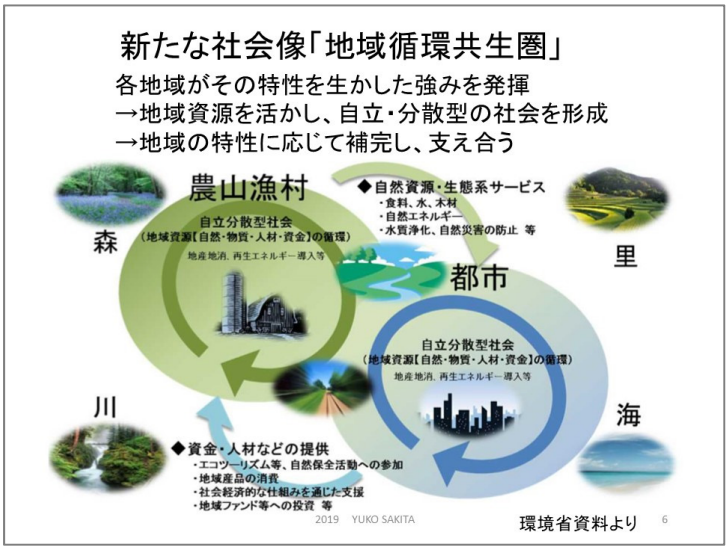


図５

・第五次環境基本計画と第四次循環型社会形成推進基本計画

こういう流れの中で、環境省の中央環境審議会では第五次環境基本計画の検討がありました（図３）。これは2018年４月に発表されたものですが、この検討過程で、国際的な潮流としてSDGsの実現で、持続可能な社会をめざす取り組み方や、パリ協定では温暖化対策として産業革命以降の気温を1.5度上昇で押さえることを世界が努力目標として取り組んでいくという大きな方向性が示され、我が国においても長期成長戦略として2050年以降のできるだけ早い時期にCO2の排出をプラスマイナスゼロとする大きな方向性を打ち出しました。また、我が国の状況としては社会課題としては少子高齢化、経済課題で言えば都市集中など、多くの地域で力を失っていくようなバランスの悪い状況が起きており、どう環境課題を解決しながら経済・社会課題を統合的に解決していくか、そこが大きな検討課題になりました。環境だけではなく、持続可能な社会に向けた基本的方向性を見たときに、１つはSDGsの考え方も活用しながら環境・経済・社会の統合

的な向上を具体化していく（図４）。そして、地域資源を持続可能な形で活用しながら、各地域が自立・分散型の社会を形成して地域資源を補い合い地域循環共生圏を目指す。それを幅広い関係者とのパートナーシップで充実させ、強化するという流れが見えてきました。そしてそれを今回、地域循環共生圏という新たな社会像として示し、各地域がそれぞれの特徴を活かした強みを発揮して自立・分散型の地域社会を作っていきながら、地域の特性に応じて補完し合う将来像を描きました（図５）。これは、環境分野全般で言えることではありますが、循環型社会、今日のテーマの３Ｒの分野でも大変重要になってきております。

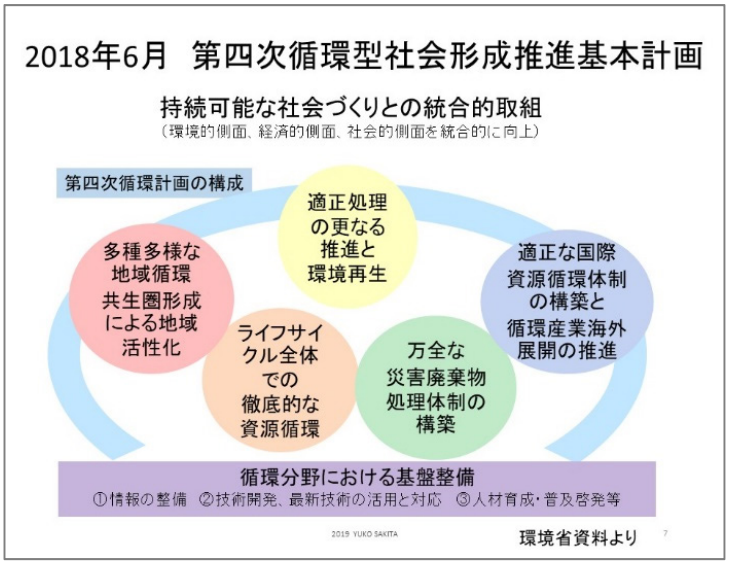


図６

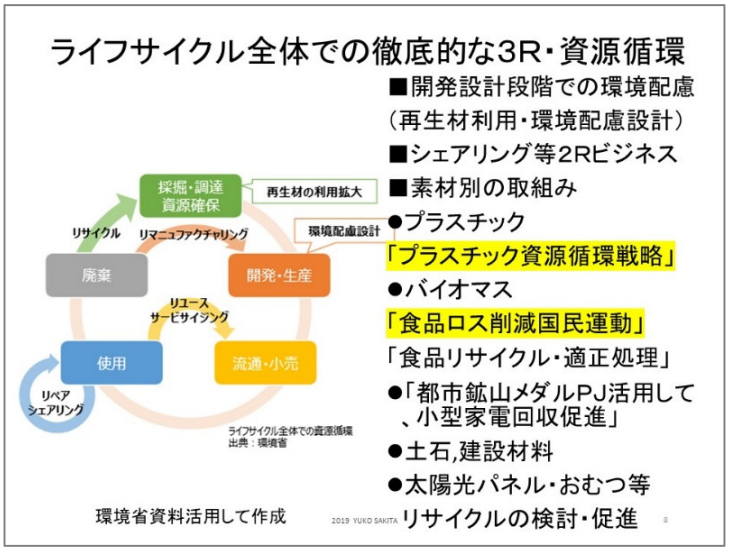


図７

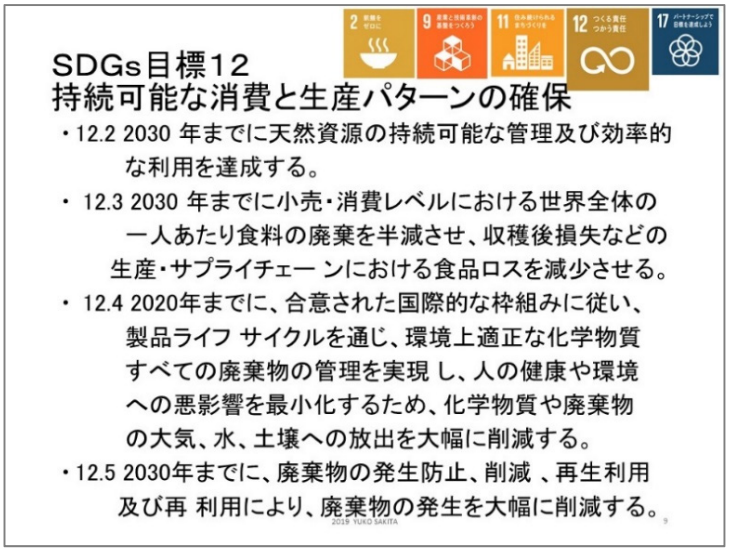


図８

こういう中で、同時に検討が進んだ第四次循環型社会形成推進基本計画において、５つの分野が大きなテーマとなりました（図６）。そのうち、「ライフサイクル全体での徹底的な資源循環」では（図７）、１番目は開発設計段階での環境配慮をしっかりしていく、特に再生材の利用など進めていくということ。そして２番目にはシェアリングなど、リデュース・リユースの２Ｒを徹底的に取り組むことをビジネスにしていくこと。３番目に素材別の取組としてプラスチック、バイオマス、都市鉱山メダルプロジェクト、土石・建設材料、太陽光パネルやおむつ等、まだまだリサイクルの課題が残っていることを話し合いました。プラスチックは、プラスチック資源循環戦略の検討が進み、バイオマスに関しても食品ロス削減の国民運動や食品リサイクルを徹底することが謳われております。これを日本でしっかりと取り組んでいくに際しSDGsの目標と照らし合わせて考えたときに、SDGsの目標の12番と14番、この２つが非常に大きく関連するのではないかと感じております。

この12番（図８）持続可能な消費と生産パターンの確保は特に、私達が循環型社会を作ろうという大事な要素に関してこの項目で書かれていることが大変多いわけですが、12番の２で天然資源の持続可能な管理及び効率的な利用、12番の３は、すべてのサプライチェーンの中での食品ロスそして食品廃棄を

できるだけ減らしていき、世界的には2030年までに半減させる。12番の４では製品ライフサイクル全体を通じて化学物質の適正な管理や、人間への影響を最小限にすることが謳われ、12番の５で廃棄物の発生防止、削減、再生利用が謳われました。また、12番の８には、私達が適正で健康な暮らしを送っていくために、必要な情報をしっかりと共有し取り組んでいくという情報共有の大切さが描かれております。理事長を務めるNPOではそこを大変重要な役割として取り組んでおり、本日も展示コーナーで展示をさせていただいております。

＜食品ロスについて＞

12番の３で出てきた食品ロスについて（図９）。世界的に食品廃棄物が年間13億トン出ており、これは、世界の食料生産の３分の１と言われています。世界の栄養不足人口は８億500万人。これは世界人口の９人に１人と言われていて、１割以上の方々が健康に暮らすだけの食料が足りていないという状況の中で、世界で生産する食料の３分の１が結果的に私達の口に入っていないということです。生産段階の問題、流通段階の問題、消費段階の問題、色々ありますが、特に先進工業国のなかでは消費段階、具体的には小売店とか外食、そしてそれを購入する消費者の生活含め、この段階での食品ロスが一番多いと言われています。一方で、日本の状況はどうかというと、食品廃棄物は2,759万トン（図10）。日本の食用仕向量が8,088万トンで、日本全体の食品の３分の１が廃棄物となっているというのが現状です。日本では、食料自給率がここのところ40%を切っています。本年度の政府の発表を見ますと37%と言われています。世界の農業や漁業、畜産業など色々な方々の力をお借りし、水も大量に活用した、自然の恵みである様々な食品。それを日本に運んでくる間にエネルギーや燃料も使っているわけです。CO2も沢山出している中で、大量の食品廃棄物を出しているという状態。これをどのように減らしていくかが大きな問題ですが、今まで「食品廃棄物はしっかりリサイクルしましょう」とは強く言ってきました。けれどそれだけではなく、「まだ食べられるのに捨てられている食料を出来るだけ減らしましょう」という発生抑制、それが今言われている食品ロス削減ということです。

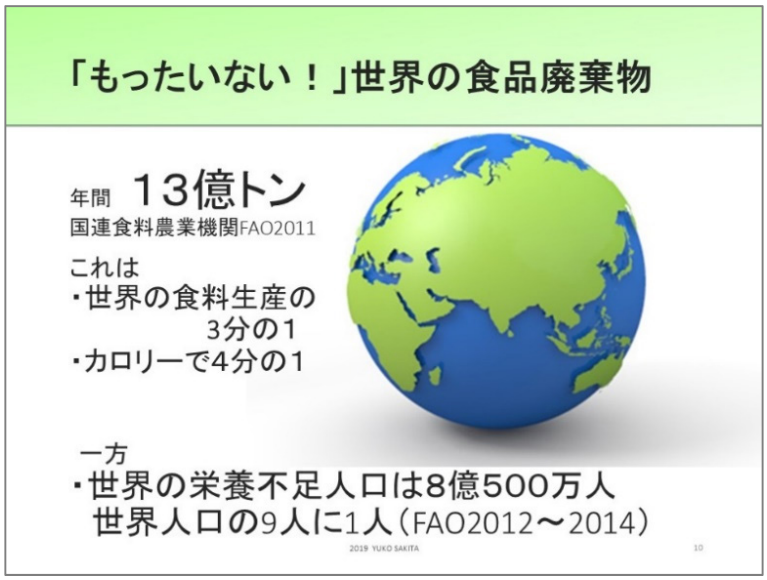


図９

図10

日本の食品廃棄物2,759万トンの約４分の１の643万トンが、まだ食べられるのに捨てられた食品ロスと言われております。国連が毎年世界82か国に食料支援をしている量が年間320万トンですので、世界への支援量の倍の量を日本は捨てているという状況になります。新潟は日本第１の米の産地

ですね。今朝ホテルで美味しいお米をいただいてきたのですが、日本全体のお米の生産量が800万トンぐらいですが、それに匹敵するような食料を、私達はまだ食べられるのに捨てているわけです。これを今、市民・事業者・行政の呼びかけで、皆の力で減らそうという大きなうねりが起こっているわけですが、それに関してはパネルディスカッションのテーマにしていきたいと思っております。

＜海洋プラスチック問題と資源循環＞

・海洋プラスチック問題とは

次に、海洋プラスチック問題について。SDGsの中で目標の14番（図11）に、海洋・海洋資源の保全というテーマがあります。この中に、2025年までに海洋堆積物や富栄養化を含む、特に陸上活動による汚染など、あらゆる種類の海洋汚染を防止し、大幅に削減するという項目があります。また、2020年までに海洋及び沿岸の生態系に関する重大な悪影響を回避するため、レジリエンスの強化などによる持続的な管理と保護を行い、健全で生産的な海洋を実現するため、海洋及び沿岸の生態系の回復のための取組を行うという項目があります。2015年のSDGsの中でも海洋問題が大きな問題になっておりますが、何故このように大きな問題になったのか、お話させていただきます。生態系の中で、ウミガメなど色々な海洋生物のお腹の中に、すでに様々なマイクロプラスチックが入っているのではないか、影響があるのではないか。こういう危惧が大変強くなってきているのはご存知のとおりです（図12）。これは海洋プラスチックによる海洋汚染がどのように広がっているかのモデル予測分布です（図13）。赤い部分が、非常に濃度が高いところですが、日本近海もそのエリアに入っており、東南アジア諸国の周辺のあたりが大変大きく影響している、ということがお分かりだと思います。2016年に、エレン・マッカーサー財団がデータを公表し、2050年には海洋中のプラスチック量が魚など海洋生物の量より増えてしまい、このままで良いのですか、という問いかけをしまし

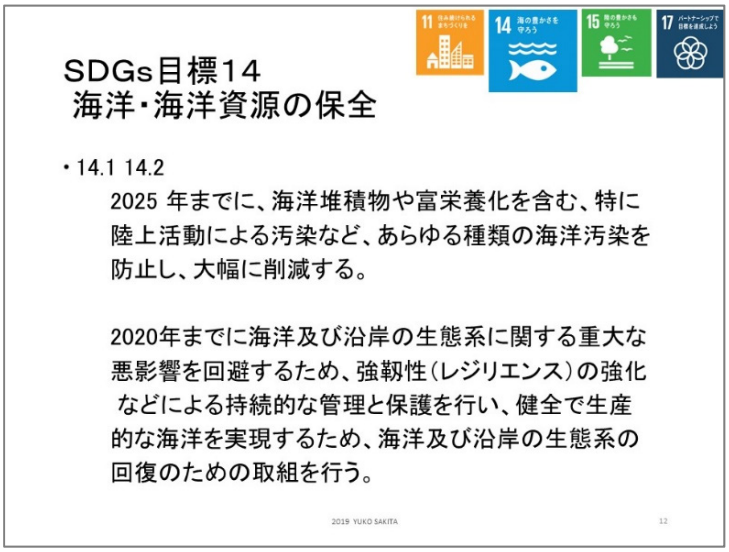


図 11

図 12

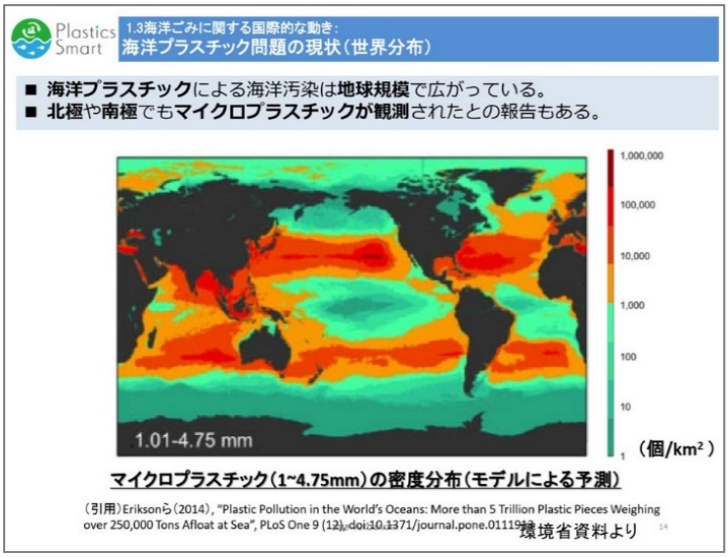


図 13

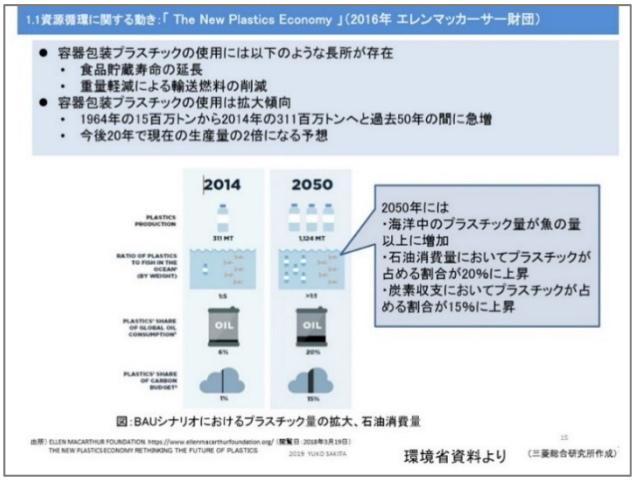


図 14

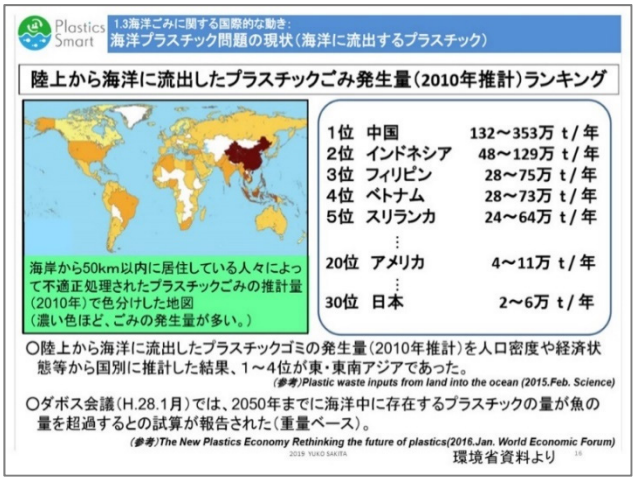


図 15

た（図14）。特に世界の経済界のリーダーたちが集まる会議で呼びかけられ、このあたりから多くの経済界の方たちも中心になり、まずヨーロッパ諸国、ＥＵ諸国の方達の間で本格的に取り組む大きな流れが出てきました。陸上から海洋に流出したプラスチックごみの発生量（図15）を見ると、実は、陸域の中からリサイクルが徹底されずに川から海に出て、海洋を汚染しているプラスチックが結構多いことがわかります。推計したデータの１位は中国、２位がインドネシア、３位がフィリピン、４位ベトナム、５位スリランカ、やはりアジアでこれからしっかりとリサイクルの仕組みを作っていかなければいけません。日本は30位ではありますが、実はもう１つ大事なデータがあります。これは使い捨てプラスチックの量（図16）のデータです。この右の棒グラフは、使い捨て型のプラスチック容器包装を国民１人が１年間にどのくらい排出しているのかという表ですが、アメリカの次に日本が、国民１人が１年間に出す使い捨て型のプラスチック容器包装の量が多く、世界第２位という現状がおわかりいただけると思います。プラスチック容器包装というのは賞味期限、消費期限をしっかりと活かして食品を安全に運ぶのには大変便利なものです。ただしこういう便利さに慣れ、私達は社会の中で安心して使ってきてしまい、その総数が大変多くなっているのです。私達はもう少し、頼らないでもいい部分は頼らないようにするなど、新しいライフスタイルへの見直しが必要なのではないか。こういうことが社会に問われております。

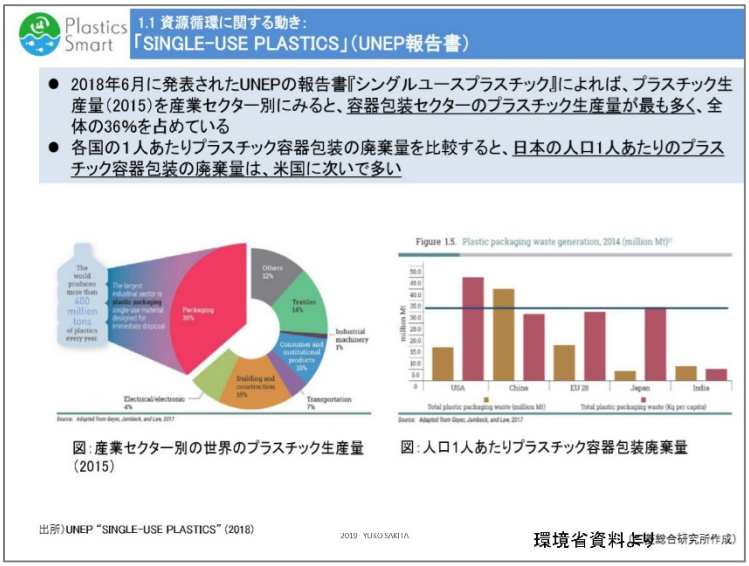
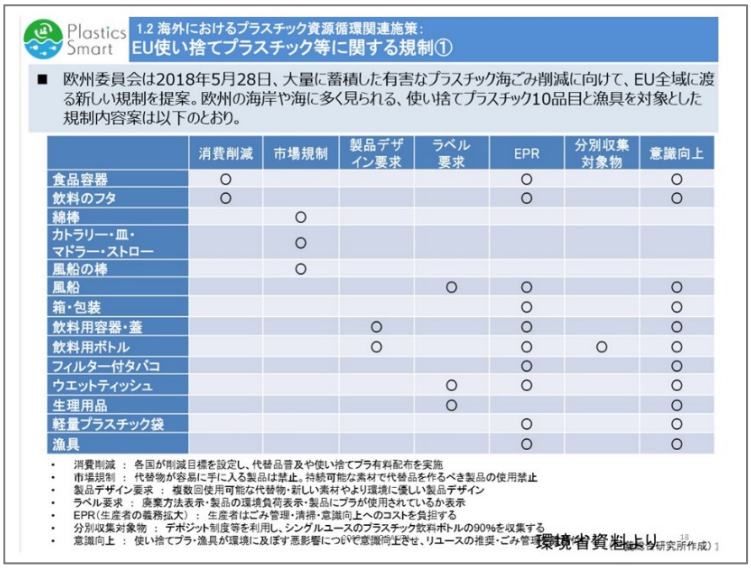


図 16



	消費削減	市場規制	製品デザイン要求	ラベル要求	EPR	分別収集対象物	意識向上
食品容器	○				○		○
飲料のフタ	○				○		○
綿棒		○					
カトラリー・皿・マドラー・ストロー		○					
風船の棒		○					
風船				○	○		○
箱・包装					○		○
飲料用容器・蓋			○		○		○
飲料用ボトル			○		○	○	○
フィルター付タバコ					○		○
ウエットティッシュ				○	○		○
生理用品				○			○
軽量プラスチック袋					○		○
漁具					○		○

図 17

・各国の対策

この表は、ＥＵ諸国の中で使い捨て型のプラスチック容器包装を減らす検討の際、どのような状況かを調査したデータです（図17）。多い方から10品目が並んでいて、ＥＵの海岸で拾ったプラスチックの品物の上位から並んでいるとお考えいただければと思います。この表が発表された時に、企業の皆さんも自分たちができるところから直していこう、という大きなうねりが起こりました。そのうねりの中で、まずは量の多いストローをなくしましょうという流れが起きてきて、ストローをもし捨てられてしまっても自然に還って行くような紙の素材や木の素材で作りましょうとか、今色々なチャレンジが起こっているというのは、こういうデータの影響だとお考えいただければありがたいと思います。一方で、世界各国が問題視している中に、レジ袋があります。私達の暮らしの中で、まず日々の買い物行動の一番入口ですので、何度も使える袋に変えるなどすれば、使い捨て型のプラスチック容器包装に慣れてしまっている暮らしが見直されるのではないかと、各国においてもレジ袋の削減が強く言われております（図18）。日本では、平成18-19年頃に容器包装リサイクル法の見直しの議論の中で、レジ袋を有料化し、消費者に自分が必要なものはお金を払って買ってもらうようにしたらどうかという大きなうねりが起こり、多くの地域で自発的な取組で有料化が進むような流れになってきましたが、法制度にはなりませんでした。表のレジ袋を禁止した各国の中に、バングラデシュ、ブータン、中国、インド、モンゴル、スリランカ、イスラエル、アフリカも入っております。本当はこれからこういうものを便利に使っていきたいと思っていた国が、プラスチックが自然生態系を痛めていく意味に気づいて、禁止令などを作っている、この傾向がおわかりいただけると思います。

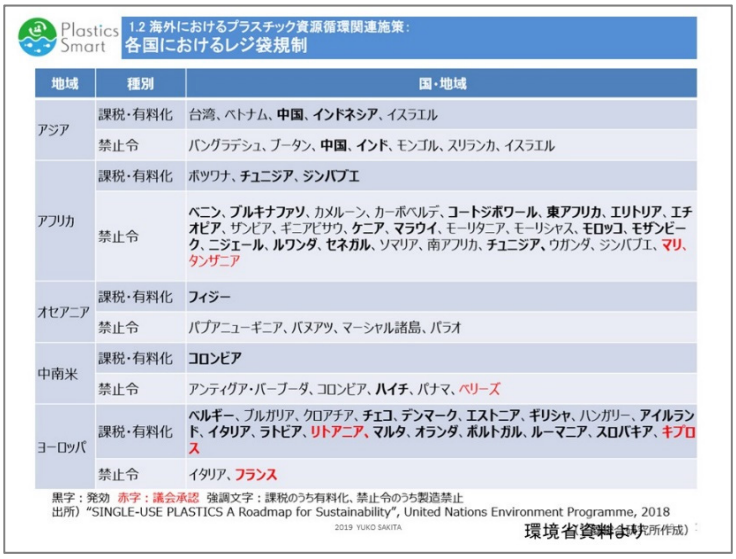


図 18

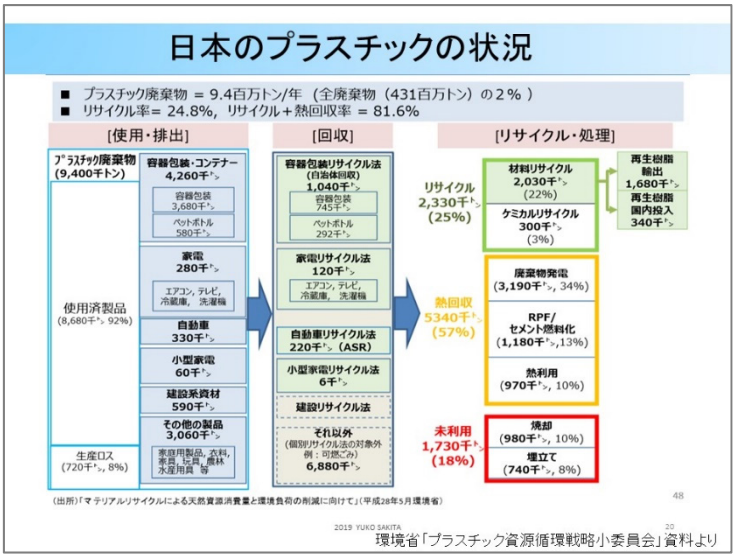


図 19

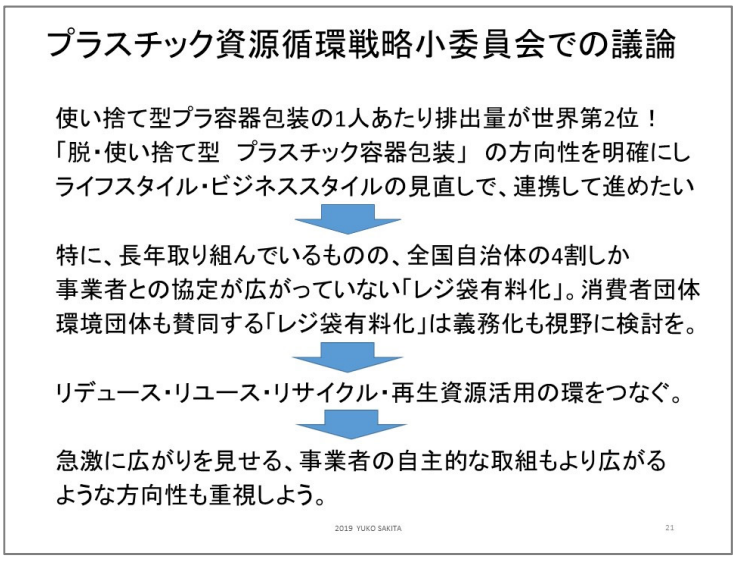


図 20

・日本のプラスチックの状況とプラスチック資源循環戦略

日本でのプラスチックの状況はというと、材料リサイクルとケミカルリサイクルで25%、エネルギー

回収で57%、焼却あるいは埋め立てが18%となっております（図19）。プラスチック資源循環戦略を検討する小委員会に参加させていただきましたが、使い捨て型の容器包装の使用量が１人あたり世界第２位という状況を考えて、脱使い捨てプラスチック容器包装の方向性を明確にしてライフスタイル・ビジネススタイルを見直していく検討が大きく進んできたと思っております。特にこの入り口として、レジ袋有料化が制度化される方向性となり、それ以外にきちんと資源を再生していくなど、色々な検討が進んできたと思っております（図20）。環境省の資料ですが、プラスチック資源循環戦略の在り方についての概要書になります（図21）。ここで、マイルストーンを示し、大きな方向性が出てきたということが大事だと思っています（図22）。今までの日本の環境政策は積み上げ型で色々な将来の方向性を見ることが多かったですが、今回のプラスチック資源循環戦略では、どのくらい減らすのか大きな方向性を先に考え、ではどういうふうにやっていくのかを皆で考えていく流れをとっております。基本原則として３Ｒ＋Renewable、いわゆる再生可能資源活用。そういう視点でしっかり考え、リデュース・リユース・リサイクル、再生材バイオマスプラスチックなどの活用と海洋プラスチック問題の対応、こういう全体像に関して話をしてきました。リデュースは2030年までにワンウェイのプラスチック容器包装を累計25%削減しようという方向が出ております。この流れの中で、皆でできることを取り組んでいくことが大変重要なことだと考えています。

バイオプラスチックについては、生

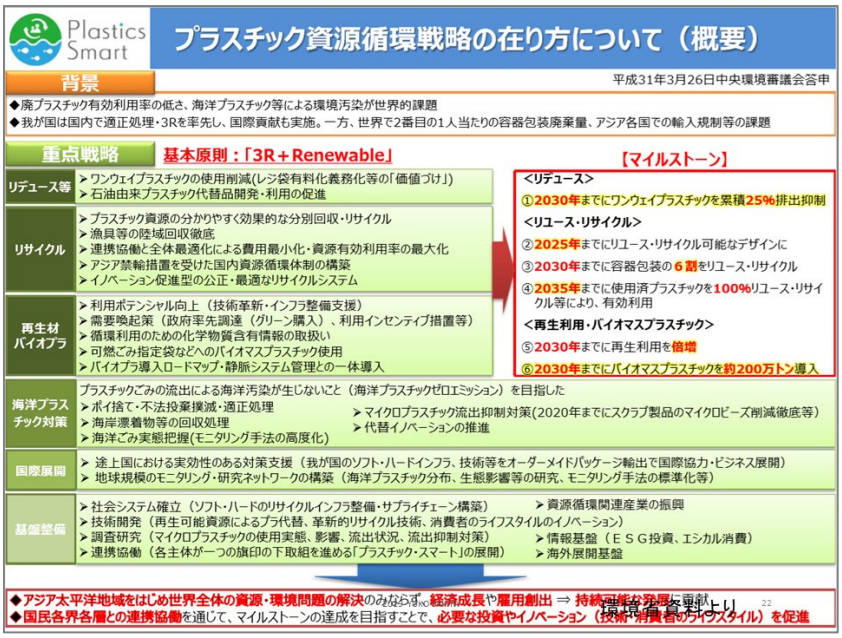


図 21

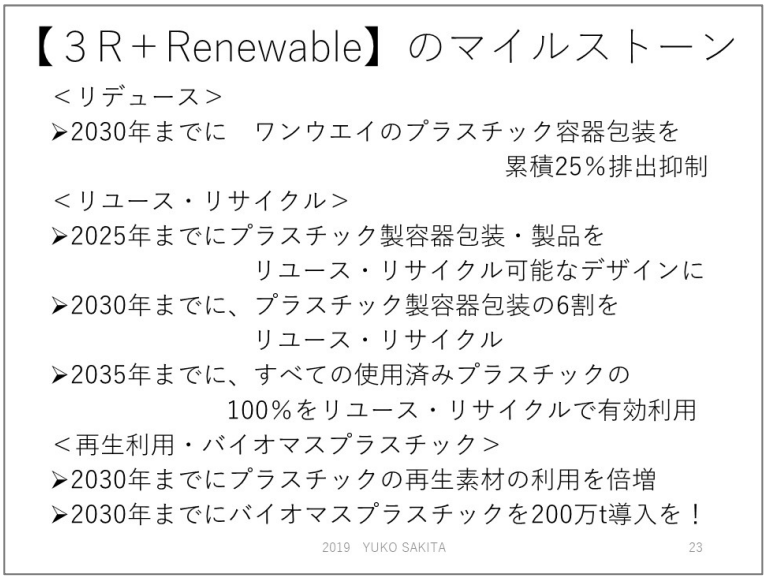


図 22

図 23

分解性とバイオマスを活用したプラスチックと両方ありますが、こういう研究開発を進めていくことも強調されました（図23）。もし使うならばバイオマスを資源としたプラスチックにする、という方向性は非常に大事だと思っております。

「プラスチック・スマート」キャンペーンがスタートしております（図24）。消費者をはじめ、自治体やNPO、企業など、皆で取り組んでいこうという大きな流れです。キャンペーンのホームページでも自分達が取り組んでいることを登録して、皆で共有しながら新しい社会を作っていこうという取組ですが、「プラスチック・スマート」キャンペーンに参加しています、という方いらっしゃいますか？（挙手）ありがとうございます。ゼロという会場もありますけども、今回やはり３Ｒの会議ですのでかなりお手が挙がりました、どうもありがとうございます。こういう輪を広げていきたいと思っております。プラスチックとの賢い付き合い方ということで、ストローを木で作るとか、海ごみゼロアワード2019最優秀賞を受賞した荒川クリーンエイド・フォーラムでは企業の社員研修も受け入れて、皆で川の清掃活動をしようとか、PETボトルの会社がコンビニと連携し店頭回収をしてPETボトルからPETボトルへリサイクルする、完全な循環型ボトルにする取組も始めております。様々な取組が今、進み始めております（図25）。

レジ袋削減について、環境省がとったアンケートのデータをみると、都道府県、あるいは政令市などの４割は、条例あるいは協定などで有料化の実施をしておりますが、６割はまだ未実施だとわかりました（図26）。日本チェーンストア協会の資

環境省「プラスチック資源循環戦略」資料より

図 24

図 25

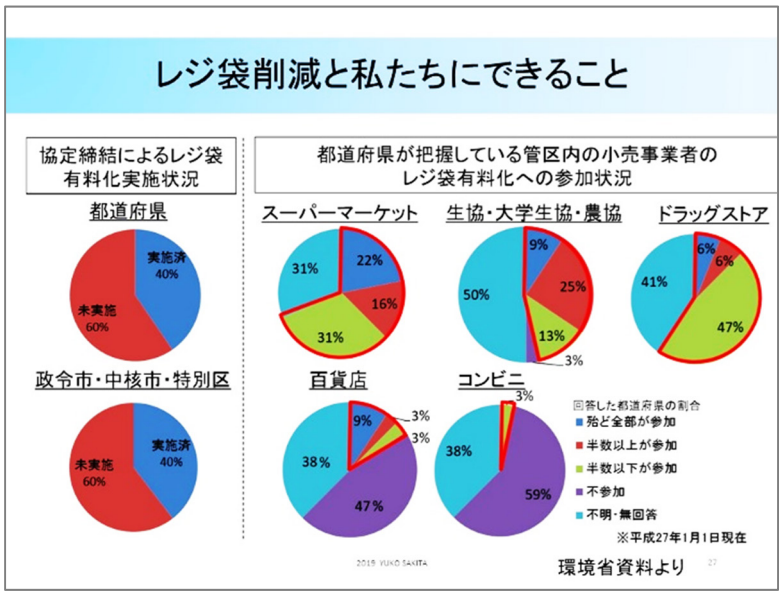


図 26

料では、レジ袋の辞退率が53%という状態（図27）の中で、もっとこれを広げていくにはどうしたらよいか。富山県ではレジ袋有料化を10年前から実施しており、マイバッグの持参率が現在95%となっている（図28）。それに関しても、無料配布を廃止する制度を取りながら、マイバッグを作り普及啓発をし、社会の皆さんで連携しながら取り組んで、こういう数字を確保していることが大変高く評価されております。

・ライフスタイルの見直しを

私達１人１人が、ライフスタイルを見直していくことが重要です（図29）。年齢が高い人が多いと個包装化になり、プラスチック容器包装も増えてきます。どのようにしたらよいか。使い捨て容器包装を使用しない実験的なスーパーも、今、ドイツにできています（図30）。１軒２軒が細々とやっているのではないかと思っていたら、50店舗近くヨーロッパで運営していました。このような形で、やっていけばできることはある、ということで、皆で知恵を合わせ考えていくというのが、これから大事ではないかと思っています。

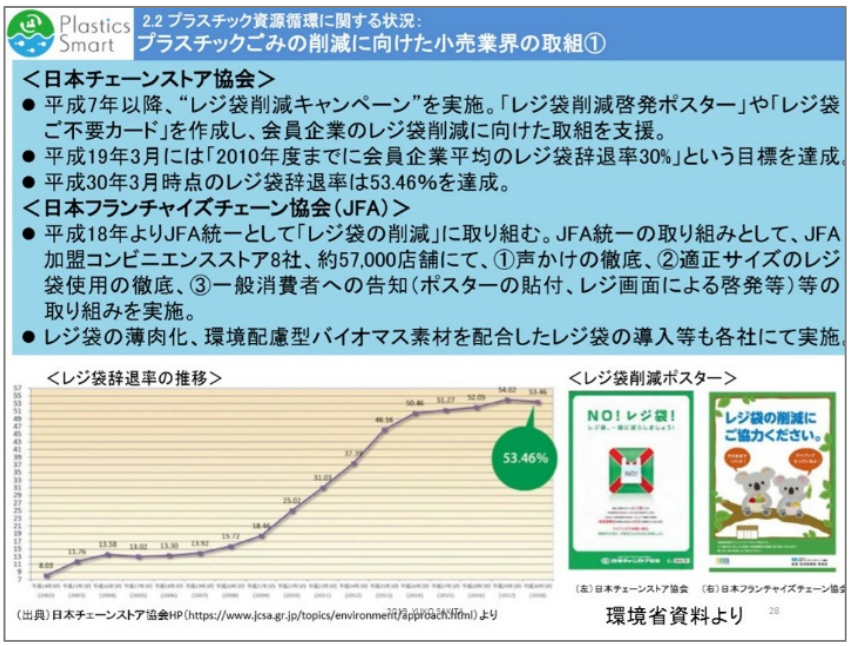


図 27

図 28

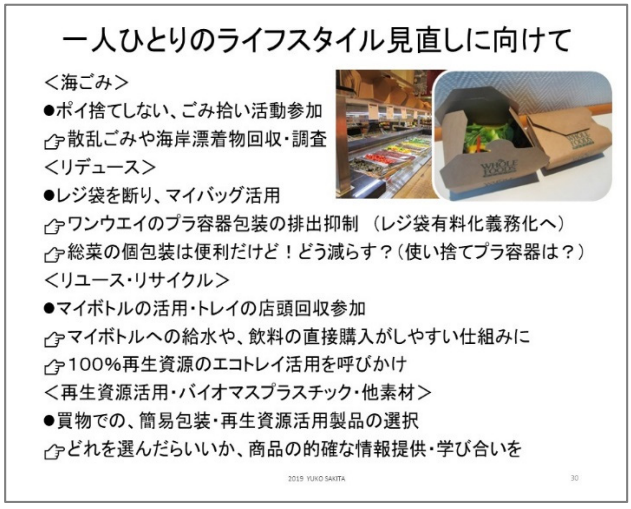


図 29

図 30

図 31

図 32

＜都市型地域循環共生圏を東京2020のレガシーに＞

今、東京2020大会の開催地域では様々な取組が広がっており、私はこれが都市型地域循環共生圏構想のモデル事例ではないかと思っております（図31）。実は私も外部専門家としてこの持続可能な計画作りに参加しております。気候変動や資源循環、大気・水・緑、人権・労働、参加・協働等、色々ありますが、やはりSDGsの目標の実現に貢献する、ということを明確にしています(図32)。特に資源管理に関しては、調達物品の99%を再使用・再生利用、そして運営時廃棄物の65%を再使用・再生利用する（図33）。このような目標で、組織委員会に取り組んでいただいていますが、例えば調達物品はレンタルリースにするなど、どのような取組でこの目標数字に向かっているのか、これを後で皆さんにしっかりと情報提供をしながら、新しい持続可能なゼロウェイストの社会を作るためにどうしたらいいのか、色々な情報が提供できるのではないかと思っています。食品廃棄物も大量に出ると言われています。アスリートの方は体調・健康

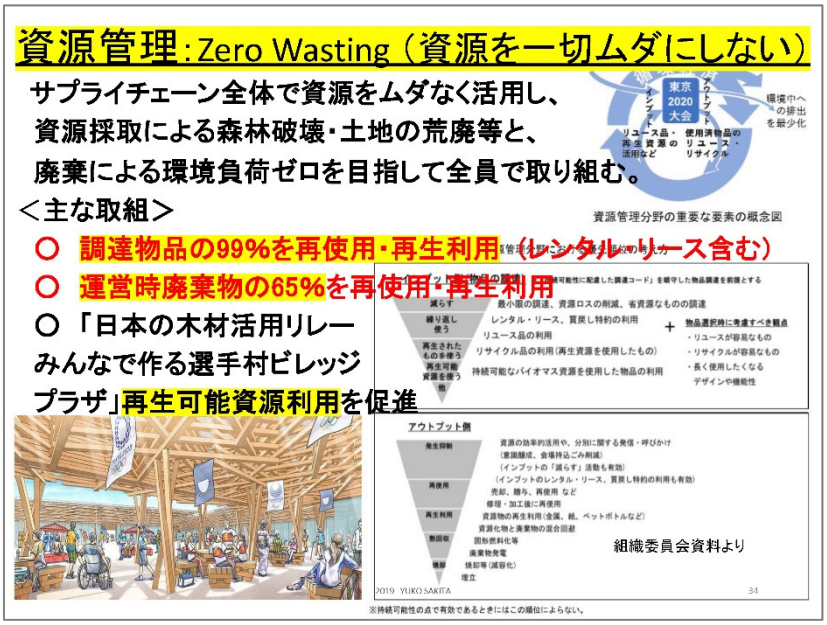


図 33

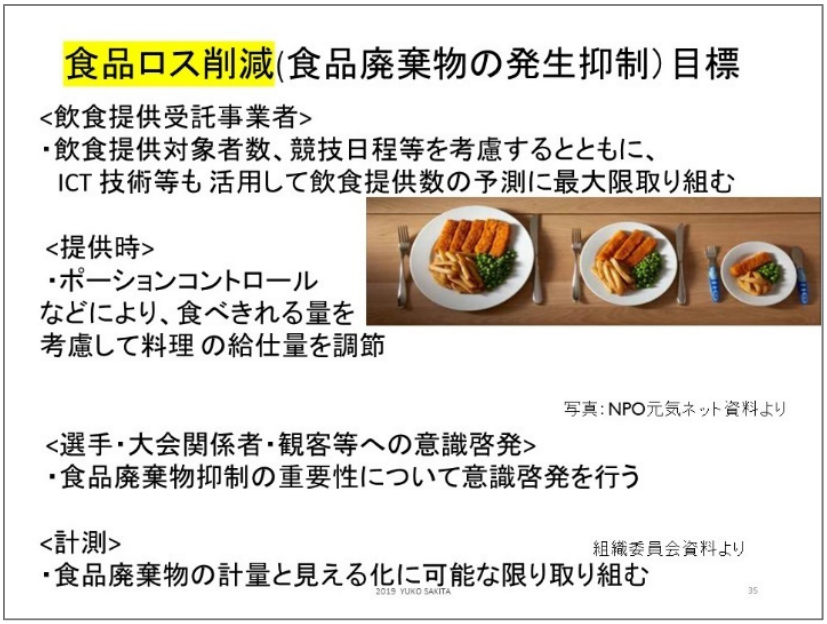


図 34

がいつも一番ですので、中々あれこれ申し上げる仕組み作りが難しいのですが、世界的な課題ですので、しっかりと協力していただこうと考えております（図34）。

全国の皆さんの参加で携帯など集めて、再生金属100％の金銀銅メダルをつくる「都市鉱山メダルプロジェクト」が実現し、集め終わりました（図35）。御協力いただいたと思います、ありがとうございます。これの再生資源を今鋳造している最中ですので、オリンピック・パラリンピックの時にはぜひ、応援していただければありがたいと思っています。また今、オリンピック・パラリンピックの表彰台は、プラスチックのボトルを回収して作っていくという「みんなの表彰台プロジェクト」（図36）も、イオンなどスーパーの御協力で進んでおります。こういう新しい取組に関して、様々に都市型の地域循環共生圏のモデル事例として、皆さんに関心を持っていただき、そして実現をさせてうまく行ったこと、行かないことを皆で共有しながら、レガシーとしてこれからの持続可能な社会に向けた挑戦のきっかけにしていただければありがたいと思っております（図37）。

大きな変革期の中で、皆さんと共に力を合わせながら新しい持続可能な循環型社会を作っていければと思います。どうもありがとうございました。

図 35

図 36

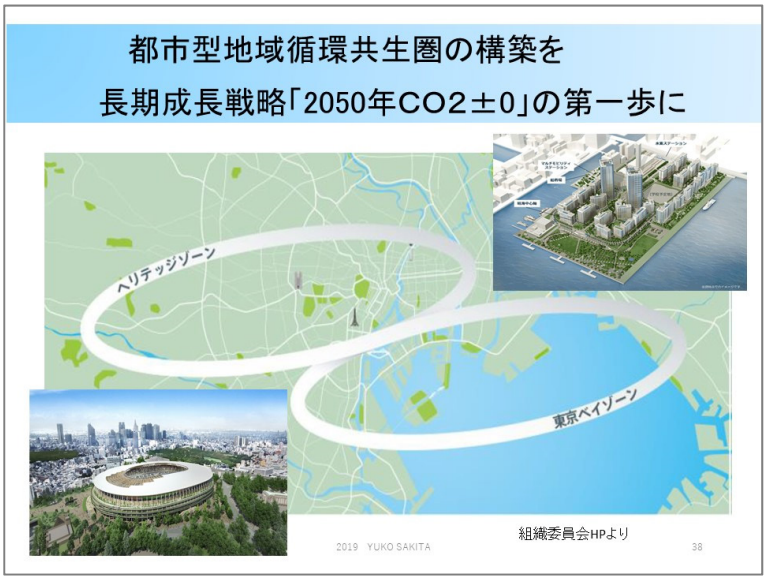


図 37

（２）事例発表　新潟発「ライスバレーにいがたプロジェクト」

株式会社バイオマスレジン南魚沼　専務取締役　経営企画室室長
中谷内美昭氏

皆様、こんにちは。この度は、この素晴らしい席でプレゼンさせていただきましてありがとうございます。実は昨日栃木県に行っておりまして、台風 15 号で浸水してしまった新米を引き取ってきました。大体５トンくらいあったので全身筋肉痛で、もしかしたら倒れるかもしれませんので、そのときは御容赦ください。お米の話をしましたけれども、私共はお米からプラスチック樹脂を作る会社です。新潟 SDGs コンテンツとして「ライスバレー新潟プロジェクト」を進めておりまして、そのことについてお話させていただきます。

バイオマスレジン南魚沼は、国産バイオマス資源を利用したバイオマスプラスチック樹脂原料の製造・販売、及び研究開発を行っております。約 20 年にわたり、色々なバイオマスプラスチックを作ってまいりました（図１）。ただ、やはり前処理に時間がかかってしまうということもあり、海外に依存せず日本の中で、前処理に手間がかからず、安定的・定量的に発生する国産バイオマスは何かというとやはり、お米になると思うのです（図２）。お米は資源と捉えておりまして、お米というのは生産過程においてくず米や砕米、造り酒屋においては吟醸・大吟醸の削った粉も出てきますので、それを有効に活用していこうと考えました。新潟県はお米の収穫量が日本一と言うこともありますし、日本は全国どこへ行ってもお米を生産している国ですので、安定的に定量的に収穫されます。また、くず米、砕米等の非食用米や、先程冒頭で申し上げました災害米、事故米、政府の備蓄米、そういった使えるお米がたくさんあることに着目して、お米のバイオマスプラスチックを作りました。新潟で起業させていただきましたので、ぜひこの取組を新潟から発表していきたいと思い、新潟県産の非食用米を使用したバイオマスプラスチック、通称ライスレジンと呼んでおりますが、これを使って環境先進都市へ、そのような御提案をしていきたいと考えております（図３）。

先程の崎田先生のお話もありました

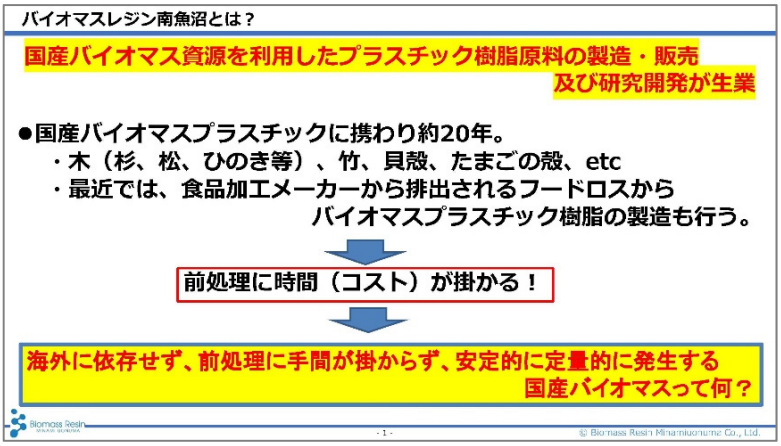


図１

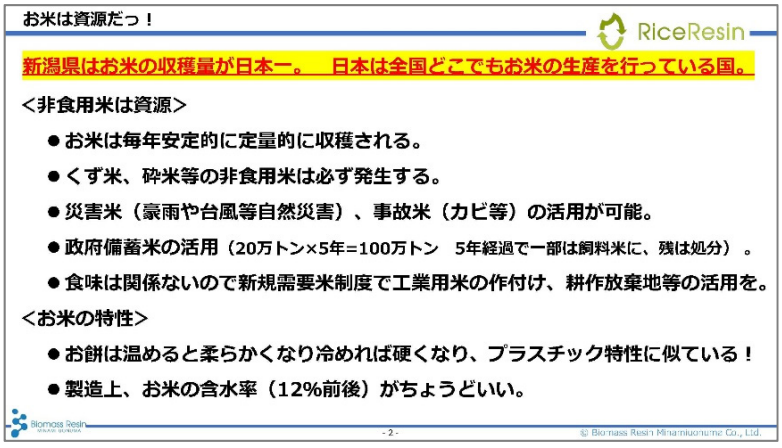


図２

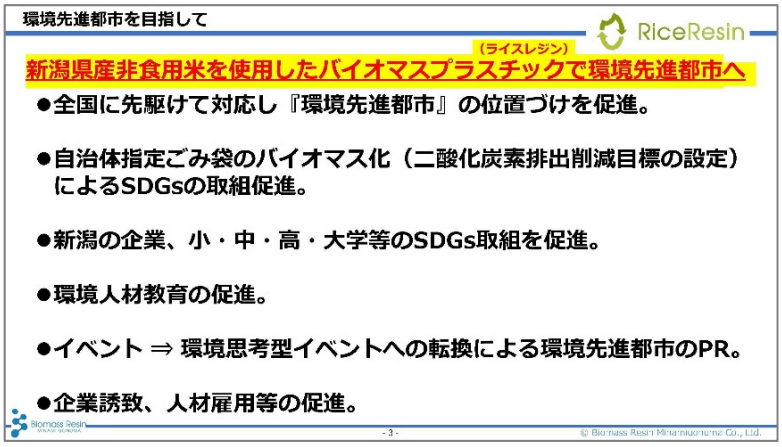


図３

けれども脱プラスチックと SDGs は非常に深い関係があります（図４）。今 SDGs は避けて通れない、SDGs の遵守を打ち出していかないと、この時代やってはいけない、必要不可欠なものになってきているというのは事実だと思います。SDGs のゴール 13 の気候変動や、14 の海洋プラスチック問題。そういった所に関してはバイオマスプラスチックとの関係性が非常に深いです。プラスチック樹脂の量、石油樹脂の量を減らそうとか、二酸化炭素排出削減目標を設定しようとか、そういった成果を可視化しやすいところに利点があると思い、取り組んでいます。

これは 2018 年の「拡大版 SDGs アクションプラン 2018」ですが、この中にも具体的な例としてバイオマスプラスチックの実用性向上と化石燃料由来プラスチックとの代替促進を総合的に推進しようと、日本政府の取組の中に書かれております（図５）。

５月 31 日に発表された「プラスチック資源循環戦略」（図６）。その中の重点施策の中のバイオプラのところで、可燃ごみ指定袋などへのバイオマスプラスチック使用ということも明文化されました。また、「マイルストーン」の中で 2030 年までにバイオマスプラスチックの量を約 200 万トンにすると発表されました。現在、ポリエチレンとポリプロピレンが日本全国で大体 480 万トンくらい使われています。なので、ほぼ半分をバイオマスプラスチックに変えていこうというのが国家戦略になっているので、それも１つ注目するところだと思っております。同じ５月 31 日に交付されました食品ロス削減推進法ですが、ここでもリデュース・リユース・リサイクル、もちろんリデュースが良いのでしょうけど、どうしてもリサイクル品も出て来るだろうということで、ここではリサイクル品をバイオマスプラスチック化して、プラスチック製品としてまた使っていく取組も始めました（図７）。この辺を

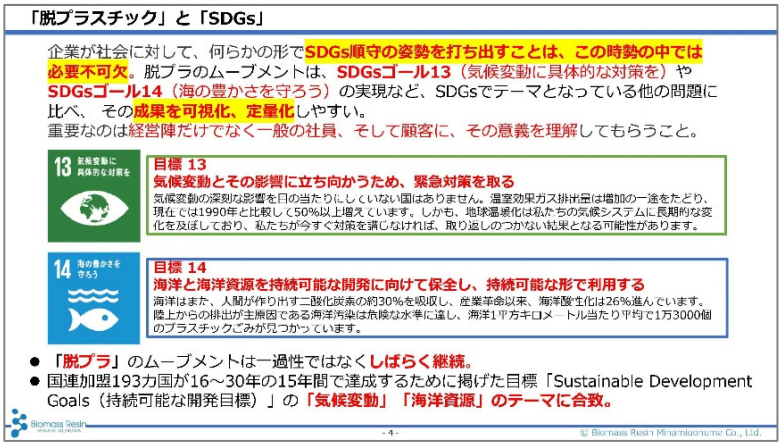


図４

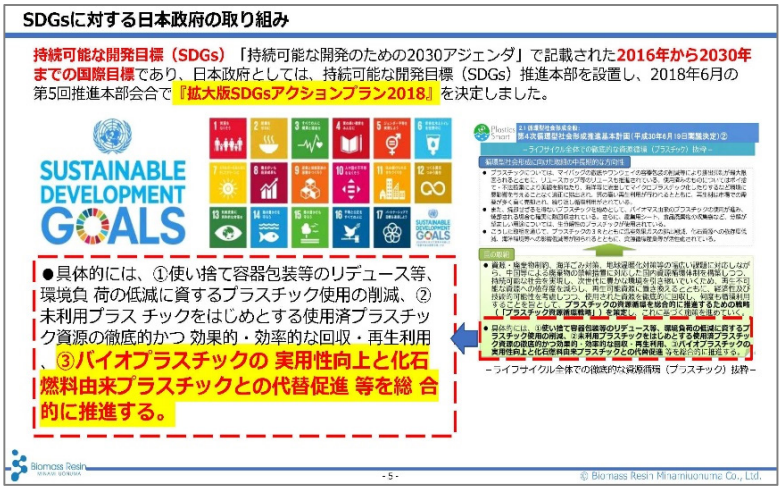


図５

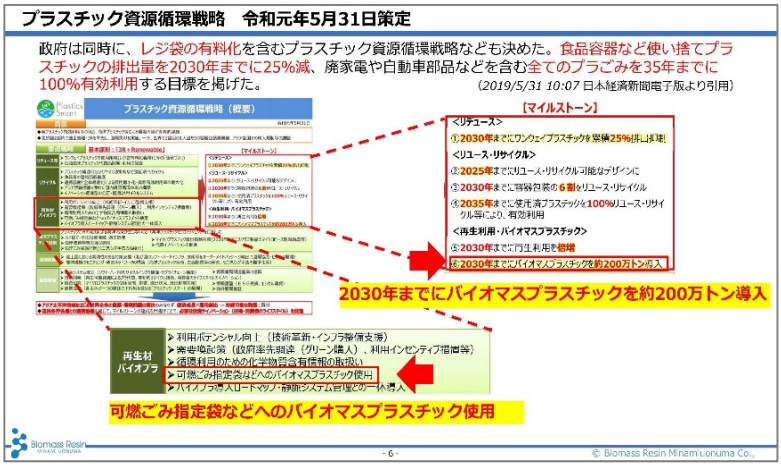


図６

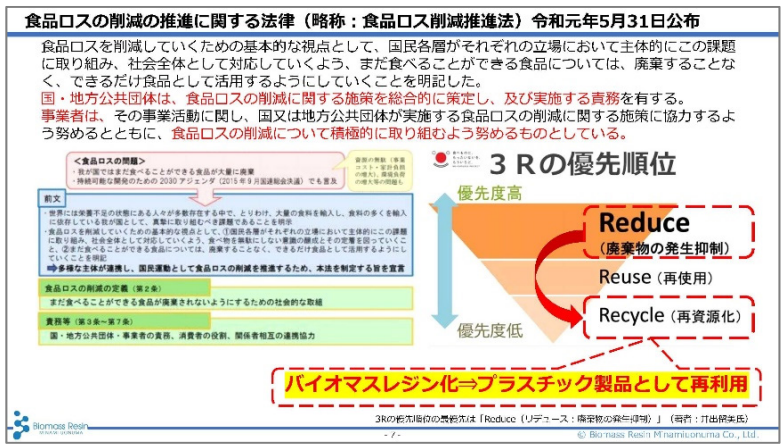


図７

まとめますと、１つはバイオマスプラスチックを約 200 万トン導入するという事、可燃ごみ指定袋をバイオマスプラスチック化していくこと、そしてグリーン購入法では 10%以上を植物由来のプラスチックを使っていきましょう、というのが国の方針になっております（図８）。食品ロス法の中では今言った再資源化をやっていきましょう、というようなキーワードが出てきます。

脱プラスチックの世界的トレンドに向けて（図９）。今、バイオマスプラスチックの中では、アメリカ中心のトウモロコシ由来のもの、それとブラジルが中心のサトウキビ由来のもの、この２つが主力になっています。いずれもやはり、海外に依存しなければならないので、我々はやはり国産にこだわりたい。結局海外に依存しているということは、石油と一緒で価格の高騰など、色々な影響を受けやすいということ。また、二酸化炭素の排出のことを考えますと、生産から廃棄までのスキームの中での二酸化炭素になるので、海外から運んでくると二酸化炭素の排出量は国産より多くなる。それを考えると国産が重要で、国産バイオマスプラスチック：お米のプラスチック、を今提案しております。

バイオマスレジンの優位性は、なんと言っても国産資源を使用しているところです（図 10）。さらに、価格は石油系のプラスチックとほぼ同等であること、射出成形やインフレーションなど、各種成形が可能で実績があります。それと当然、将来的には 100%のバイオマスプラスチックが求められると思いますので、2030 年に向けて純国産のバイオマスプラスチック、生分解性のものを作っていこうと、今、大学の方と連携をして進めております。

新潟県のポテンシャル（図 11）。先程も触れましたが、新潟県はお米の収穫量が一番ということで、造り酒屋や食品加工メーカーさんが多く、例えば米菓メーカーのお餅や割れ煎も樹脂化出来ます。

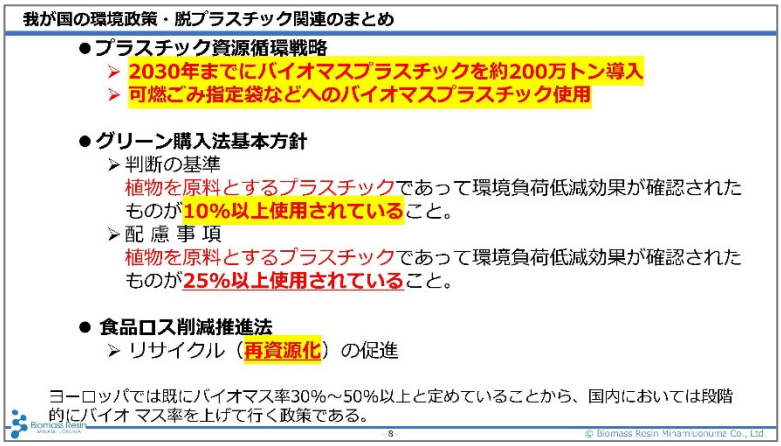


図 8

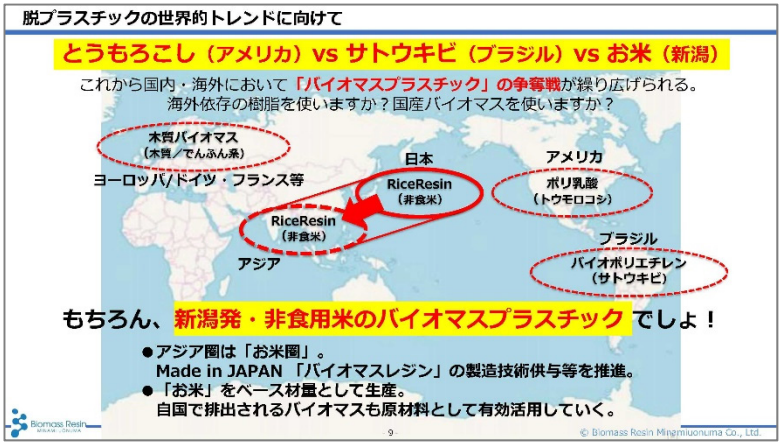


図 9

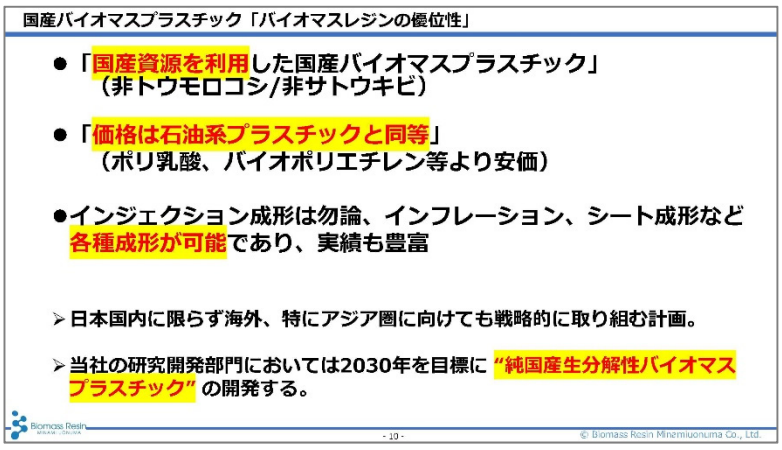


図 10

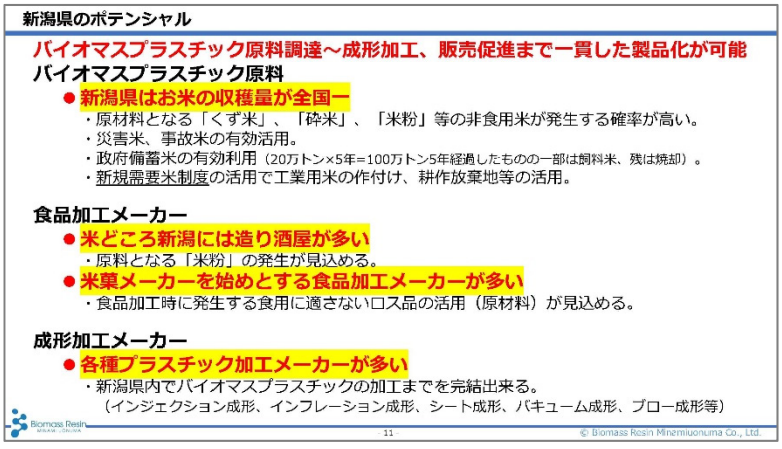


図 11

また、冷凍のパック米など、フードロスも使っていけるだろうということで取組をさせていただいています。

その取組が循環経済、サーキュラーエコノミーという表現になると思います（図 12）。非食米及び食品加工メーカーから排出されるフードロス。こういったものを我々の方で樹脂化して、加工メーカーとタイアップして加工した製品をまた食品加工メーカーで使っていただく取組を今始めているところです。

こういった取組を進めるに当たって我々の企業一社ではどうにもなりませんので、色々な方々と連携を取りたいということで、ライスバレー新潟プロジェクトを立ち上げました（図 13）。IT・IOT の聖地はシリコンバレーですけれども、新潟はお米だ、ということもありまして、ライスバレーということで、新潟博報堂と一緒に取組を進めております。県内の大学を含めた学校とも連携してきました。材料の原材料となるものを提供してくださる企業様、製造でタイアップしてくださる企業様、あとは企画、販売促進や研究開発、こういったものを総合して新潟県内でプロジェクトを進めていきたい、ということで取り組んでおります。

アクション 01（図 14）。プラットフォームの情報発信ということで、まず 1 つはその母体となるホームページ等 SNS を活用してこうということにもなるのですが、SDGs のバッチを今作っております。もうじきリリースできると思いますが、これはお米 51%のプラスチックで作った新潟オリジナルの SDGs バッチということになりますので、皆さんホームページを御覧になって、ぜひお申込みいただければと思います。

アクション 02（図 15）。これは自治体の指定ごみ袋をバイオマス化していくにあたり、CO2 の削減目標を設定して啓蒙してこうという取組です。これはもちろん自治体もですけれども、使用される市民の皆さんとのタイアップも必要ですので、例えば 2025 年に向けて新潟市は何%

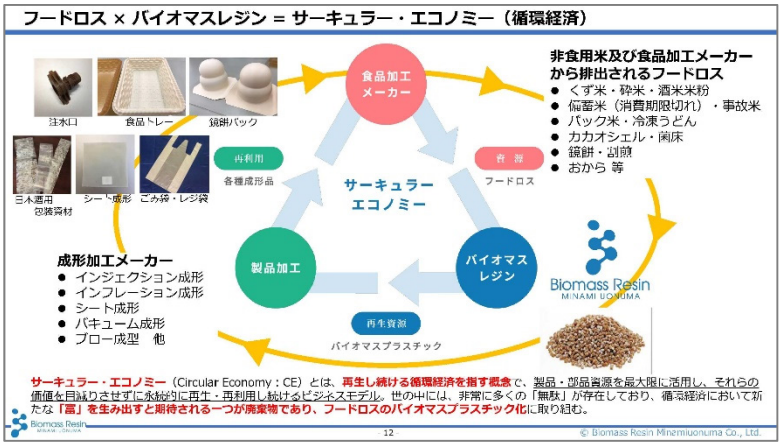


図 12

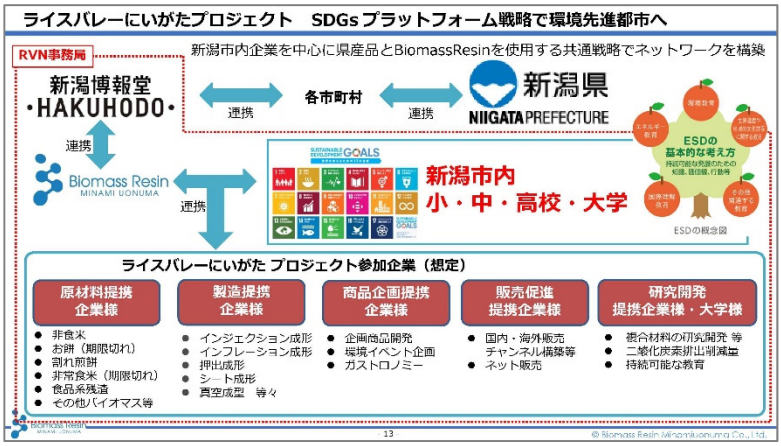


図 13

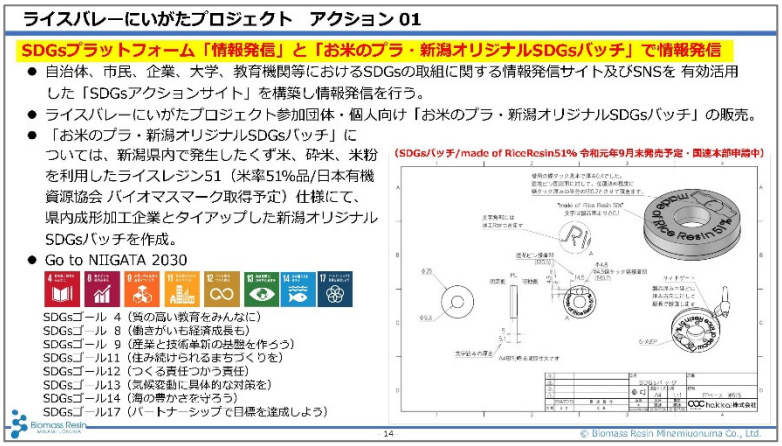


図 14

図 15

CO2 を削減しよう、という目標を立てながら取り組むというようなプロジェクトを進めていきたいと思っております。

アクション 03（図 16）。バイオマスレジンを使った製品開発です。うちの主力商品であるバンダイグループの玩具シリーズ。あと団体等で使用したもので言うと、G20 の農業大臣会合の時に製品化したお米のお箸。水産庁の捕鯨用の緩衝材。そういうものも使ってもらっております。豊洲市場のクロマグロの産地名称をつけたタグは、現在テストをしてもらっているところです。

その他、例えば金属加工では燕三条が有名ですが、金属加工のメーカーと我々でタッグを組ませて頂いて、当然金属の部分でプラスチックを使う部分もあると思いますので、金属加工とライスレジンを融合化させて新潟オリジナルの商品が出来上がるのではないかと、そういったことも発表していきたいと思っています。

ここからは構想になりますが、アクション 04（図 17）。これは学校との連携になります。SDGs の教育も今後始まって来ると言われていますので、この辺を大事にしながら学生さんとの連携を考えていきたいと思っています。2030 年には今の高校生はすでに社会に出て立派に働いていると思いますので、そういった人達を育てながら、環境に意識の高い子供達が色々な新潟県内の企業に就職をして貰えれば、より一層新潟は豊かになると思い、このような取組もやっています。

こちらも構想ですけども、新規需要米（図 18）という制度がありまして、これは農水省絡みですが、その中で例えばマテリアル米、工業用米の作付けを認定してもらうことによって、補助金が出たり、耕作放置地が無くなるなどにつながり、自然環境を守れると思っています。

この辺のプロジェクトを含めて「ライスバレー新潟プロジェクト」というホームページも昨日スタートいたしました（図 19）。ぜひ、どのようなことをやっ

図 16

図 17

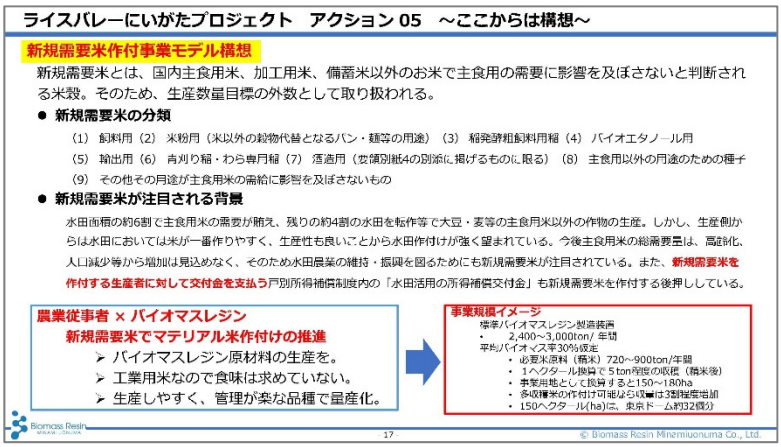


図 18

図 19

ているのか、覗いていただければと思います。

最後になりましたが、会社概要になります（図 20）。

平成 29 年 11 月に南魚沼市で立ち上げた会社です。そうは言ってもマーケティング等で、約 20 年バイオマスプラスチック業界でやってきました。現在、従業員数は 16 名でやっておりますが、これからまだまだ拡大していきたいと思っております。

バイオマスレジン製品の一部の紹介です（図 21）。先程御説明した玩具関係やお箸、レジ袋とごみ袋の他、カトラリー系、ワンウェイ商品のホテルのアメニティ、スプーン、食品トレーなどがあります。

これからも緊急かつ速やかに色々チャレンジをしていきたいと思っておりますので、ぜひ新潟発の国産バイオマスプラスチックを応援していただければと思います（図 22・23）。

御清聴ありがとうございました。

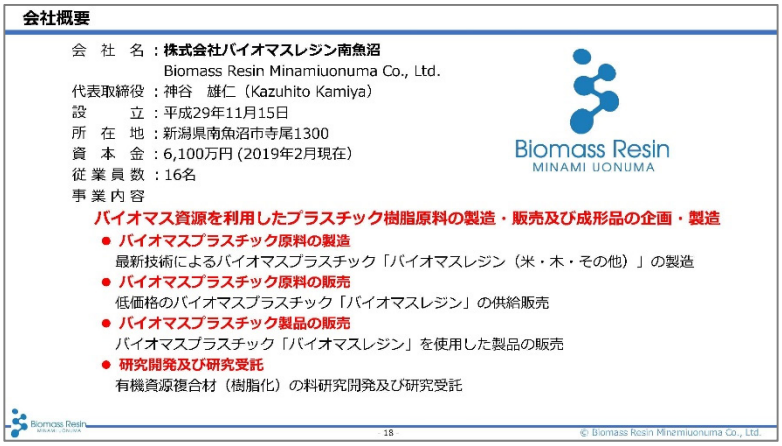


図 20

図 21

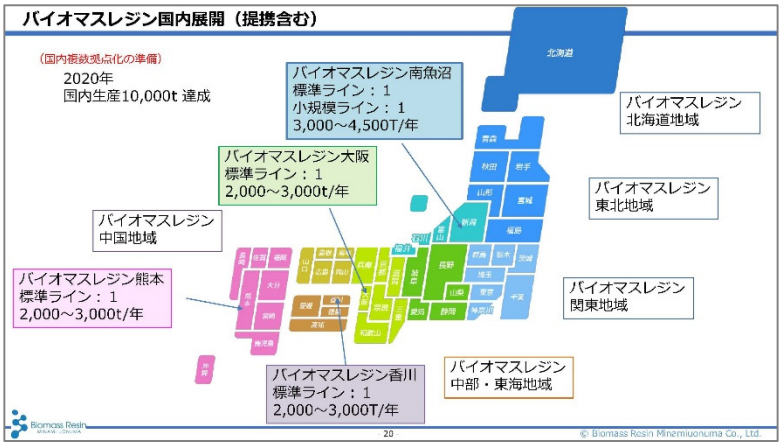


図 22

図 23

（３）パネルディスカッション ～食品ロス削減へ！これからのイニシアティブ～

【コーディネーター】

NPO法人持続可能な社会をつくる元気ネット理事長　崎田裕子氏

【パネリスト】

新潟薬科大学応用生命科学部特任講師　石丸亜矢子氏

イオンリテール株式会社北陸信越カンパニー広報・環境社会貢献グループマネージャー　山城篤司氏

新潟お笑い集団ＮＡＭＡＲＡ代表　江口歩氏

新潟気軽に省エネくらぶ代表　波多野千代氏

環境省環境再生・資源循環局総務課循環型社会推進室長　冨安健一郎氏

○崎田氏　中谷内さんのライスバレーにいがたプロジェクトでは、新しいプラスチックの課題解決に向けて、新潟らしく「新型イニシアティブ」として取組を皆様と一緒に進めていきたいと発表いただきました。これからは新潟らしい取組をどのように発信できるか、「食品ロス削減へ！これからのイニシアティブ」をテーマにお話していきたいと思います。パネリストは、それぞれ御活躍いただいている皆様です。まず、食品ロスの問題にどのような取組をされておられるか、お話しいただけたらと思います。よろしくお願いします。

○石丸氏　御紹介いただきました石丸と申します。よろしくお願い致します。私は新潟薬科大学の応用生命科学部で地域活性化担当の教員として、IT やビジネス、ビジネスデザインを教えています。食品ロス対策で申しますと、学生と一緒に国内外の事例収集をしたり、教育教材として、かるたやすごろく、冊子などを企画したり、その中でも特に御紹介したいのが、「ECO ンソメスープ」という活動です。ECO ンソメスープというのは ECO とコンソメスープをかけており、学生が付けた名前です。地域の市場やスーパーマーケットで捨てられていた野菜の葉材などを利用し、従来捨てているキャベツや白菜の外葉、潰れてしまったトマト、カット野菜の表面の乾燥してしまったカボチャや大根等をいただいてきて、それをコンソメスープにして地域のイベントなどで配布するという活動を行っています。昨年 12 月に第１回を実施し、地元の方々に大変喜んでいただきました。今、主力メンバーが４年生なので、今年度前半は実施しませんでしたが、11 月 21 日のお昼に大学で実施予定です。また、私自身は東京都豊島区で接点合同会社という食品ロス対策に関するコンサルティング会社を経営しており、こちらの会社でも様々な食品ロス対策に関する活動を行っております。その中で、野菜の葉材をスープにする活動を、会社として、別の大学のお手伝いもしており、11 月中旬に青山学院大学の学食でも御賛同いただいたので、試験的に実施を予定しています。

○崎田氏　ECO コンソメスープ活動ということで、野菜の葉材をスープにする。これは新潟の大学だけではなく、全国の大学でもやっていただける可能性があるということで、すばらしいですね。ありがとうございます。また後程色々御意見をいただきたいと思います。それでは次は、イオンリテールの山城さん、よろしくお願い致します。

○山城氏　イオンリテールの山城でございます。本日はよろしくお願い致します。こちらは先週土曜日、新潟日報夕刊に掲載された記事です（図１）。イオンの食品ロスに向けた取組が記載されていますので御紹介させていただきます。右上の写真は、芯のない葉の部分だけの白菜のザク切りが置いてあり、芯を捨てるお客様には葉の部分だけ使ったものを提案していく、芯がいる方はそのものを買っていただく。使い切る分だけ食材を品揃えしています。惣菜のメニューは常に 20 種類以上、量り売りで御提案しているので、１人世帯も３人世帯も必要な分だけお求めいただけます。また、商品の期限を見やすくするアイテムはないのか、とよく言われます。左上の写真は、カフェオレのパック飲料の容器ですが、この開封口のクリップを店頭で売っています。クリップが透明であ

（日刊）新潟日報　2019年（令和元年）10月26日（土曜日）　第3種郵便物認可　くらしプラス　4

10月30日は「食品ロス削減の日」

使い切る食材や総菜充実

買い方、食べ方に工夫を

くらしプラス

AEON

図1

れば、消費期限が見えて、冷蔵庫を開けるたびに目にすることができる。いわゆる「見える化」ができて、食べ忘れ防止になります。左下の写真は、フードレスキューの考え方の中で「つれてって」シールとよく言われているものです。店頭で販売期限が来る商品を段階的に値下げしていくときに、積極的に今買っていって下さいね、と。食品ロス、廃棄ロスを減らしたいということで、こういう表示をしております。この新聞記事には、４つの視点で記事が書かれておりますが、私どもイオンとしましては、小売業のビジネスプロセスの中で、企業から消費者の皆様方にわかりやすい食品ロスの防止対策を、今後とも謳っていきたいと考えております。

○崎田氏　山城さんの企業では、分かりやすく消費者に知らせていこうというお話がありました。これからそういう流れをどう広げるか、ぜひ話していきたいと思います。ありがとうございます。次は、新潟お笑い集団 NAMARA の江口さんです。

○江口氏　今日、県外から来られた方、どれだけいらっしゃるでしょうか。実は 22 年前に、新潟で地方発のお笑い集団を立ち上げた者でございまして、分かりやすく言うと新潟の吉本興業と思っていただければと思います。我々はホテルで余興をやる仕事がたくさんありますが、そういう時、間違いなく最初にお偉いさんが乾杯して、その後に懇親会と、大体 30 分くらい名刺交換やら飲んだくれているときに、「それでは NAMARA さんどうぞ」みたいになるわけです。そうすると誰一人聞いてない状況でやらされます。何のために出ているのか。どうせやるのならば、乾杯の後すぐにやらせてほしいと言うのですが、それもやらせてもらえない。僕ら一応お金をもらっていますが、出す側も、僕らも、どちらも幸せじゃないわけです。聞いてくれない、見ない、お金をもらっているけど有効活用されていない。よって、なんとかして聞いてもらえるようにアナウンスをずっとしていたのですが、今ここにきてようやく、2010 運動や 3010 運動がありまして、とにかく最初の 20 分か 30 分、乾杯の後は席について飯を食べてくれと。だとしたら、そこをうまく抱き合わせて、皆さんが食事をしている時に僕らも余興をやって、みんなが聞いて僕らも喜んで WINWIN となり、どちらも幸せになる空間を作ろうではないかと言っているところです。まだなかなか浸透していないので、なんとかこれから商工会議所の会頭を捕まえて、「企業全体でまずそういう風潮で動いてくれ」と、僕が政治家になったら言いたいと思います。

○崎田氏　今、新潟市では 2010 運動をやっておられて、宴会の最初の 20 分と最後の 10 分は自分の席でお食事をいただきましょうと呼びかけているということです。そういう取組と皆さんのお仕事が、うまく一緒になるというのは大変いい御提案で、素晴らしいと思います。ありがとうございます。それでは、次に地域で消費者の皆さんの会合として新潟気軽に省エネくらぶで取り組んでおられます、波多野さんから取組を御紹介いただければと思います。

○波多野氏　波多野千代と申します。新潟気軽に省エネくらぶは 20 年ほど前に結成

して活動しております。一番身近なところから省エネをということで、生ごみに着目致しました。その削減の活動を説明させていただきます。

生ごみは80%から90%が水分です。この水分を焼却すると多大なエネルギーを必要とします。私達は生ごみを風で乾燥させるグッズを使ったり、庭でコンポストを使ったりして極力生ごみを排出しない努力をしてまいりました（図２）。これがきっかけとなり、江南区という地域で、循環型堆肥化事業が立ち上がりました。「大地」という農産物直売所に、企業の生ごみ処理機を設置してもらい、農家と市民と企業と、それを行政が後押ししてくださいまして、ここで生ごみの堆肥化事業を行うことができました（図３）。私達市民が持っていく生ごみを産直の方が堆肥化し、その堆肥を、野菜を届けている農家の方が使って農産物が作られます。その農作物を、生ごみを持ち込んだときに私達は購入していきます。生ごみを持ち込むとき、これはちょっとした嬉しいことですが、50円のチケットがもらえるのです。江南区という１つの地域で完全に循環型になりました。とても今上手くいっております。また個人的にも堆肥化したいという方も大勢出てきました。私達は当初段ボールを用いておりましたが（図４）、新潟市が段ボールのキットを作ってくださいまして、マジックダンボールと名付けて、現在、各区役所で販売しております。気軽に省エネくらぶは、上手な堆肥化の仕方を伝えるために、講師の派遣もしております。

もう一歩進めて、最後の生ごみの処理ではなく、最初の料理の段階で食品ロスをなくす工夫として、年に１回サルベージ・パーティーを開催しています（図５）。賞味期限が切れると嫌だという方が多いのですが、このクッキング講座では、家で持て余し気味の食品を持ち寄ります。その食材で、シェフ

図２

図３

図４

図５

がその場で組み合わせて、新しいレシピを考えます。そうすると、今まで自分たちが使わなかった食材が新しい料理に変わって、とても皆さん喜んでくださいます。このサルベージ・パーティーでは、消費期限と賞味期限の違いを正しく理解することの大切さを強調しています。

図６

賞味期限と消費期限は、とても間違いやすいものです。これは亀田のごみステーションでのことですが、カラスがいるなぁと思って近づいてみると、卵がケースごと、中身が入ったまま捨てられていました（図６）。非常にショックを受けました。卵の賞味期限は生で食べられる日付ですから、その賞味期限が過ぎたら加熱すれば食べられます。皆様には、消費期限と違う賞味期限に関して、正しい理解をここから発信していただけたら嬉しいです。

○崎田氏　サルベージ・パーティーなどもしておられるということで、後程色々とお話を伺いたいと思います。それでは、環境省の冨安さんから、国の取組等をお話しいただければありがたいと思います。よろしくお願い致します。

○冨安氏　環境省の冨安と申します。よろしくお願いします。３分というタイトな時間を頂戴していますので、少し駆け足になります。最初のページ（図７）、食品ロスをめぐる現状ということで、色々な数字並べています。これは崎田先生の説明の中でもたくさん出ていましたので、基本的に省略します。一点、年間１人当たりの食品ロス量が 51kg と書いていまして、年間の１人当たりの米の消費量と大体同じくらいと言われております。それだけの量の食べられるものを捨ててしまっていると。また、＜日本＞と書いているところの下から２つ目、食料の家計負担が大きいということで、数字を載せております。食料が消費支出の４分の１を占めているということですので、食品ロスを出すか否かは大きな家計の負担のポイントになると思っております。京都市のホームページで、４人世帯の家族で年間大体６万円くらいの食品ロスによる損失を被っているという情報もございます。食品ロスを減らせば減らすほど懐も温かくなるかもしれないということです。

図７

食品ロス削減に関する目標を国で定めております（図８）。事業系食品廃棄物等と家庭系食品廃棄物等がございまして、食品関連事業者から出てくるものと一般家庭から出てくるものと両方で目標を定めています。これはいずれも 50%減と、なかなか厳しい目標になっておりますが目指していきます。

食品ロスは643万トンあります。お店から出て来る事業系食品廃棄物では、規格外品や返品、売れ残り、こういったもので352万トン。一般家庭は、食べ残し、直接廃棄、皮を厚く剥いたりした過剰除去など291万トン。全体で643万トンですが、家庭からも４割近く食品ロスが出ております。逆に言いますと、家庭で取り組んでいただくことで、かなりの量が削減できると思っております。

食品ロスの削減の推進に関する法律が、今年国会で成立し、今月10月１日から施行されております（図９）。これは国会議員の先生方の主導で作られた議員立法による法律です。食品ロスの削減に関する理解と関心を深めるために、今月10月を食品ロス削減月間と規定されました。また、明日10月30日は食品ロス削減の日と法律で定められております。これらに基づいて、今後様々な施策を打っていくかたちになります。

ここからは環境省でやっている取組を御紹介させていただきます（図10）。まず、一元的に集約したホームページの設置。トップページに消費者向け情報、自治体向け情報、事業者向け情報の３つの区分に分け、食品ロス発生実態の情報から、どういったことができるかの対策が載っております。このページの趣旨は、何よりもまず身の回りの食品ロスについて正確な情報を得ていただくこと。それを知ることで、こういうことをやれば減るのかと御理解いただけると考えております。

まず、知っていただくための情報サイトということで「７日でチャレンジ！食品ロスダイアリー」というものを作っています（図11）。ダイエットされるときも、レコーディン

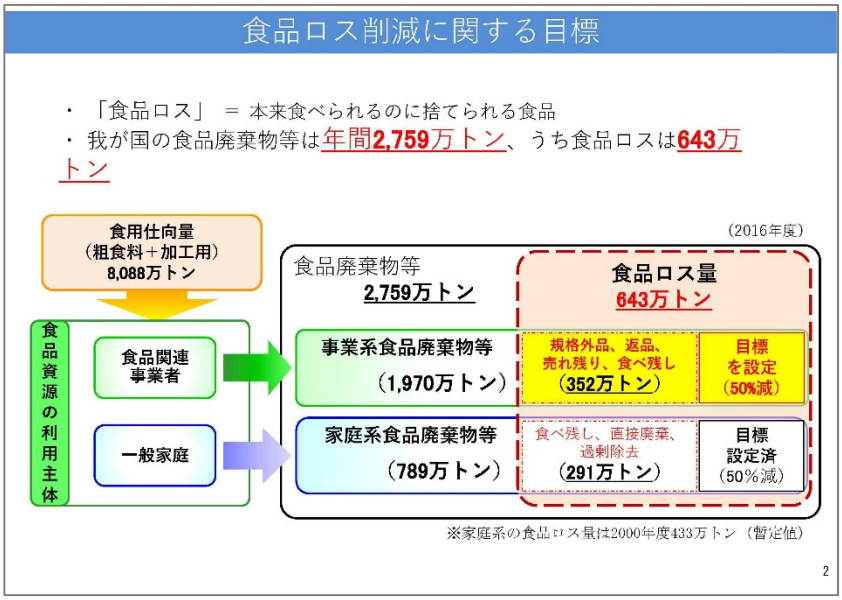


図８

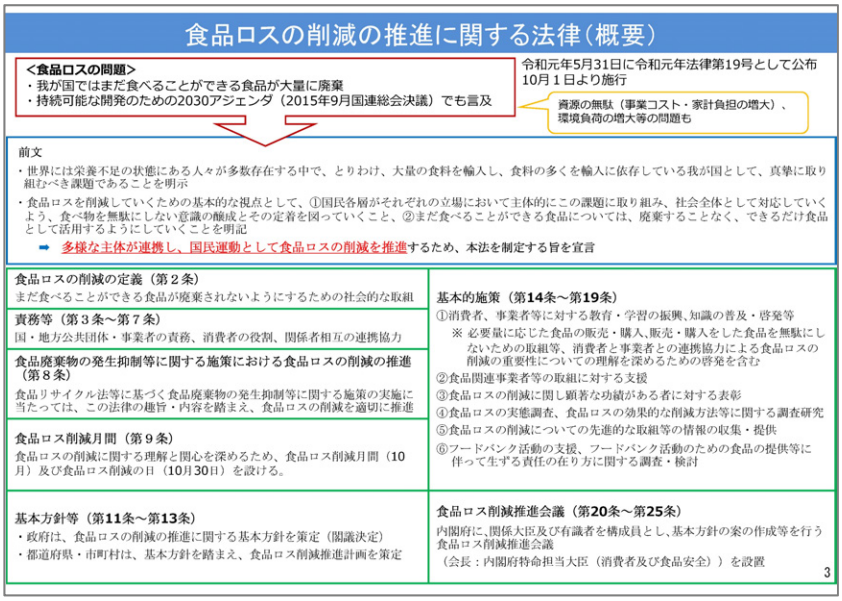


図９

図10

グダイエットという、毎日何を食べているか記録をつけながらダイエットすると、おのずと意識がそちらに向いて体重を減らしていくという手法があります。同様に、食品ロスダイアリーを環境省で作成してみました。あまり長くやると息切れしてしまうと思いますので、まず7日間、御自宅・御家庭で、どういったものが食品ロスとして出てくるかを、日記風につけてみてくださいと。それを使い、御家族で話をしていただいて、家計を助け、食品ロスを削減することができるのではないか。こういったものを普及啓発資材として作っております。ホームページからもダウンロードできますので、ぜひ御活用いただければと思います。

自治体向けにも様々な情報を環境省から発信しております(図12)。「全国おいしい食べきり運動ネットワーク協議会」というものがございます。これは崎田先生も、取りまとめ役として御活躍いただいておりますが、自治体の方々で構成されている協議会で、色々な地域の様々な取組を集約しております。その中で、特に他の自治体でも活用できるのではないかといったものを、環境省でいくつか抽出し、ポイントを取りまとめてマニュアル化しています。ぜひご覧いただき、うちの地域でもやれるかなと気付いていただければと思います。また、学校で行ったモデル事業の結果を踏まえて、学校給食の食べ残しを減らすためのマニュアルを作っておりますので御参照いただければ幸いです。

陳列順の購入の促進に、「すぐたべくん」というキャラクターを作っております（図13）。スーパーで牛乳を買うとき、私も子供の頃から親がやるのを見ていたものですから、１日でも長い商品を奥から取って

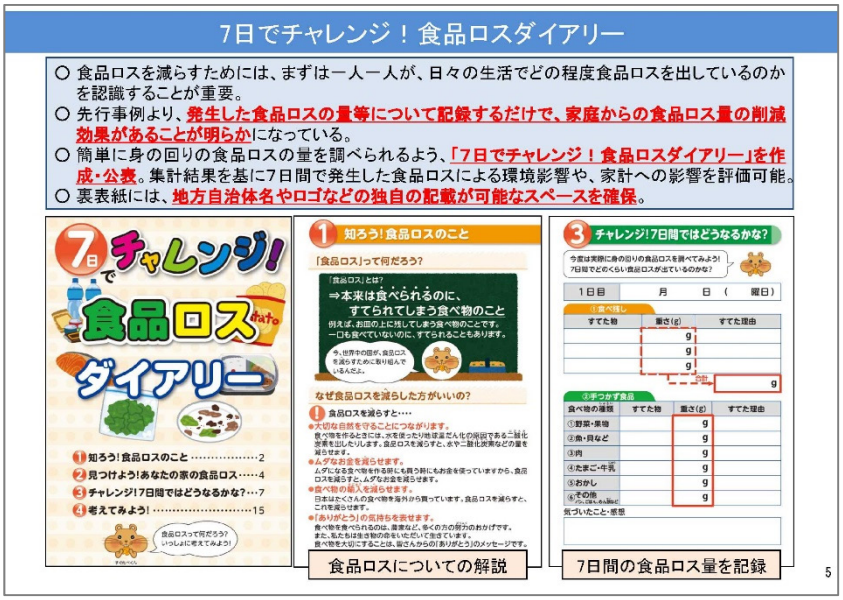


図 11

図 12

図 13

しまっておりましたが、育ち盛りの子供がいるとすぐに消費をしてしまいますので、手前から取ってもいいじゃないかと自分自身気が付きました。そういったことに気付いてもらえるように「すぐたべくん」というキャラクターを使い、すぐ食べるときには手前から順番に取ってくださいと普及啓発できればと思っております。

図 14

食品ロス削減月間ということで、普及啓発資材を参考までに載せております（図 14）。環境省の取組ばかり宣伝させていただきましたが、食品ロスの削減についての関係省庁は環境省以外にも、消費者庁、農林水産省、厚生労働省、文部科学省、経済産業省もございます。例えば、食品小売向けで、買い方でも食品ロスを削減できますよといった広報チラシは農水省で作られているものです。お皿に顔がついているものは消費者庁で作られたものです。それぞれの役所で、消費者向けや小売事業者向け、地方公共団体向けの色々な啓発をさせていただいておりますので、ぜひ御活用いただければと思います。

○崎田氏　ありがとうございます。会場の皆さん、これで登壇の皆様の取組などお分かりいただけたかと思いますが、この食品ロス削減をより一層進めるには、市民、事業者、行政、それぞれどのように取り組んだらいいのか、その辺を意見交換していきたいと思います。先ほど冨安さんのお話の中で、全国おいしい食べきり運動ネットワーク協議会を御紹介いただきありがとうございます。食品ロス削減に関心のある自治体が連携したネットワークで、現在 47 の全都道府県と 361 の市区町村、あわせて 408 の自治体と情報共有などをやらせていただいています。ホームページなどを御覧になっていただければと思います。新潟市も御意見があると思いますので、最後にぜひ御感想など、お気持ちをお話しいただければありがたいと思います。

それでは話し合いを進めていきますが、環境省の冨安さん、パネリストの皆さんの取組などを聞いたうえで、これから市民や事業者に、どのようなことを期待していくのか。ぜひその辺を今日の話し合いのスタートにお話しいただければありがたいと思います。あと、もう一人専門家という立場で御参加いただいております石丸さんからも、市民や事業者への期待など、お話しいただければと思います。

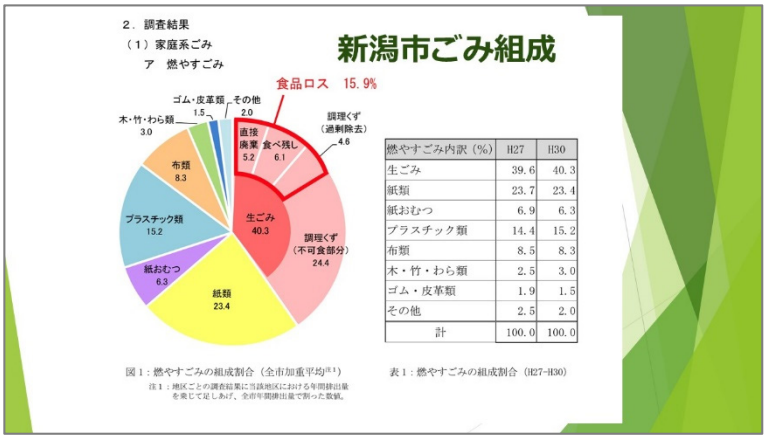
＜消費者・事業者の役割＞

○冨安氏　ありがとうございます。皆様様々な取組をされています。国として、食品ロスの削減目標の達成に向けて、様々な主体の方々に御活躍いただくことが必要だと思っています。先程御紹介した食品ロス削減推進法の中でも、事業者の役割や消費者の役割、地方公共団体・国の役割、そういったところが様々書かれております。その中で消費者の役割が、非常に強く食品ロス削減推進法の中で書かれているのかなと思っております。食品ロスの削減の重要性について理解と関心を深めるとともに、食品の購入、調理の方法を自ら改善するなど、食品ロスの削減に関して自主的に取り組むよう努める、と書かれています。そういったことを事業者の役割としても協力していくとか、地方公共団体としてもその地域の特性に応じた施策を作成することで取組を促す、と書かれていると理解をしております。先程も申し上げましたけれども、まず知っていただくということ、そして連携協働していく。消費者だけでもできませんし、事業者だけでもできませんし、地方公共団体・国だけで動いても世の中は変わりませんので、相互に連携協力をしていくことが大事だと思っています。そういった中で、皆様方、波多野さんや江口さん、石丸さん、山城さん、色々な立場の方々が様々な取組をされていることを、ぜひコラボレーションでつなげ、知っていただく機会を作っていくことが大事だと思っております。

○崎田氏　消費者、事業者、それぞれの役割と連携協働した役割というお話をいただきました。この後、意見交換の中で、連携協働しながらどのように効果を上げていけるのかということもテーマにしていきたいと思います。御提示ありがとうございます。次に、石丸さんお願いします。

○石丸氏　私は、１つは海外事例研究等も含めた食品ロス対策に関する研究を行っている学の立場と、食品ロス対策に関するコンサルティング会社を経営している事業者の立場と、両方の立場から見て感じていることをお伝えしたいと思います。３年前の 2016 年の夏に会社を起業した当時は、まだ食品ロスやフードロスの認知度は広がっておりませんでした。非常にマイナーな分野に取り組んでいて、「変わってるね」と言われていたのですが、最近だいぶ言葉が浸透してきたなと感じてきております。ただ、多くの人々が率先して行動をするまでになっているかというと、まだまだではないかと感じております。例えば、食品小売業や飲食店などの話を伺うと、売れ残りの廃棄をしていると聞きますし、自治体などで、家庭ごみ、一般ごみの組成調査を行っている担当者などにお話を聞きますと、買ってきた食品がパッケージのまま丸ごと捨てられているごみがだいぶあるといった話も少なくないと聞いております。また、レストランなどで食べ残した食品のうち、火が通っているものを持ち帰ってすぐに自己責任で食べきります、とお伝えしても、お店側から持ち帰りをお断りされるケースがまだまだ多いと感じております。海外ですと、食べきれなかったものの持ち帰りは当たり前にできる状況で、ヨーロッパやアメリカはもちろん、タイ、ベトナム、インドネシアなどの東南アジアでもそうですし、南アフリカなどのアフリカでも大丈夫ですし、中国も例えば１元を払いパックをいただいて自分で詰めて帰ることが普通にできます。こうしたことが、日本ではまだまだ進んでいないと感じています。

もう一つ海外事例をお話ししますと、ヨーロッパを中心に共同冷蔵庫、あるいは連帯冷蔵庫という取組が広がっています。特にドイツでは一般に普及しているもので、ドイツ語だと「フェアタイラー」と言うそうです。何かというと、地域のコミュニティセンターや、場合によってはマンションの共同住宅の入口などに地域の共用の冷蔵庫や食品棚が置いてあって、そこに余った食品を誰でも持ち込める、そして欲しい人は誰でも持って帰れるという仕組みです。さらに、地域のスーパーなどで棚から降ろされた野菜などもボランティアの方が運び込んでいて、それを地域の皆さんで共有して食べきるということが行われていて、これが結構各国で広まっています。こうしたことは、なかなか日本では進まないのではないかと思われる方が多いのではないかと思いますが、日本でも 2030 年までに食品ロス半減という目標を達成するためには、まずはこうした一人一人が自分事として意識を持つことと、誰かがやってくれるのを待つとか施策を待つのではなく、能動的に行動することが不可欠なのではないかと考えております。



燃やすごみ内訳（%）	H27	H30
生ごみ	39.6	40.3
紙類	23.7	23.4
紙おむつ	6.9	6.3
プラスチック類	14.4	15.2
布類	8.5	8.3
木・竹・わら類	2.5	3.0
ゴム・皮革類	1.9	1.5
その他	2.5	2.0
計	100.0	100.0

図 15

○崎田氏　ありがとうございます。石丸さんから、自分事として、まずは率先して動いていくことが大事という話がありました。波多野さん、消費者の役割としてどんなところをしっかりやっていきたいと思っておられるか。その辺をお話しいただけますでしょうか。その後江口さんからも、消費者としてどのようなことができるか伺っていこうと思います。

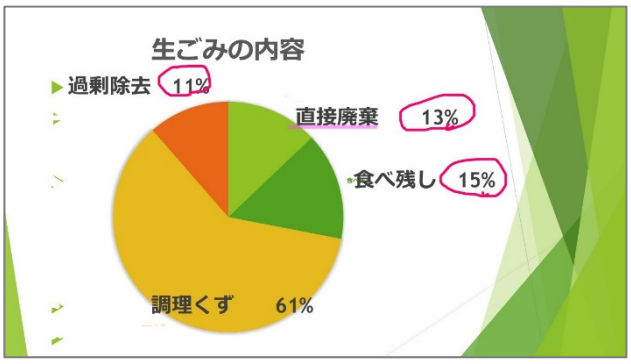


図 16

○波多野氏　こちらは新潟市の最新のごみの組成の状況です（図 15）。生ごみが 40.3%とあります。生ごみのところだけ取り出すと、調理くずが 61%、過剰除去が 11%、直接廃棄が 13%、食べ残しが 15%にな

ります（図 16）。私が今日ぜひ皆さんにお話ししたいと思いましたのは、直接廃棄の部分です。どうしてこういうケースが出てくるのでしょうか。なんとか解決の方法はないのでしょうか（図 17）。農水省のホームページを見ますと、賞味期限という統一の単語になったのは 2003 年だそうです。おいしくたべる賞味期限の設定の仕方は、国が定めた食品期限表示のガイドラインによりますと、安全係数が用いられているケースが多いようです（図 18）。その説明を見ましたら、理化学試験、微生物試験、官能試験をもとに算出した、実際の日持ちする日数に１より小さい安全係数という数字をかけると書いてあります。加工食品のガイドラインでは 0.8 が推奨されているそうです。安全係数 0.8 を使った場合、本来の美味しく食べられる期間の８割、実際の賞味期限よりも２割手前に日付が打たれるということです。ですから賞味期限は皆様が御購入になって少し期間が過ぎても大丈夫なように、幅を持たせて出荷されているのです。どうしてそれを、期間が過ぎたら即捨てるのでしょうか。賞味期限は「比較的劣化しにくい食品のおいしさの目安です」とあります（図 19）。目安なのにどうして速攻に捨てなければならないのでしょうか。厳密に守っている人が少なくないと思います。たぶん、消費期限と勘違いしているのではないでしょうか。この直接廃棄を無くすだけでもだいぶ違います（図 20）。買いすぎない、買ったものは使い切る、保存の方法を工夫する、賞味期限が来ても速攻で捨てない、季節ごとに冷蔵庫のサルベージ・パーティーを行う。消費者の役割として、このようなことができるのではないでしょうか。

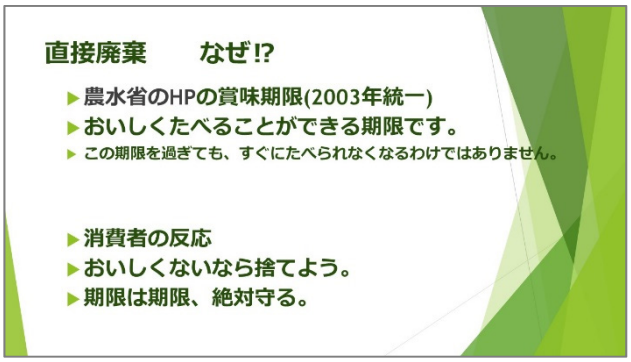


図 17

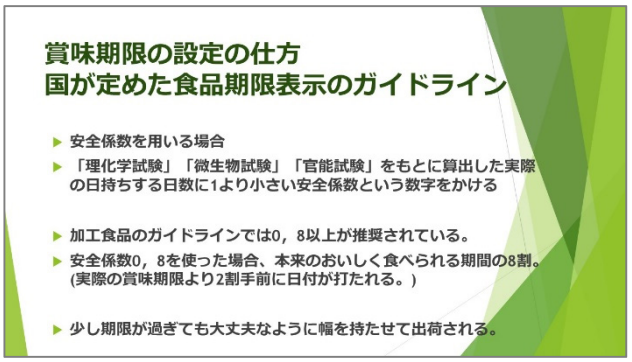


図 18

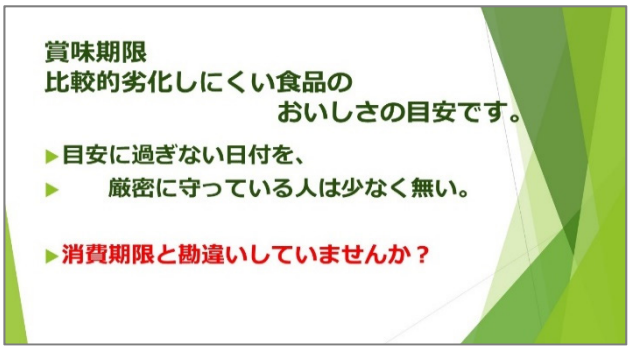


図 19

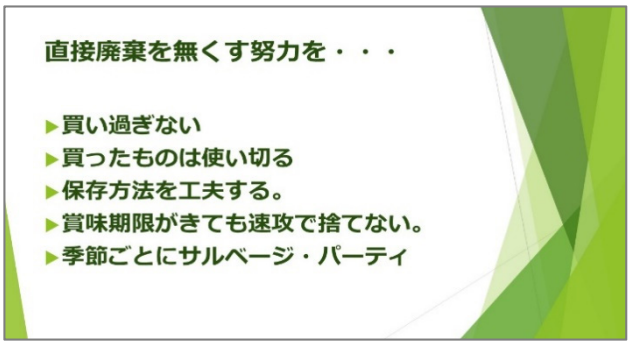


図 20

○崎田氏　まずは入り口として賞味期限の意味を味わい期限と知っていく。そしてできるだけ期限の中で食べるのが大事ですけれども、それが過ぎても工夫をしていく、ということですね、ありがとうございます。それを踏まえつつ、どのように私達消費者・市民として役割があるかというあたり、江口さんお願いします。

○江口氏　僕らお笑い集団と言っておりますが、社会課題をエンターテイメントにしている仕事も多く、フードバンクをもっと広めるために、我々芸人、そして私も先日フードバンクの新潟大使になりましたが、色々広めていくというのも仕事の一つになっております。先ほど SDGs を小学校に伝えていくとあったように、我々芸人が今、小中高 1,500 校くらい、テーマを持ってまわっております。学校で教えていけばいいと思いますが、学校はブラック企業で余計な事がもうできないのです。そうすると、僕は実は、新潟駅の南の自治会長をやっておりますが、自治会を使っていいと思うのです。自治会は子供たちとかと定期的に色々なことをするので。例えば今のようなものを町内に集めてみんなでお知らせするなどやろうかなと、話を聞いて思いました。

そしてもう一つ、ホテルで営業して、誰も聞かないところで散々苦労し、皆さんがいなくなった後、余っ

た料理が僕らの飯なんです。売れない芸人は持ち帰りたい。これ持ち帰っていいですかと、タッパーも持って来ますが、だめですよ、となる。でも本当に持ち帰りたい。僕はさっきの話で聞きたかったのは、結局海外でオッケーなのに、なぜ日本はだめなのか、その原因を聞きたい。「誰なの、それだめって言っているの」というところをもうちょっと教えてもらって、「実はここなんですよ」と言ってくれたら、我々は、こういうのをまた突いていったりするのがお仕事なので。消費者目線でもあるので。タネを明かしてほしいです。

○崎田氏　ありがとうございます。質問が出ましたのでここを解決しないといけなさそうなのですが、私の理解ですと、以前は食品の安全のことを考えて、保健所などが持ち帰りはやめてほしいとお店を指導されていたと思います。ただし最近、大変ロスが増えてきているということで、保健所などの指導も変わってきていると思っています。冨安さんにも一言、その辺の情報は入れていただきたいと思うのですが。

○冨安氏　いわゆる持ち帰りバッグ、ドギーバッグと呼ばれるものですが、これに関して消費者庁が「もったいないを行動に！食品ロス削減のための戦略企画会議」を今年４月に開催しております。消費者庁のホームページにも掲載されておりますけれども、外食で食べるときの食べきりガイドや、ドギーバッグ普及委員会という NPO が作成したステッカーがあります。このステッカーには、「食べきれずに残した料理は、自己責任で持ち帰り頂けます」と記載されており、お店に貼っていただくものになります。こういうものを戦略会議として御紹介させていただいております。

○江口氏　それはホテルではまだやっていないということ？

○冨安氏　ホテルの方々が、どのように使われているかですけれども、消費者庁主導の、その戦略会議の中で出したものについて、消費者庁、農水省、環境省連名の通知文を、都道府県の食品ロス削減担当部局に５月下旬に出しております。通知文を発出するにあたって、厚生労働省の食品安全担当部局とも協議済みで、厚生労働省からも都道府県などの衛生主管部局へ情報提供させていただく旨も通知文の中に書かせていただいている。そういったものを使ってレストランや飲食店への指導に御活用いただくことも可能かと思っています。ただ、それがうまく伝わっていないとすると我々の周知がまだ十分ではないということかもしれません。

○江口氏　今の説明を聞いていてもよくわからなくて、簡単に言うとどういうことだったのですか？

○冨安氏　簡単に言うと、自己責任で持ち帰りできますというのを利用者の方が意思表示をされれば、飲食店側は提供されてはいかがですかと。飲食店側でもやっていただけますよということ。

○江口氏　やっていただける？

○崎田氏　お店への指導が本当に何十年か長い間、安全性は今も大事ですが、食品ロスのこととあまりバランスを考えずに安全性を強調されていたけれども、火の入ったものを自己責任であれば持ち帰ってもいいという流れに、政府でも発信の仕方を変えているという理解でよろしいですね。ありがとうございます。ぜひ江口さん、地域での色々な宴会のときも、そういう話をお店の方にしていただければありがたいと思います。

　次に、事業者としてできることということで、山城さんに、今、強調して自分達事業者がやろうとしていることをお話しいただければと思います。

○山城氏　私どもはスーパーですので、100g が 98 円なのか 88 円なのか、あるいは肉のステーキを作るときに、１枚あたりを 130g にするのか 180g にするのか、売り上げをとっていくことに関しては非常に精緻に検討をしておりますが、廃棄物については、kg いくらで業者が引き取ってくれるので、コストという見方になっておりました。しかしここ 10 年くらいの世の中の変化の中で、売り上げほど精緻にはいかなくても、廃棄

物についてきちっと「見える化」することが必要だということで、食品廃棄物の発生源単位で、具体的に 2015 年度を基準にして 2020 年までには 25%削減する。2025 年までには 50%削減するという社内的な目標を対外的にも公表して進めていく、要は店舗の段階で「見える化」することを、売り上げと同じように廃棄物についてもやっていくという方針としています。

それともう１つ、食品ロスを考えたときに、一次産品の未出荷という問題もあります。前回の台風で大きな被害を受けております長野についても、リンゴが非常に大きなダメージを受けました。被災して品種や大きさなど選果ができないものを、そのまますべて私どものセンターに送ってもらい、センターの者がシナノゴールドや秋映など色々な品種を４～５個、１つの袋に入れて、先週の土曜日、日曜日の２日間、北関東、南関東そして私どもの新潟・長野の店舗で、長野県産のリンゴを販売しました。こういう規格外の商品やバラ売り裸売りというものを、お客様に御理解いただける風土になっているというのが非常に大きく、この風土がお客様の中で醸成されることが、我々も規格外を売っていく大きな追い風になると思っています。事業者としては、廃棄物の「見える化」という問題と、規格外の商品を積極的に売っていくと、このような取組を続けていきたいと思っております。

○崎田氏　ありがとうございます。事業者にとっても量的な「見える化」は重要だと思いますし、規格外品が本当に色々な流通の過程でたくさん出ていると。まず食品ロスを無くすということが重要で、出てしまったものに関しては、フードバンクさんなど色々な社会の動きがありますね。

○江口氏　フードバンクでは、メンバーだからわかるのだけど、なかなか食品が出てこないんですよ、イオンさんから。これは別にクレームではないのですが、もっと食品があるだろうと思っているのだけれども、なかなか来ないのはなぜなんですかね？

○山城氏　私どもはスーパーですので、まずは全て売り切ると。先程、新聞にも載っておりましたけれども、「つれてってシール」というものを貼りながら値段を下げて段階的に売ると。まず、売る努力が最優先の業務と考えておりますので、最終的に残りそうなもの、あるいは、賞味期限が近いものについては、試食でお客様に提供するなどして、廃棄を少しでも減らす努力はしていると御理解いただければと思います。

○崎田氏　フードバンクという取組が全国にありますけれども、その前に、スーパーとしては出さない努力をするというお話。とても重要なことだと思いますが、どうしても出てしまったものに関しては、期限が切れる前にフードバンクさんと相談するなど、そういう可能性はないでしょうか。

○山城氏　西の店舗では、自治体や地域のステークホルダーと連携しながら、フードバンクと取組をやっているところがあります。ただし、それは各地域の特性がありますので、私どもも、もし新潟で参加できるような体制が整えば、それはもう、前例としてイオングループでやっておりますので、進めていきたいと考えております。

○崎田氏　ありがとうございます。先程「見える化」をするとおっしゃってくださったのが、とても重要なことで、まずは自分たちの状況がどうかというのがデータ的にはっきりして、それを公表していただける状態になれば、社会がどのように応援できるかわかってくるのではないかと思います。先程、環境省の冨安さんから連携協働で相乗効果を上げてほしいというお話がありました。皆さんの活動を連携していくというとき、どのようなことに取り組んだらいいのか、シンポジウムのテーマが新型イニシアティブですので、御提案なり、皆さんの宣言なり、お話しいただければありがたいと思います。

＜各主体の連携に向けて＞

○石丸氏　まずは各ステークホルダーそれぞれみんなが、民間もそうですし国や行政もそうですし、大学もそうですが、自分が主体だと考えることが一番大事ではないかと思っています。フードバンクの話が出たので例を挙げさせていただきますと、先週末に東京都内の豊島区にある帝京平成大学で、学生団体がフードドライブを行いました。そこでのアンケー

トの結果を少し紹介させていただくと、食品ロス問題の認知度は70%程度だったのですが、食品ロス対策に関する活動をやったことがない人は95%で、実際にフードドライブへの寄付などの行動している人が５%程度しかいないという結果になりました。現場でお持ちいただいた食品を学生達が集めているところを拝見したり、豊島区のお話も伺ったのですが、持って行っても受け付けられない食品もある。また、受取窓口が区内の支所とかなので９時～５時しか開いていなくて、訪れたお客様が、普段から家にこういった食品を集めているのだけれども、仕事をしているので日中は持って行けず、そのうちに期限がきれてしまう、イベントなどで集めてくれると助かるとおっしゃっていました。このように、まず気持ちを持つということも一番大きいと思うのですが、それだけではなく、連携をさせるための仕組み作りが非常に重要ではないかと思っています。学の役割として、先週末に行ったフードドライブではかなり多くの食品が集まりまして、区の方も、大学と連携したことによる結果が出たなとおっしゃっていました。このように、行政の方にはぜひ、大学や地元、企業、民間の力を活用して、繋げる取組をしていただければと感じております。

山大　社N

○崎田氏　気持ちから行動へというのが大事だけれども、そのためには繋ぐ仕組みがないといけない。気持ちがあるのは 70%だけれど行動しているのが５%という学生さんのアンケート。残念ですがそれが現実だと思います。ありがとうございます。そういう意味では大学と連携するなど、色々な場を作っていくというのが非常に重要だと思っています。次は江口さん、よろしくお願い致します。

○江口氏　僕らは伝わっていないことを伝える工夫をやっていきたいというのがありまして、結局フードバンク大使になってはいるものの、今のような結果が出ているということは、まだ伝える力が弱いのですが、そういうときに、他の県はわかりませんが、新潟は経済とエンターテイメントが分離しているのですよ。例えば、わかりやすく言うと、商工会議所の中に街づくり部会など色々な部会がありますが、エンタメ部会はないのです。今日司会をやっている山田彩乃さんはミス・アースで環境のことを考えていらっしゃるし、実は次回フードバンク大使になるなど、エンタメでテレビでも活躍されているのですね。しかも群馬の方まで行ったりしている。今、新潟に多くのエンタメの方たちがいるから、そこと全部組んで同時多発で情報発信していくような、経済側と我々とでチームを組めたらもっと面白い展開になるのではないかと思っていて、そういう動きを別角度でやっていきたいと思っております。

○崎田氏　ありがとうございます。経済とエンタメの連携で、先程おっしゃっていた 2010 運動やフードバンクにつながるなど、そういうことが時間をかけて信頼関係を作りながらきちんとできれば素晴らしいですね。波多野さんはいかがですか。

○波多野氏　国は賞味期限、消費期限という名前を付けました。漢字で書きますとわかりますが、ひらがなで書くとしょうみとしょうひの「み」と「ひ」一字しか違わないわけです。ちょっと聞き違えると期限だけが強く印象に残り、期限は守らなければと思うわけです。ストップとかセーフとかお年寄りにもわかるような簡単なネーミングであれば、消費者は行動を起こしやすかったと思います。賞味期限は美味しく食べられる期限の目安だと分かっても、じゃあ過ぎたら美味しくないということだから食べたくないという意見です。友人と話して、「大丈夫なのよ、賞味期限がきてもまだ食べられるんだから」「そうなの？じゃあ波多野さん食べてくれる？」これが現実でございます。何とかネーミングをお願いします。

○崎田氏　ありがとうございます。では、山城さん。消費者の皆さんの盛り上がりとともに、どのように事業者が連携できるか、どんな可能性を感じておられるか。一言お願いします。

○山城氏　まさに、リサイクルループみたいな考え方だと思います。店舗で出てきたごみをベンダーで堆肥化して、それを私どもの直営農場で堆肥として使い、店頭でまた売っていく。これも１つのリサイクルループでありますし、フードバンク的な取組についてもループでありますし、そういう循環できるような体制を早急に作れるように、事業者としても努力してまいりますし、自治体や NPO 法人など、そういう部分の御支援をいただければと思っております。

○崎田氏　発生抑制は大事だけれども、出てしまったものに関しては堆肥化すると。そういうものでできた

お野菜やお肉を、もう一回消費者に買っていただくことも大事だというお話ですね。そういう食品が出ている状況ですか？

○山城氏　今、西日本のイオングループで 110 店舗くらいの規模でやっておりますし、直営の兵庫県三木に農場があり、そこでもやっている取組ですので、全国にイオン直営農場が 21 か所ありますので、たまたま新潟にはございませんが、残念ながら。そのような環境ができれば、進めていくということです。

○崎田氏　直営農場があるので、今のところフードバンクよりも、そちらに回っていくルートがあるということですね。状況が分かってきました。そうすると後はきっと、地域の方はどういうものはぜひフードバンクへ、という提案を一生懸命していただくという。そういう流れも作っていければということだと思います。ありがとうございます。冨安さん、こういう色々なお話がありましたけれども、どのようにこれを受け止めていこうと思われたか、一言よろしくお願いします。

○冨安氏　食品ロスの削減の取組については、まず現状を知ること、そしてその取組手法を知ることが大事だと思っています。先程波多野さんから御紹介ありました新潟市のごみの組成調査、これは新潟市の中でどういう生ごみがどういう形で出ているのか、それを知ることで対策のヒントにも繋がると思います。私の方で御紹介しました食ロスダイアリー、これも結局、我が家にどういった特性があるのかを知ってもらう上では非常に使えるツールだと思っていますし、先程江口さんがおっしゃられた自治会で取り組むという話も、例えば自分達の自治会はどういう状況なのか把握してみるのも、食ロスに取り組むきっかけになるのかなと思いました。

あと環境省の方で御紹介しました自治体向けの取組マニュアルの中では、自治体とホテルの連携の具体例や、自治体と協力していただける飲食店との取組例、公立小学校での取組といったことを色々書いています。我々としては自治体の方々向けに作っている面もありますけれども、逆にいうと、自治体からなにかアクションを受ける方々にとっても使えるものになっていると思いますので、ぜひそういうところを活用いただいて、自治体や国に逆に提案もすると。そういう意味では自治体だけでなく、皆さんにとっても有益かなとも思っております。令和元年度版も今日からホームページで公開していますので、御活用いただければ幸いです。

○崎田氏　賞味期限と消費期限の話は、消費者庁に伝えていただくと。

○冨安氏　はい、先程の私の説明の中の普及啓発資料で、農水省が賞味期限は美味しく食べられる目安ですというチラシも作っているのですけれども、波多野さんからの周知が足りないというお叱りだと思いますので、状況は共有したいと思っております。

○崎田氏　ありがとうございます。食品ロスに関して、それぞれの立場でかなり意欲が高まっているということは見えてきました。けれども現実には、暮らしの中で実践している若者は非常に少ないなど課題も見えています。そういう中で連携して取り組むことで情報をできるだけ繋いでいくということが必要だろう、と非常に強く思います。

今日は、新潟市さん、こういう場を設定してくださいましてありがとうございます。皆さんのお話を受けて、ぜひ新潟の取組を広げていただきたいと思うのですけれども、なにか一言、新潟市環境部長の長浜さん、よろしくお願いします。

○新潟市環境部長 長浜裕子氏　皆様大変ありがとうございました。多くの皆様に、新潟にお越しいただきましてありがとうございます。こうして盛大に開催できましたのも、皆様の御尽力のおかげと大変感謝しております。今回、先生の講演から始まりまして、事例発表、それから今のパネルディスカッションと、非常に参考になりました。パネルディスカッションも大変盛り上がりまして、波多野さんなど、常日頃からお付き合いがあるのですけれども、強い思いを今改めて感じたので、これ

からどうやっていけばいいのかを一緒に考えていけたらと思っております。

先程紹介があったように、新潟市のごみの４割が生ごみで、その中に相当量の食品ロスがあるということが組成調査でわかりました。分別等の見直しにより、ごみを３割削減することができ、市民の皆様のおかげと思っているのですけれども、ここ数年は横ばい状態が続いており、次のステップに入っていかなければいけないと。そのターゲットの１つは、やはり今問題になっている食品ロスをどうやって減らしていくかだと考えております。そのヒントをいただき、今日を機会に、また更に削減に向けて取組を進めてまいりたいと思っております。ありがとうございました。

○崎田氏　ありがとうございます。そして中谷内さん、先程、事例発表でライスバレーにいがたプロジェクト、プラスチックのお話をいただき、先進的に取り組んでおられますが、食品ロスの盛り上がりに応援を一言いただくことはできますか？

○中谷内氏　僕自身小さいころから、食べ物は残すな、全部食えという指導のもとに育ってきましたし、米も一粒も残すなという中で育ってきたので、今でもなるべくごみは出さないようにと。先程石丸先生が言われたように、個人個人が思いを込めてやっていかなければいけないことなのかなと思っています。またこのような機会がありましたら是非参加させていただきたいと思います。勉強になりました、ありがとうございました。

○崎田氏　皆さん本当にありがとうございます。私もパネリストの方、そして会場の皆さんの御意見を伺いながら、３つだけ最後にお話をしたいと思いました。１つ目は、定量化をして、どこに課題があるのかをはっきりみんなで共有をすることが大事だと思います。次に、子供たちに伝えることも大事だとの御発言がありましたが、次の世代にきちっと伝えることが大変重要なのではないかと思いました。３つ目は、それぞれの役割をきちんと率先してやる、ということはもちろんなのですが、それだけではなく、他の立場の方ときちんと連携をする。連携をするときに、具体的な仕組みを作っていくことをすすめたい。石丸先生もおっしゃいましたが、学生と地域で一緒に調査活動をして定着させるとか、あるいは関心のある事業者と連携して自治体が地域の消費者と事業者に呼びかけたり、食べきり協力店づくりなどありますが、そういう様々な仕組みをきちんと作っていくということで発信力も生まれて状況は広がるのではないかと思います。今日、仕組みの１つとして経済とエンタメの連携ということで、これは新潟から発信していただけそうですが、そういった取組もぜひ広げていただければと思います。会場の皆さんそれぞれ、きっと色々な取組をしておられるので、自分だったらこうしたい、というお気持ちはたくさんあると思います。ぜひ、こういう場での出会いなどをきっかけに連携をひろげて、具体的な食品ロス削減に現実に取り組んでいただければありがたいと思います。

今日は、最初のお話はプラスチックのことをかなり明確にお話させていただきましたが、パネルディスカッションは食品ロスということで、これからみんなで作っていく時期ですので、ぜひ、今日のお話など参考にしていただきながら、一歩一歩広げていただければ大変ありがたいと思っております。会場の皆さん、お聞きいただきましてありがとうございます。まずは壇上の皆さんに大きな拍手をお願いしたいと思います。また、会場の皆さんに、今日をきっかけに頑張りましょうということで、もう一回大きく拍手をしていただくとありがたいと思います。どうもありがとうございました。

（４）次回開催地挨拶

和歌山県環境生活部環境政策局長　古川勉氏

和歌山県環境政策局長の古川と申します。本日は御出演の皆様の色々な意見を聞かせていただき大変勉強になりました。全国からお集まりいただき、このたびの台風被害にあわれた地域の方もあると思います。お見舞い申し上げます。和歌山県も栃木県に応援に行き、ごみの処理等お手伝いをさせていただいております。和歌山県は近畿の一番南にあり、毎年のように台風の被害がでていますので一日も早く復興されますように、その力を活かしていきたいと思います。

今年は大阪でG20 サミットが開催されました。それにあわせて関西広域連合では「関西プラスチックごみゼロ宣言」をいたしました。和歌山県では、プラスチックごみ対策や食品ロスの問題も力を入れて取り組もうと、頑張っております。新潟も日本海に接しておりますが、和歌山は太平洋に面している海に囲まれた地域です。そういう意味では海ごみの問題・プラごみの問題が一番の課題になると思っております。来年は３Ｒ推進全国大会を和歌山で開催しますので、そうした課題・テーマでやっていきたいと思います。

新潟は日本酒がおいしいところです。和歌山県は、新潟ほど日本酒は多くはありませんが、海の幸、山の幸、おいしい果物などがたくさんあります。また、世界遺産の高野・熊野があり、意外と知られていませんが、パンダも６頭おります。そういうところも見ていただきたいと思っております。

本日の皆様の熱い思いをもって、来年は和歌山へぜひお越しいただきたいと思います。本当に本日はお疲れ様でした。

４．３Ｒ推進展示コーナー

国際会議室（マリンホール）入口に続く４階ホワイエに３Ｒ推進展示コーナーが設けられ、31 団体が出展したほか、３Ｒ促進ポスターコンクールの入賞作品が展示されました。開会前には、石原宏高環境副大臣らが展示コーナーを訪れ、ブース担当者の説明を熱心に聞いていました。

【出展者】（順不同）

〇環境省〇新潟市〇３Ｒ活動推進フォーラム〇新潟県〇３Ｒ推進団体連絡会〇ガラスびん３Ｒ促進協議会〇ＰＥＴボトルリサイクル推進協議会〇紙製容器包装リサイクル推進協議会〇プラスチック容器包装リサイクル推進協議会〇スチール缶リサイクル協会〇アルミ缶リサイクル協会〇飲料用紙容器リサイクル協議会〇段ボールリサイクル協議会〇リデュース・リユース・リサイクル推進協議会〇NPO 法人持続可能な社会をつくる元気ネット〇日本再生資源事業協同組合連合会〇公益社団法人食品容器環境美化協会〇一般社団法人パソコン３Ｒ推進協会〇「プラスチック・スマート」フォーラム事務局（一般財団法人日本環境衛生センター）〇富山県〇福井県〇上越市〇株式会社バイオマスレジン南魚沼〇新潟お笑い集団 NAMARA〇新潟気軽に省エネくらぶ〇にいがた菌ちゃん野菜応援団〇REBIRTH 食育研究所〇NPO 法人フードバンクにいがた〇生活協同組合コープにいがた〇生活協同組合コープクルコ〇生活協同組合パルシステム新潟ときめき

展示コーナーを視察する石原副大臣、中原市長、崎田3R活動推進フォーラム副会長ら

▲▼展示コーナーには、主催者をはじめ、自治体、関連団体等多数出展されました。

◀出展者によるクイズも行われました。

◀３R促進ポスターコンクール入賞作品の展示

５．名刺交換会

記念シンポジウム終了後、４階ホワイエの３Ｒ推進展示コーナーで、主催関係者や講師・パネリストと大会参加者による名刺交換会が行われました。出席者は、用意された新潟県産の洋ナシ「ル　レクチエ」を使った「ルレクチエウォーター」や、新潟のお菓子「サラダホープ」などを味わいながら、歓談に花を咲かせていました。

◀リユースカップを使用しました。

６．関連イベント

（１）施設見学会

本大会の関連イベントとして、新潟市と３Ｒ活動推進フォーラムが主催する施設見学会が 10 月 29 日(火)午前中に行われ、新潟市亀田清掃センターを見学しました。９時に新潟駅南口貸切バス乗り場に参加者 44 名が集合し、大型バスで新潟市亀田清掃センターに向かいました。

亀田清掃センターは、１日 390 トンのごみを処理できる新潟県下最大のごみ処理施設で、焼却した熱を利用して最大 5,500 キロワットの発電ができます。亀田清掃センターでは、施設について説明を受けた後、センター内を移動し中央制御室やごみピットなどを見学しました。その後、いくとぴあ食花に移動して昼食をとり、大会会場である朱鷺メッセ 新潟コンベンションセンターに到着しました。

映像で施設の説明を受ける参加者

収集車がごみピットへごみを投入する様子を視察

蒸気タービン発電機の説明を受ける参加者

中央制御室を視察

（２）にいがた市民環境フェア

10 月 20 日（日）に、新潟市内の亀田駅前地域交流センターにて「にいがた市民環境フェア」（主催：にいがた市民環境会議　共催：新潟市、新潟市地球温暖化対策地域推進協議会）が開催されました。

同展は、新潟市民が１年に１度地球環境のために集う環境フェアで、今年は 20 団体が出展。展示の他、エコクイズ大会、早通小学校による環境学習発表などのステージイベントやエコクイズラリーもあり、500 名の方が来場しました。新潟市、３Ｒ活動推進フォーラム、新潟気軽に省エネくらぶもブース出展しました。

3R活動推進フォーラムの出展ブース

会場の模様

7．資料

（1）第 14 回３Ｒ推進全国大会開催案内（参加申込書）

表面

裏面

（2）参加者用パンフレット

1ページ

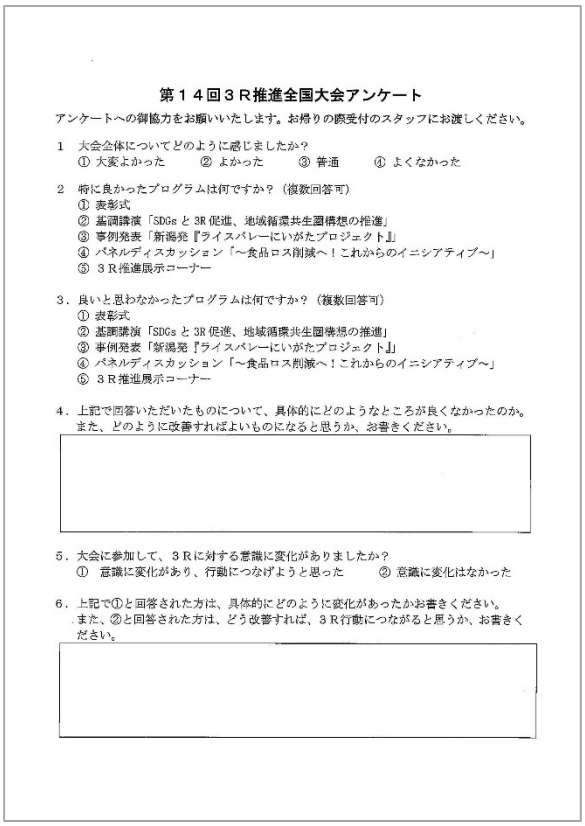
2ページ

3ページ

4ページ

（３）来場者アンケート

①アンケート票



第１４回３Ｒ推進全国大会アンケート

アンケートへの御協力をお願いいたします。お帰りの際受付のスタッフにお渡しください。

1　大会全体についてどのように感じましたか？
① 大変よかった　② よかった　③ 普通　④ よくなかった

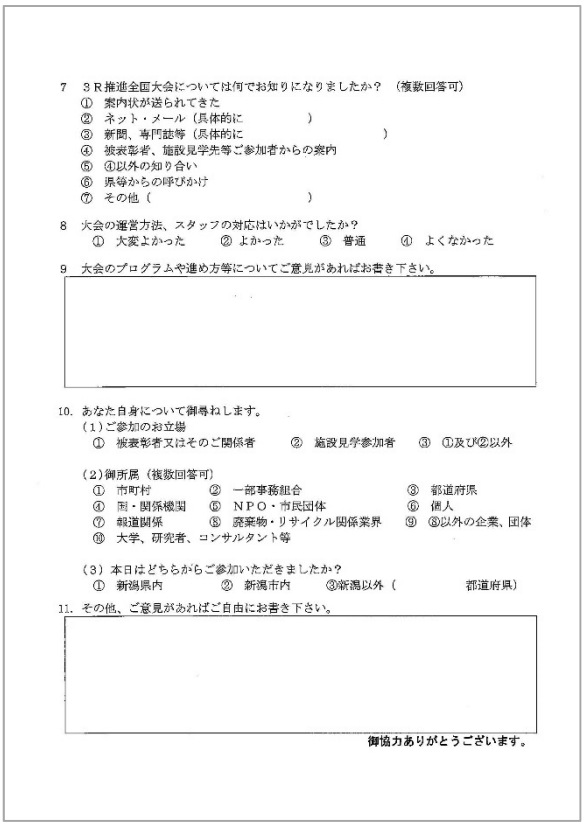
2　特に良かったプログラムは何ですか？（複数回答可）
① 表彰式
② 基調講演「SDGs と 3R 促進、地域循環共生圏構想の推進」
③ 事例発表「新潟発『ライスバレーにいがたプロジェクト』」
④ パネルディスカッション「～食品ロス削減へ！これからのイニシアティブ～」
⑤ ３Ｒ推進展示コーナー

3．良いと思わなかったプログラムは何ですか？（複数回答可）
① 表彰式
② 基調講演「SDGs と 3R 促進、地域循環共生圏構想の推進」
③ 事例発表「新潟発『ライスバレーにいがたプロジェクト』」
④ パネルディスカッション「～食品ロス削減へ！これからのイニシアティブ～」
⑤ ３Ｒ推進展示コーナー

4．上記で回答いただいたものについて、具体的にどのようなところが良くなかったのか。
また、どのように改善すればよいものになると思うか、お書きください。

5．大会に参加して、３Ｒに対する意識に変化がありましたか？
① 意識に変化があり、行動につなげようと思った　② 意識に変化はなかった

6．上記で①と回答された方は、具体的にどのように変化があったかお書きください。
また、②と回答された方は、どう改善すれば、３Ｒ行動につながると思うか、お書きください。



7　３Ｒ推進全国大会については何でお知りになりましたか？（複数回答可）
① 案内状が送られてきた
② ネット・メール（具体的に　　）
③ 新聞、専門誌等（具体的に　　）
④ 被表彰者、施設見学先等ご参加者からの案内
⑤ ④以外の知り合い
⑥ 県等からの呼びかけ
⑦ その他（　　）

8　大会の運営方法、スタッフの対応はいかがでしたか？
① 大変よかった　② よかった　③ 普通　④ よくなかった

9　大会のプログラムや進め方等についてご意見があればお書き下さい。

10．あなた自身について御尋ねします。
（1）ご参加のお立場
① 被表彰者又はそのご関係者　② 施設見学参加者　③ ①及び②以外

（2）御所属（複数回答可）
① 市町村　② 一部事務組合　③ 都道府県
④ 国・関係機関　⑤ ＮＰＯ・市民団体　⑥ 個人
⑦ 報道関係　⑧ 廃棄物・リサイクル関係業界　⑨ ⑧以外の企業、団体
⑩ 大学、研究者、コンサルタント等

（3）本日はどちらからご参加いただきましたか？
① 新潟県内　② 新潟市内　③新潟以外（　　都道府県）

11．その他、ご意見があればご自由にお書き下さい。

御協力ありがとうございます。

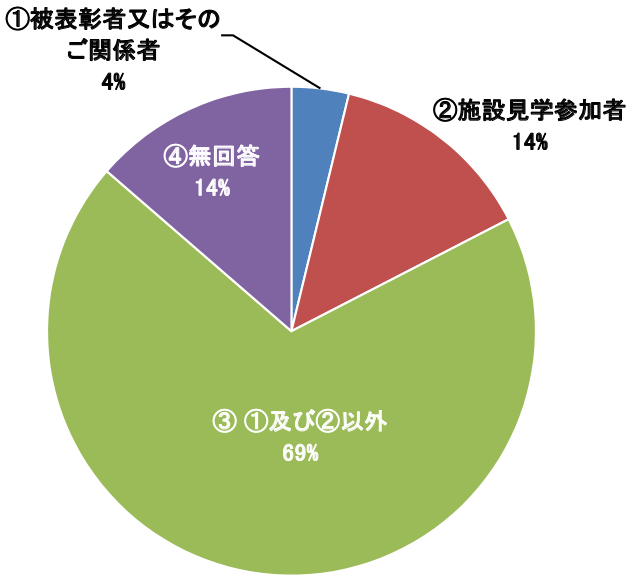
②アンケート集計結果

回答数は 132 名でした。

【参加者の属性】

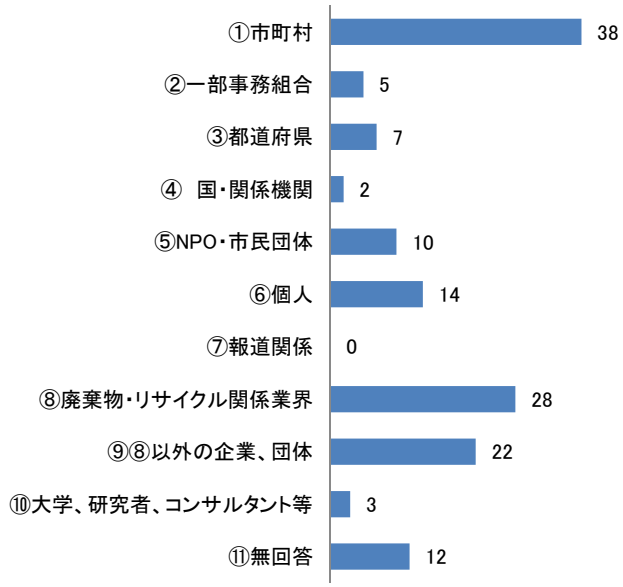
10　あなた自身について御尋ねします。

（1）ご参加のお立場

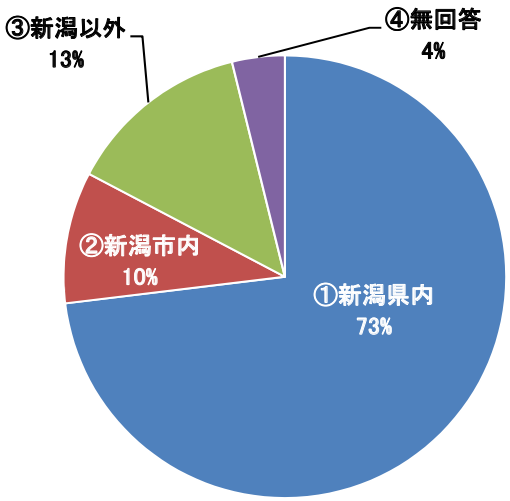


（2）御所属（複数回答可）

（単位：人）



(3) 本日はどちらからご参加いただきましたか？

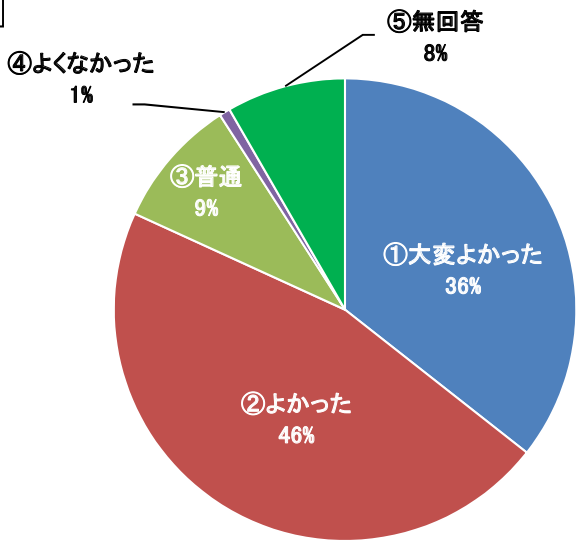


①新潟県内
②新潟市内
③新潟以外（都道府県）
④無回答

＜③と回答された方＞
・茨城県　・東京都
・富山県　・石川県
・長野県　・愛媛県

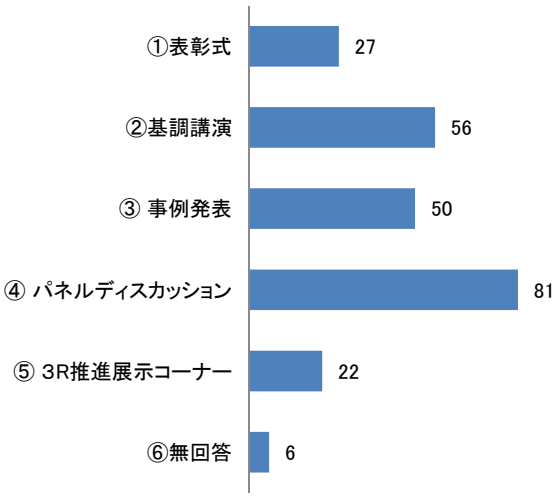
1　大会全体についてどのように感じましたか？

①大変よかった
②よかった
③普通
④よくなかった
⑤無回答



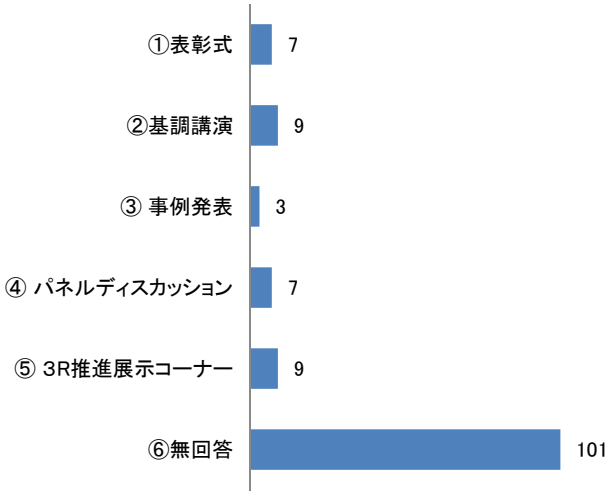
2　特に良かったプログラムは何ですか？
（複数回答可）

（単位：人）



3　良いと思わなかったプログラムは何ですか？
（複数回答可）

（単位：人）

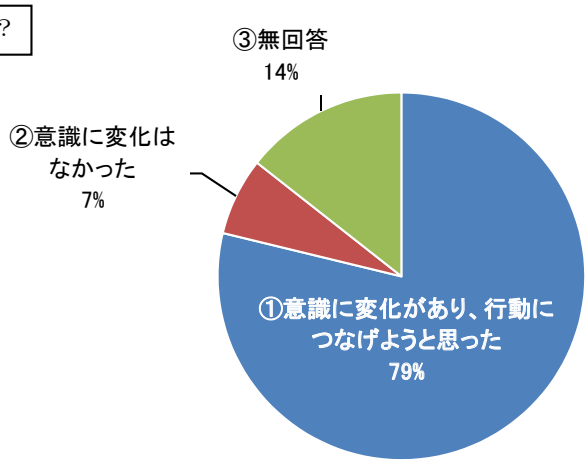


4　上記で回答いただいたものについて、具体的にどのようなところが良くなかったのか。また、どのように改善すればよいものになると思うか、お書きください。

〈大会式典〉
・表彰者から取組の概要説明をしていただいた方が、より来場者に伝わるものがあるのではないでしょうか。
・３Ｒ活動優良企業には都道府県名を記すべき。どこの企業かがわからない。団体も同様。
〈基調講演〉
・内容意義は理解できたと思いましたが、説明が速過ぎて資料を追うのが大変であった。
・話が専門的過ぎた。もっとざっくりとキーワードを伝えるだけでも十分伝わる。
〈事例発表〉
・もう少し具体的（技術的）な話が聞きたかった。
・新潟が主導してできることがこんなにもスゴイのか！と惹きつけられました。
・ライスバレーにいがたは現場の様子を見たいと思った。
〈パネルディスカッション〉
・紙資料がもったいないと思いました。手間はかかるかもしれないのですが、タブレットをもっている人はダウンロードできるようにすればいいと思います。
・パネルディスカッションでは、江口様の意見がとても分かりやすくて「共感」と思うことが沢山あった。
・賞味期限と消費期限の問題が論議されたが、消費期限のみで行けばよいと思いました。贅沢になった人達には、美味でないとなればそれは買いません。それが残れば売る方は捨てるしかなくなる。この問題は消費者の意識の問題なので２つあることで混乱が起きていると思います。
・皆さん話をされる事は正しいと思うのですが、立ち位置が違っているのでやや話がバラついてしまっていたように感じました。
・学ぶ事が多かった。
・賞味期限の考え方、まだ食べられる事。
〈３Ｒ推進展示コーナー〉
・会場内で展示物が見れると良かった。
〈その他〉
・何かに取り組んでいるステージの人のみの話だけで聞いた人に質問する時間がない。休憩の時間に参加者の声も聞いてもらいたい。

5　大会に参加して、３Ｒに対する意識に変化がありましたか？

①意識に変化があり、行動につなげようと思った
②意識に変化はなかった
③無回答



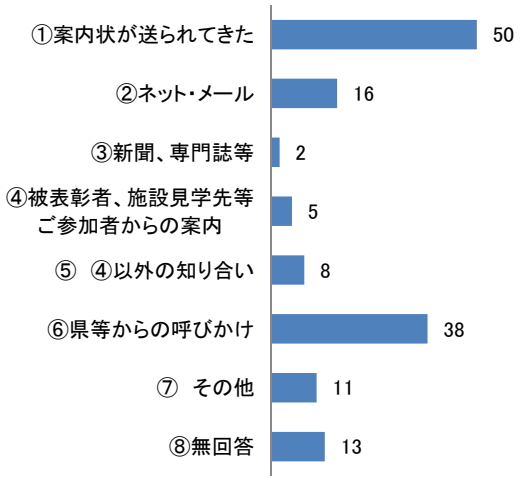
6　上記で①と回答された方は、具体的にどのように変化があったかお書きください。また、②と回答された方は、どう改善すれば、３Ｒ行動につながると思うか、お書きください。

〈①と回答された方〉
・他団体との出会いもあり、全体的に大変勉強になりました。ありがとうございました。
・食品ロスが思った以上に多いと思った。これまで以上に使い切りを意識したい。また、賞味期限を神経質にとってしまうことが多いが、実際にはかなり余裕があると知った。早めの使い切りを重視しつつも、多少過ぎても有効活用したい。
・あらためてプラスティックごみを減らそうと思った。食ロスをこれからも続けていきたい。
・食べきれる量だけ買う。エコバッグを持ち歩く。
・まずは他人ごとではなく自分ごとへ。

・身近に出来る具体的な内容を知ることが出来た。
・毎日の食事は食べ残しをなくす努力をしようと思う。全員が主役であるよう連携強化を図るために一人一人を大切にすることが３Ｒ推進できると思った。
・自分が活動している場所で情報を共有、発信をしていきたいと思います。
・リサイクル商品の割高感を無くすこと、環境にやさしい資材で地産地消する取組が必要だと思いました。
・各自治会活動のゴミ分別を各個人がより細やかな内容で分別できるよう、市→町内自治会→個人が手をつなぎ、ゴミを削減出来るよう努めて行きたいと思います。
・自分でやれる事はやっていましたが、まだまだやれる事が多くあると思いました。
・３Ｒという言葉の意味を、子供たちの絵画などと併せて教えて頂いて、自身の生活にも生かそうと思いました。
・食品ロスをなくすことを家族で話し合う。
・現在も環境問題を意識し、仕事を展開しており、さらに３Ｒを意識したビジネスモデルの構築を考えたい。
・事例発言参考になった！生ゴミは 40%ロスの削減重要。
・もともと意識しているからこそ参加したのだが、講演等を聴き、今まで以上に意識を高めて行動することの大切さを実感した。
・一生懸命な方達の取組を感じられて刺激になった。
・米がプラになることを知った。
・フードロス対策、フードバンクの存在を認識した。
・自治体職員として、環境教育、市民への普及啓発の方法について、大変勉強になった。現状を理解できたことと、様々な立場の方の意見を聞くことが大切だと思いました。
・職場での啓発活動に力を入れたい。
・SDGs 等の世界的な指標から、個人の行動に落とし込めるようなプログラム構成であったため、SDGs をより身近なものとして捉えるようになった。
・フードロスについて、外食でのテイクアウトの認識が無かったので、改善したい。
・SDGs の避けられない流れの中で、食品ロス削減も注目されている。取り組むことが大事になっていることに気付かされた。
・プラ削減について深く考えていこうと思った。
・リサイクル社会の促進に各個人の参加が重要だと改めて感じた。
・最新の取組を聞くことができた。
・わたしも無意識にスーパーの棚の奥から商品を取っていました。改めたいと思います。
・パネルディスカッションの皆様の意見が大変興味深かった。まずは自分事として知ること、そして行動すること、それをどう皆でつながっていくかということを考えていきたい。
・食品ロスをなくす為に、日付を大きく記載するようにする。
・SDGs の重要性に対する意識が高まった。様々な３Ｒの事例や情報を知ることが出来た。
・まずは他人ごとではなく自分ごとへ。自分でできることを考える。身の回り、食品ロス、日記をつける。

〈②と回答された方〉
・今の意識・行動を継続するのみ。
・個人的には協力しています。あとは行政、環境・消費、農水省、３団体協調して進めてほしい。

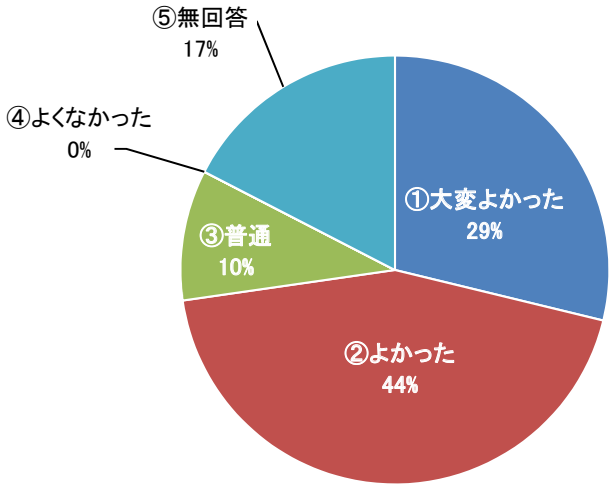
7　３Ｒ推進全国大会については何でお知りになりましたか？
（複数回答可）



＜②と回答された方＞
・環境省のＨＰ
・新潟市
・燕市
・県、全国ネット
＜③と回答された方＞
・日報の記事
＜⑦と回答された方＞
・新潟市から
・３Ｒ活動推進フォーラムから
・生協関連
・再生利用事業者

8　大会の運営方法、スタッフの対応はいかがでしたか？

①大変よかった
②よかった
③普通
④よくなかった
⑤無回答



9　大会のプログラムや進め方等についてご意見があればお書きください。

・ポスターの展示が、今年は実物だった。とても良いと思います。
・時間は守って欲しい。（熱が入るので難しいとは思いますが。）
・内容を聞きまして、大変意義深く、これからの世界で海洋汚染の環境をみると、進めることが早急であることが大変必要であることが理解できた。特に新潟発「ライスバレーにいがた」の取組について、企業の発展向上を期待します。
・第２部にも一度休憩がほしい。
・基調講演やパネルディスカッションの時間をもっと取れると良いのにと思いました。
・技術面（リサイクル）の紹介や分科会（３Ｒごと）の関係などで、より大規模（情報発信）に開催してはいかがでしょうか？
・パネルディスカッションが良かった。
・だんだんと個々人に近づき大変良かったと思います。パネルの進め方、とても良かったです。

11　その他、ご意見があればご自由にお書き下さい。

・主婦としてできること。食品ロス削減に努めていきたいと思いました。
・全体的に話のスピードが速く、専門的な言語が多い中で、何で早口で進めるのか。地球が危ないので急いでいるのか？１人が早口だと皆が合わせてしまう。
・３Ｒ推進展示コーナー出展者が積極的に説明していただき、好感が持てて良かったです。
・３Ｒは一般に認識不足と思われる。メディアを通じてもっともっと運動を広げて欲しい。
・内容は素晴らしかったと思う。もう少し簡単にやさしくして一般の人にも聞いて欲しいです。
・新潟市のゴミ収集中 40%生ゴミが出ている事に驚いた。食品ロス、生産者側（見込み誤りを無くす）、買う者側（欲張らず食べられる量だけ買って消費する。）を削減する努力を行う。
・３Ｒを進めていくことで、環境が良くなっていくと思われるので、一歩一歩出来ることから意識を持って進めることが大事。
・代理で出席しましたが、個人の生活を見直すきかっけとなり良かったです。
・「新潟省エネくらぶ」の活動報告が興味を持って身近に感じた。大会に対し勉強不足でした。食品ロスの取り組みは意外に分かりやすかった。

（4）報道掲載記事

ウエイスト マネジメント
9 月 15 日

第14回「3R推進全国大会in新潟」開催へ
〈 環境省、新潟市、3R活動推進フォーラム 〉

環境省、新潟市、3R活動推進フォーラムは、10月29日（火）、新潟市で「3R推進全国大会」を開催する。「niigata 新型イニシアティブ～知識と意識で3Rを推進」をテーマに、新潟発「ライスバレーにいがたプロジェクト」の事例発表や、食品ロス削減をテーマにしたパネルディスカッションなどのシンポジウムを行う。

●日　時：2019年10月29日（火）13：00～16：30
●会　場：朱鷺メッセ　新潟コンベンションセンター
●主　催：環境省、新潟市、3R活動推進フォーラム
●内　容：第1部　式典
・循環型社会形成推進功労者環境大臣表彰
・3R促進ポスターコンクール最優秀賞表彰
第2部　記念シンポジウム
・基調講演「SDGsと3R促進、地域循環共生圏構想の推進」
講師：3R活動推進フォーラム副会長　崎田裕子氏
・事例発表　新潟発「ライスバレーにいがたプロジェクト」
講師：㈱バイオマスレジン南魚沼　専務取締役 経営企画室　室長　中谷内 美昭 氏
・パネルディスカッション「～食品ロス削減へ！これからのイニシアティブ～」
●関連イベント：
・施設見学　新潟市亀田清掃センター、いくとぴあ食花　10月29日（火）9：00～12：25
・にいがた市民環境フェア　10月20日（水）10：00～15：00　会場：亀田駅前地域交流センター
●参加費：無料
●問い合わせ：3R活動推進フォーラム事務局　☎03-6908-7311

月刊廃棄物　10 月号

3R推進全国大会開催へ
環境省他　10月29日に新潟市

環境省、新潟市、3R活動推進フォーラムが開催する第14回3R推進全国大会が、10月29日に新潟市の朱鷺メッセで開催される。

同大会は、国民・事業者・行政が一堂に会し、取組みや知見を共有・発信することで3Rへの理解と取組みを深めるために毎年開催されている。当日は、SDGsと3Rをテーマとした基調講演や、事例発表、3R促進ポスターコンクールも行われる。さらに、新潟市亀田清掃センターへの施設見学なども予定されている。

詳細は、3R活動推進フォーラムのウエブサイト（https://3r-forum.jp）で。

循環経済新聞　10 月 7 日

ディスカッションを実施
3R推進全国大会　食品ロスなどをテーマに

環境省、新潟市、3R活動推進フォーラムは10月29日に朱鷺メッセ新潟コンベンションセンターで「第14回3R推進全国大会」を開催する。今年度は「新型（niigata）イニシアティブ～知識と意識で3Rを推進」をテーマに、スローガンに食品ロスや海洋プラスチックごみ削減についての発表やパネルディスカッションなどを実施する。

当日は、循環型社会形成推進功労者環境大臣表彰や3R促進ポスターコンクール最優秀賞表彰の式典を行う他、基調講演「SDGsと3R促進、地域循環共生圏構想の推進」（NPO法人持続可能な社会をつくる元気ネット・崎田裕子理事長）、事例発表「新潟発『ライスバレーにいがたプロジェクト』」（バイオマスレジン南魚沼・中谷内美昭専務）、パネルディスカッション「～食ロス削減へ！これからのイニシアティブ～」（崎田裕子理事長、環境省、新潟県内の団体および事業者）を行う。

ブース展示では▽令和元年度3R促進ポスターコンクール入賞作品▽新潟県、新潟市、新潟県内の自治体▽環境省関東地方環境事務所▽3R推進団体連絡会（ペットボトル等容器包装リサイクル法関連8団体）▽3R活動推進フォーラム▽日本再生資源事業協同組合連合会▽リデュース・リユース・リサイクル推進協議会▽新潟県内のNPO、企業団体等――について紹介する。

参加申し込みは、3R活動推進フォーラムホームページ（http://3r-forum.jp）で、10月23日まで受け付けている。

第14回3R推進全大会を開催へ

10月29日に新潟市で
環境省、3RFなどが主催

第14回3R推進全国大会が、10月29日に新潟市の朱鷺メッセ新潟コンベンションセンターで開催される。主催は環境省、環境省関東地方環境事務所、新潟市、3R活動推進フォーラムで、今年のテーマは、「新型（niigata）イニシアティブ－知識と意識で3R推進－」となる。当日は、同フォーラム副会長の崎田裕子氏が、「SDGsと3R促進、地域循環共生圏構想の推進」をテーマに基調講演、続いて事例発表、食品ロスをテーマにパネルディスカッションも行われる。また、循環型社会形成推進功労者環境大臣表彰、3R促進ポスターコンクール優秀賞の表彰も予定されている。さらに、3R推進の展示コーナーや新潟市亀田清掃センター、いくとぴあ食花などへの施設見学も実施されるなど、大会期間中は、新潟市から全国に3Rへの取り組みが発信されることになる。

昨年10月に富山市で行われた第13回3R推進全国大会のようす

講演、パネルディスカッションなども行われる

3Rフォーラムのあゆみ

毎年恒例の3R推進全国大会が10月29日に新潟市で開催される。環境省、新潟市とともに大会を主催する3R活動推進フォーラムは、1992年9月に「ごみ減量化推進全国会議」として発足し、2002年には、「ごみゼロパートナーシップ会議」へと改称されることとなった。04年に開催されたG8シーアイランドサミットでは、わが国が3Rイニシアティブを提唱し、循環型社会づくりを国際的に展開していくことが合意され、国内はもとより、国際的にも日本がイニシアティブをとり、さらに強力に循環型社会の形成や3Rを進めていく機運が高まった。これを受けて、06年1月に「3R活動推進フォーラム」が発足することとなった。同フォーラムは、地方公共団体、企業、関係団体、NGOやNPOなどを会員とし、3Rに関する社会的取組みなどを推進しており、その活動は多くの関係者の注目するところとなっている。同フォーラムの事業の柱の一つが3R推進全国大会の開催で、同フォーラムのもっと大きなイベントとなっている。大会には国民・事業者・行政等の幅広い関係者が全国から参集し、それぞれの知識や知見、情報を交換し、参加者一人ひとりがあらためてライフスタイルを見直す機会となる。ごみの減量や再資源化、3R推進の理解を深め、ひいてはごみゼロ社会の実現、循環型社会の形成につなげていくことをねらいとしている。

海洋プラ対策が進展へ

3Rや循環型社会形成の取り組みは、今や世界的な規模で広がっている。SDGsやパリ協定の採択など、世界的にパラダイムシフトが起こっており、こうした問題への取り組みは、行政だけでなく、事業者や国民にも求められており、国も第五次環境基本計画、第四次循環型社会形成推進基本計画を閣議決定している。ここでは、環境・経済・社会の統合的向上を具体化することで新たな成長につなげ、地域循環共生圏の創造に取り組んでいくことなどをうたっている。こうした取り組みを進めることで、環境と成長の好循環を実現するとし、多くの施策が展開されている。

また、今年はG20大阪サミットも開催され、日本が議長国としてイニシアティブをとり、「大阪ブルー・オーシャン・ビジョン」を共有。G20大阪サミット首脳宣言では、循環経済・持続可能な物質管理・3Rおよび廃棄物の価値化などの政策やアプローチを通じた資源効率性の向上がSDGsの達成や環境問題に対応でき、競争力と経済成長、雇用の創出に貢献することを確認。海洋プラスチックごみとマイクロプラスチックへの対応は全ての国が関係者との協力のもと、国内的・国際的に行う必要があることも確認している。また、大阪ブルー・オーシャン・ビジョンを共有し、プラスチックの重要な役割を認識しながら、改善された廃棄物管理や革新的な解決策でプラスチックごみの流出を抑制し、2050年までに海洋プラスチックごみによる追加的な汚染をゼロにすることを目指す。そして、G20エネルギー・環境大臣会合で採択された「G20海洋プラスチックごみ対策実施枠組」を支持するなど世界的な取組を進める一歩となった。また、日本国内では、海洋プラスチックごみ対策アクションプラン、プラスチック資源循環戦略が策定され、環境省では関連の予算要求も行っている。

このように、海洋プラスチック対策で、日本が中心となり世界的規模で対策に取り組むこととなっており、3Rの推進、循環型社会の形成、そして地域循環共生圏の構築が、重要になってくる。

こうした中で、新潟市に関係者が集まり、第14回3R推進全国大会が開催されることは大きな意義があり、大会参加者だけなく、多くの国民が日常から3Rに取り組むことが求められている。

日頃の取り組みに対して、環境大臣表彰などが行われる

行政や多くの団体が3R推進に関する展示も行う（昨年の展示コーナー）

第14回3R推進全国大会プログラム

講演、パネディスカッション、展示など

第14回3R推進全国大会は、10月29日午後1時から新潟市の朱鷺メッセ新潟コンベンションセンター4F国際会議室（マリンホール）で開催される。主なプログラムは次の通り。

【第Ⅰ部】
13時～14時10分・大会式典
▽循環型社会形成推進功労者環境大臣表彰、3R促進ポスターコンクール最優秀賞表彰

【第Ⅱ部】
14時20分～16時25分・記念シンポジウム
○基調講演「SDGsと3R促進、地域循環共生圏構想の推進」（環境省中央環境審議会循環型社会部会委員・3R活動推進フォーラム副会長 崎田裕子氏）
○事例発表「新潟発『ライスバレーにいがたプロジェクト』」（㈱バイオマスレジン南魚沼専務取締役経営企画室長 中谷内美昭氏）
○パネルディスカッション「食品ロス削減へ－これからのイニシアティブ」（コーディネーター・NPO法人持続可能な社会をつくる元気ネット理事長 崎田裕子氏、パネリスト・新潟薬科大学応用生命科学部特任講師 石丸亜矢子氏、イオンリテール㈱北陸信越カンパニー広報・環境社会貢献グループマネージャー 山城博司氏、新潟お笑い集団NAMARA代表 江口歩氏、新潟気軽に省エネくらぶ代表 紫多野千代氏、環境省環境再生・資源循環局総務課循環型社会推進室長 冨安健一郎氏）

【3R推進展示コーナー】
10時～17時30分
▽令和元年度3R促進ポスターコンクール入賞作品▽新潟県▽新潟市▽新潟県内の自治体▽環境省関東地方環境事務所▽3R推進団体連絡会（ペットボトル等容器包装リサイクル法関連8団体）▽3R活動推進フォーラム▽日本再生資源事業協同組合連合会▽リデュース・リユース・リサイクル推進協議会▽新潟県内のNPO・企業団体等

【関連イベント】
○施設見学・新潟市亀田清掃センター、いくとぴあ食花
○にいがた市民環境フェア・10月20日に新潟市の亀田駅前交流センターで開催済み

ウエイスト マネジメント　10月25日

循環型社会へ 3R進めよう
新潟で全国大会

ごみの減量や資源の再利用を図る3R（リデュース・リユース・リサイクル）への理解を深め、循環型社会を目指すための「3R推進全国大会」が29日、新潟市中央区の朱鷺メッセで開かれた＝写真＝。県内外の企業や自治体関係者ら約400人が集まった。

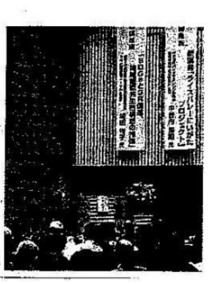
環境省や新潟市などでつくる実行委員会の主催。14回目で、県内では初開催。

記念シンポジウムでは、3R活動推進フォーラム（東京）の崎田裕子副会長が基調講演。「持続可能な開発目標（SDGs）」実現に向け、食品ロス削減や海洋プラスチック問題を取り上げ現状を説明した。

日本は人口1人当たりのプラスチック容器包装の廃棄量が世界第2位であることを指摘し、「新しいライフスタイルの見直しが必要だ」と述べた。

食品ロス削減について考えるパネルディスカッションや、県内企業による事例発表も行われた。

シンポジウムに先立ち、「循環型社会形成推進功労者環境大臣表彰」があり、「新潟気軽に省エネくらぶ」など全国12団体・企業を選出。「3R促進ポスターコンクール」では、新潟市上所小4年の本間裕太君が、小学生中学年の部最優秀賞として表彰された。

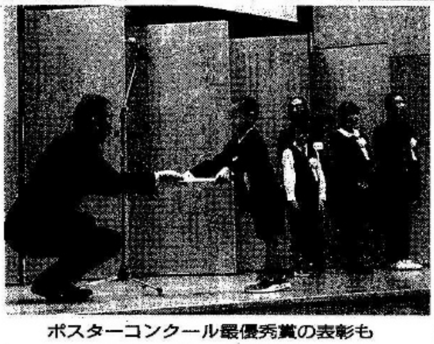


新潟日報　10月30日

ウエイストマネジメント
11月5日

新潟市で3R推進全国大会
環境省、3RFが主催

全国大会は10月29日に行われた


ポスターコンクール最優秀賞の表彰も

第14回3R推進全国大会が、10月29日に新潟県新潟市の朱鷺メッセ新潟コンベンションセンターで開催され、「新型（niigata）イニシアティブ～知識と意識で3Rを推進～」をサブテーマに、記念シンポジウムが開かれた。主催は環境省、新潟市、3R活動推進フォーラムなど。

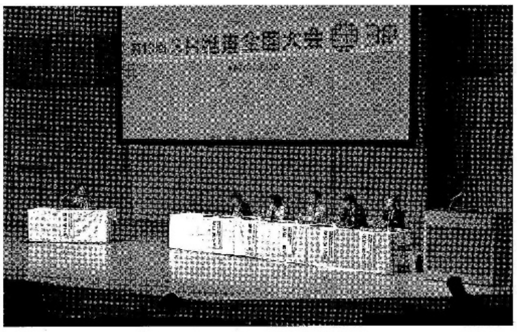
はじめにあいさつした石原宏高環境副大臣は、「恵み豊かな環境を将来の世代に引き継いでいくためには、幅広い関係者が一体となる必要がある。環境省では昨年6月に閣議決定された第4次循環型社会形成推進基本計画のもと、3Rの促進に取り組んでいる。10月は3R推進月間。本大会が3Rに関する一層の取り込み促進の契機となれば」とあいさつした。また、新潟市の中原八一市長は、今年5月に同市でG20新潟農業大臣会合が開かれ、閣僚宣言に食品ロスに関する内容が盛り込まれたことを紹介。「本大会のサブテーマの通り、新潟から3Rの知識と意識が広がっていってほしい」と語った。3R活動推進フォーラムの崎田裕子副会長は、同フォーラムの活動を紹介し、より一層の3R推進を呼びかけた。

大会式典では、循環型社会形成推進功労者環境大臣表彰、3R促進ポスターコンクール最優秀賞表彰も行われた。

続く記念シンポジウムでは、崎田氏が「SDGsと3R促進、地域循環共生圏構想の推進」と題して基調講演。㈱バイオマスレジン南魚沼専務取締役経営企画室の中谷内美昭室長が「新潟発『ライスバレーにいがたプロジェクト』」と題し、事例発表した。同プロジェクトでは、新潟県内で発生した非食用米を使用したバイオマスプラスチック（ライスレジン）を活用。自治体指定ごみ袋をバイオマスプラスチックに切り替える企業・団体と連携してライスレジン製品を開発するなど、新潟発のアクションを展開している。記念シンポジウムではさらに、「食品ロス削減へ！これからのイニシアティブ」と題したパネルディスカッションが行われた。

環境新聞 10月23日

第14回3R推進全国大会
29日、新潟市で開催
「新型（niigata）イニシアティブ～知識と意識で3Rを推進」


昨年の富山大会では、「資源効率性を高めた地域循環共生圏の形成」をテーマにパネルディスカッションが行われた（提供：3R活動推進フォーラム、以下同じ）

環境省と新潟市、3R活動推進フォーラムは29日、新潟市の朱鷺メッセ新潟コンベンションセンターで「第14回3R推進全国大会」を開催する。同大会は、国民、事業者、行政が一堂に会し、それぞれの取り組みや知見を共有・発信することにより、3Rに関する理解と取り組みを促進するのが狙い。今大会では、「新型（niigata）イニシアティブ～知識と意識で3Rを推進」をスローガンに、食品ロス削減や海洋プラスチックごみの削減などについて、先進的な取り組みの発表やパネルディスカッションを含めた記念シンポジウムを行う。

大会では初めに大会式典として、循環型社会形成推進功労者と3R促進ポスターコンクール最優秀賞の表彰式が行われる。

記念シンポジウム

大会式典後の記念シンポジウムでは、中央環境審議会循環型社会部会委員で3R活動推進フォーラム副会長の崎田裕子氏が「SDGsと3R推進、地域循環共生圏構想の推進」をテーマに基調講演する。続く事例発表では、新潟発「ライスバレーにいがたプロジェクト」についてバイオマスレジン南魚沼の中谷内美昭・専務取締役経営企画室長が講演する。

講演終了後には、「食品ロス削減へ！これからのイニシアティブ」と題したパネルディスカッションが行われる。コーディネーターは、基調講演する崎田裕子氏（NPO法人持続可能な社会をつくる元気ネット理事長）。石丸亜矢子氏（新潟薬科大学応用生命科学部特任講師）、山城朋子氏（イオンリテール北信越カンパニー広報・環境社会貢献グループマネージャー）、江口歩氏（新潟お笑い集団NAMARA代表）、波多野千代氏（新潟気軽に省エネくらぶ代表）、堀健一郎（環境省環境再生・資源循環局総務課循環型社会推進室長）。

3R推進展示コーナー

会場内の3R推進展示コーナーでは、19年度3R促進ポスターコンクールの入賞作品のほか、新潟県や新潟市、県内自治体、環境省関東地方環境事務所、3R推進団体連絡会（ペットボトル等容器包装リサイクル法関連8団体）、3R活動推進フォーラム、日本再生資源事業協同組合連合会、リデュース・リユース・リサイクル推進協議会、県内のNPOや企業などが、3R関連の取り組みを紹介する。

関連イベント

また当日の式典前には新潟県の主催で、新潟市亀田清掃センター、いくとぴあ食花の施設見学会を開催する。亀田清掃センターは、1日300tのごみを処理できる新潟県最大のごみ処理施設で、焼却した熱を利用して最大5000kWを発電している。

全国大会に関する問い合わせは、3R活動推進フォーラム内にある実行委員会事務局（03・6000・7311）まで。

昨年の循環型社会推進功労者環境大臣表彰では、富山県の中越パルプ工業など10の企業・団体が表彰された

昨年の3R推進展示コーナーの様子。写真中央が崎田氏、その左が秋元司環境副大臣（当時）

循環経済新聞 11月18日

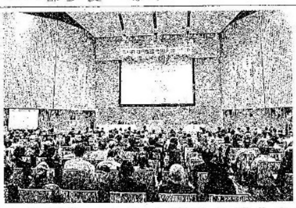
3R推進全国大会

食ロス削減で議論活発
新潟から全国に情報発信

環境省、新潟市、3R活動推進フォーラムは10月29日、「第14回3R推進全国大会」を新潟市内で開催した。当日、会場を訪れた石原宏高環境副大臣は、開会あいさつの中で「昨年6月に閣議決定された第4次循環基本計画のもと、3Rの促進に向けて今大会を一層の取り組みの契機とし、全国に対する効果的な情報発信の機会に」と訴えた。

「新型（niigata）イニシアティブ～知識と意識で3Rを推進」をスローガンに開かれた今大会は、食品ロスや海洋プラスチックごみの削減についての発表やパネルディスカッションが行われた。

事例発表では、バイオマスレジン南魚沼専務の中谷内美昭氏が、新潟県産非食用米を使用したバイオマスプラスチックで環境先進都市を目指す「ライスバレーにいがたプロジェクト」について報告。NPO法人持続可能な社会をつくる元気ネット理事長の崎田裕子氏をコーディネーターに、県内のNPO、企業などをパネラーに迎えた最後のディスカッションでは、食品ロス削減をテーマに熱心な議論が交わされた。


約400人が参加した大会のようす

パネラーの1人で、新潟お笑い集団NAMARAの代表を務める江口歩氏は、「（外食で）海外では可能な食事の持ち帰りが、日本でなぜできないのか。誰がダメといっているのか、種を明かしてほしい」など、率直な発言で会場を沸かせ、効果的な連携の在り方に話が及ぶと「経済とエンタメの連携」という独自の視点からの仕組みづくりを提案した。

崎田氏は、食品ロス削減に向けて▽定量化して課題を把握することと▽次世代に伝えることと▽ステークホルダー同士の連携協働——の3点をポイントに挙げて議論を整理し、最後を締めくくった。

知識と意識で3R推進へ

新型(niigata)イニシアティブを！

◉ 3R推進全国大会in新潟

会場に到着した石原環境副大臣(右)に、展示スペースを案内する崎田副会長

式典のもよう。会場となった朱鷺メッセは、今年5月に開催されたG20新潟農業大臣会合でも使用された

環境省、環境省関東地方環境事務所、新潟市、3R活動推進フォーラム主催による第14回3R推進全国大会in新潟が10月29日、朱鷺メッセ 新潟コンベンションセンター4階の国際会議場（マリンホール）で開催され、約400人が参加した。当日は、第1部の式典で2019年度循環型社会形成推進功労者環境大臣表彰と2019年度3R促進ポスターコンクール最優秀賞の表彰、第2部の記念シンポジウム「新型（niigata）イニシアティブ～知識と意識で3Rを推進～」で基調講演と事例発表が行われ、最後のパネルディスカッションで大いに盛り上りをみせた大会となった。

記念式典では、主催者を代表して、環境省から石原宏高環境副大臣、新潟市から中原八一市長、3R活動推進フォーラムから崎田裕子副会長（NPO法人持続可能な社会をつくる元気ネット理事長）が順に開会のあいさつ。表彰式では、2019年度の循環型社会形成推進功労者として6企業6団体に、3R促進ポスターコンクール最優秀賞として4部門4人に、石原環境副大臣から表彰状が授与された。

記念シンポジウムでは、「SDGsと3R推進、地域循環共生圏構想の推進」をテーマに、3R活動推進フォーラムの崎田副会長が基調講演、「新潟発『ライスバレーにいがたプロジェクト』」について㈱バイオマスレジン南魚沼専務取締役・経営企画室室長の中谷内美昭氏が事例発表を行った後、崎田氏をコーディネーターに、環境省・NPO・企業などから5人をパネラーに迎えてのパネルディスカッションに移行した（詳細は後記）。

最後に、次年度の開催地となる和歌山県から環境生活部環境政策局長・古川勉氏があいさつし、閉会となった。

この他、国際会議場のロビーでは、2019年度3R促進ポスターコンクール入賞作品の展示や、3R推進展示コーナーが設けられ、展示コーナーでは31団体が日頃の活動や取り組みを紹介。関連イベントでは、新潟市と3R活動推進フォーラム主催の施設見学会が午前中に行われ、同市亀田清掃センターを見学した。

石原環境副大臣の開会あいさつ

「人類の生存の基盤である恵豊かな環境を、将来の世代に引き継いでいくためには、3Rを徹底した循環型社会を、国民をはじめ関係者が一体となって構築することが重要である。本日表彰を受けられる皆様には、心からお祝いを申し上げるとともに、今後の一層の活躍を期待したい。環境省では、第4次循環型社会形成推進基本計画のもと、3R促進に向けた取り組みを進めており、本大会が一層の取り組みの契機となり、全国への効果的な情報発信の機会となることを心から祈念する」

中原新潟市長の開会あいさつ

「今年5月には同じ会場でG20新潟農業大臣会合が開催され、閣僚宣言では、食品ロス削減に関する内容も盛り込まれた。同じ年に3R推進全国大会を新潟市で開催できることは、大変意義深く、誇りと喜びを感じている。本日の大会が今後の取り組みのきっかけやヒントになり、大会サブテーマの通り、新潟から3Rの知識と意識が広がっていくことを、心から願う。本市としても、今日を新たなスタートに3Rを推進し、循環型社会の形成を加速していく」

㊤2019年度循環型社会形成推進功労者環境大臣表彰受賞者
㊦循環型社会形成推進功労者環境大臣表彰と、3R促進ポスターコンクール最優秀賞表彰の授賞式のもよう

2019年度3R促進ポスターコンクール最優秀賞作品

[小学生低学年の部]	[小学生中学年の部]	[小学生高学年の部]	[中学生の部]
石川県金沢市 小坂小学校1年生	新潟県新潟市立 上所小学校4年生	愛知県安城市立 新田小学校6年生	愛知県知立市立 知立南中学校2年生

2019年度　循環型社会形成推進功労者　環境大臣表彰　受賞者

◆3R活動優良企業
金鶴酒造株式会社
坂井森林組合
平林金属株式会社
水島エコワークス株式会社
株式会社ジェヌインアールアンドディー
株式会社博水

◆3R活動推進功労(団体)
青森県生活協同組合連合会
　生活協同組合コープあおもり 青森県民生活協同組合
緑のリサイクル・ソーシャル・エコ・プロジェクト・チーム
新潟気軽に省エネくらぶ
富山県立砺波工業高等学校生徒会
社会福祉法人愛和会　エポック翼
和気町環境衛生指導員協議会

基調講演をする崎田氏。食品ロスや海洋プラスチックの問題を取り上げ、SDGsの目標実現に向けてライフスタイルの見直しが必要なことを訴えた

事例発表を行った㈱バイオマスレジン南魚沼の中谷内氏は、新潟県産非食用米を使用したバイオマスプラスチックで環境先進都市を目指す「ライスバレーにいがたプロジェクト」について報告

持続可能な社会をつくる元気ネットの展示ブースで、石原環境副大臣が「3RクイズdeビンゴJ」に挑戦。ボトル入りの洗剤を詰め替え用に変えたら廃棄プラスチック量はどれくらい減る?」の三択問題に見事正解！

ロビーには3Rポスターコンクールの入賞作品が展示された。今年度は全国から合計5540点の応募があり、各部門で最優秀賞1点、優秀賞3点、佳作10点が選定された

闊達な議論が展開されたパネルディスカッション

パネルディスカッションでは、環境省環境再生・資源循環局総務課循環型社会推進室長・冨安健一郎氏、新潟薬科大学応用生命科学部特任講師・石丸亜矢子氏、イオンリテール株式会社北陸信越カンパニー広報・環境社会貢献グループマネージャー・山城篤司氏、新潟お笑い集団NAMARA代表・江口歩氏、新潟気軽に省エネくらぶ代表・波多野千代氏――の5氏をパネラーに迎え、「食品ロス削減へ！　これからのイニシアティブ」をテーマに意見交換を行った。コーディネーターを、3R活動推進フォーラム副会長の崎田氏が務めた。

「持ち帰り」はなぜダメ？

議論を進める中で、中盤で盛り上がりをみせたのが、飲食店などで利用者が食べきれずに残した料理の「持ちかえり」についての話題だった。

石丸氏は、「SDGsも同様だが、最近は食品ロスという言葉が浸透し、多くの人の意識に上るようになったが、率先して行動をするようにはなっていない」と前置きしたうえで、「レストランなどで食べ残した食品のうち、火が通っていて、利用者が持ち帰って自己責任で食べきります、と伝えても、店側から『無理です』と断られるケースがまだまだ多い。海外では、食べきれなかった食品の持ち帰りは当たり前にできるのに、日本ではこうしたことが進んでいない」と指摘した。

22年前に新潟で地方発のお笑い集団を立ち上げ、ホテルなどの宴会で余興をする機会が多いという江口氏は、「ホテルの営業で、誰も聞いていないところで余興をして散々苦労しても、余った料理は僕らの飯になる。売れない芸人などは持ち帰りたいからタッパも持ってくる。でも『ダメです』となるわけ。でも、本当に持ち帰りたい。なぜ海外では持ち帰りがOKなのに、日本ではだめなのか、その原因が聞きたい。誰がダメだと言っているの？　消費者目線からも、もう少しタネを明かしてほしい」と疑問をぶつけた。

こうした発言を受けて、崎田氏は「以前は食品の安全のことを考えて、保健所などが持ち帰りはやめてもらうように、飲食店などに指導をされていたが、最近は食品ロスが増えているので、保健所などの指導も変わってきていると思う」とし、環境省の冨安氏に情報提供を求めた。

冨安氏は、「『持ちかえり』について、消費者庁の主導で今年4月に開催した『もったいないを行動に！　食品ロス削減のための戦略企画会議』の議論を踏まえて、外食時のおいしく『食べきり』ガイドを作成し、この中で、残った料理は自己責任の範囲で持ち帰りが可能なことが示されていること、5月下旬には、消費者庁・環境省・農水省の連名で都道府県の担当部局に通知し、合わせて厚生労働省からも都道府県の衛生主管宛に情報提供している旨を説明した。

江口氏の「簡単に言うとどういうこと？」の問いに、冨安氏は「自己責任で持ち帰りすることを、利用者が意志表示をしたら、店側も可能な範囲で対応していただくようにお願いしている」とし、崎田氏も「いままでは安全性を強調した指導だったが、やはり火の通ったものなら、自己責任で持ち帰ってもらってもよいという流れになり、政府も発信の仕方を変えている。地域のいろいろな宴会のときにも、そういう話をホテルなどに伝えてほしい」と補足した。

わかりにくい食品の期限表示

波多野氏は、消費者の立場から、食品の直接廃棄問題に触れ、「賞味期限はおいしさの目安なのに、期限が来たからと言って、すぐに捨ててしまう消費者が多く、賞味期限を消費期限と勘違いしていることもある」と指摘し、「『賞味期限』、『消費期限』は、ひらがなで書くと1字しか違わない。『ストップ』、『セーフ』などの、お年寄りでもわかるような簡単なネーミングなら消費者は行動を起こしやすかったはず」と訴えた。

イオンの山城氏は、スーパーマーケットを展開する事業者としての取り組みについて「食品廃棄物の発生原単位で、2015年度を基準に、2020年までに25％削減、2025年までには50％削減という社内的な目標を、対外的にも公表し、売り上げと同様に、廃棄物についても店舗の段階で見える化して削減していく方針で進めている。事業者としては廃棄物の見える化と、規格外の商品でも積極的に売っていく取り組みを続けていきたい」と説明。

フードバンクの活用に話が及ぶと、「まずは売り切ることが最優先の業務と考えているので、最終的に残りそうなものや、消費期限が迫ったものは、試食でお客様に食べていただいて、廃棄量を減らす努力をしている。フードバンクの活用については、自治体や地域のステークホルダーと連携をしながら取り組みをしている店舗もあるが、地域ごとの特性があるので、新潟の店舗でも参加できるような体制が整えば、そうした前例を範にすすめていきたい」とした。

新型イニシアティブへ

最後に、今回のテーマである「新型イニシアティブ」と関連して、石丸氏は「（食品ロス削減の）気持ちをもつことも大事だが、行動に移すためには国・民間・大学などの各ステークホルダーが、自分が主体だと考え、連携していくための仕組みづくりをし、つないでいくことが重要」と指摘。江口氏は「新潟は経済とエンターテイメントが分離してしまっている。新潟には多くのエンタメの方がいるので、皆で組んで、経済界を巻き込みながら同時多発で情報発信していくようなチームがあれば、もっと面白い展開ができると思っている。そういう動きを別角度でやっていきたい」と力を込めた。

冨安氏は、「食品ロス削減の取り組みには、まず現状を知ること、そしてその取り組みの手法を知ることが重要」とし、環境省が提供している自治体向け取り組みマニュアルについて、「自治体だけではなく、自治体や国に対して提案する上でも有益な情報を発信しているので、ぜひ皆様に活用いただきたい」と訴えた。

最後に崎田氏は、食品ロス削減に向けたポイントとして、議論全般を踏まえたかたちで▽定量化して課題を把握すること▽次世代に伝えること▽ステークホルダー同士の連携協働――の3点を挙げて締めくくった。*W*

（本誌・新倉）

パネルディスカッションのようす

古紙パルプ配合率80％再生紙を使用

リサイクル適性の表示：紙へリサイクル可
本冊子は、グリーン購入法に基づく基本方針における「印刷」に係る判断の基準に従い、印刷用の紙へのリサイクルに適した材料〔Aランク〕のみを用いて作製しています。

この製品は，古紙パルプ配合率 80％の再生紙を使用しています。このマークは，３Ｒ活動推進フォーラムが定めた表示方法に則って自主的に表示しています